

第210图 1号建物出土遺物図説

2号建物（第211～236図 P L46～48・127～135）

18HL-6～9グリッド、谷頭の削平段に南面する有礎瓦葺建物である。大半は調査区域外にあるが、西梁間の礎石列と南桁行柱穴列が検出されている。推定される間口最大7間、奥行き5間の規模と、現況の地形からは寺の中心建物と考えられる。

削平段は、推定東西25m、南北20mの規模である。谷頭から尾根の斜面にかけて矩形に削り込み、その残土で谷地側に盛土を施して広く整地している。6号道がある整地面とは1m弱の段差があり、南を正面観とすると一段高い所に建物がある。南側を含めると南北40mあり、さらに東には17区STビット群がある削平段に続いている。斜面中段の1号建物とは、8m近い段差がある。

建物は、高さを異にする礎石列、それに対応する整地面から3期に変遷する。

調査時の所見では、下記の7点があげられる。

- 1 礎石は、N-30'-W前後で一致するが若干のずれがある。
- 2 礎石は、その位置により二重、三重になっている。
- 3 2期、3期の礎石は、被熱により剥落しているものがある。2期の礎石を焼土と炭の層が覆うことから火災による再建が推定される。
- 4 これらの礎石は、土層断面の観察からAs-A降下以前にすべて埋没している。
- 5 整地は、切り土主体で行われているが、北側は地山を深く削り、南側は比較的少ない。なお、南側はAs-B層前後に整地面がある。
- 6 瓦の出土は、3期相当面とその整地面に多い。
- 7 建物の規模としては、電探調査の結果と合わせて方5間と推定される。

以上のことから、建物は3度の変遷がありながら、創建当初の場所ではほぼ同一の規模で存続していたことがわかる。規模、そして連続性の点が1号建物にはない特徴である。礎石の大きさも、1号建物に比較してほとんどが50cm前後と大ぶりであることも、規模が反映されている。

整地面は、第1期が160.40m前後、第2期が160.55～60m、第3期が160.70～80m、礎石は整地面の上に直に置いたままである。整地面に特に堅きはみられず、礎石のための明瞭な掘り方もない。

建物の構造は、方5間と推定される。礎石列西側のビットは、推定プランに含めたが庇か縁か、礎石以前の建物なのか検討の余地がある。最終の掘り方調査で検出されたものが半数、雨落溝の外側にある。

第1期は、2つの礎石が柱間500cmである。間隔では、抜き取られた残りともみべきであろう。

第2期は、7つの礎石がある。柱間は北から150、200、220、220、180、180cmである。南桁行に3石あるが検討の余地を残す。6号井戸は、2期か1期に伴う。

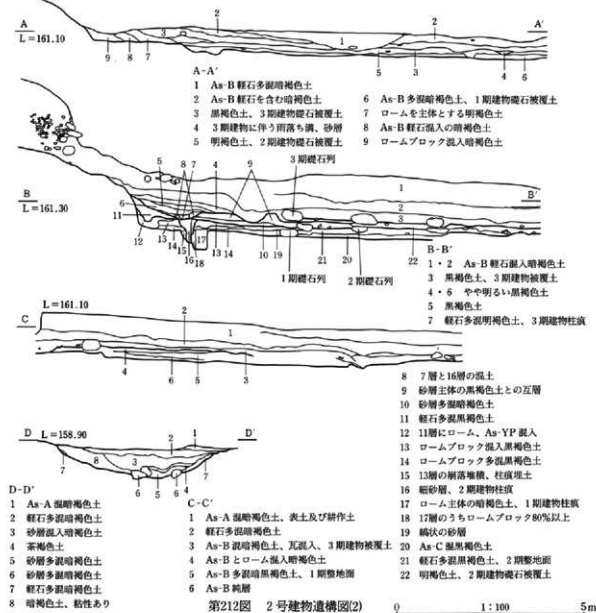
第3期は、6つの礎石がある。柱間は北から200、190、230、170、260cmである。

瓦は、2期整地土と3期面で大半が出土している。1号建物と同じく、三巴文軒丸瓦と陽刻下向き剣頭文軒平瓦の組み合わせである。組成は、2種類のほかに丸、平、鬚斗、面戸、鬼の各種類がある。遺存状態は、破片が大半で接合率も1号建物に比較して低い。再建で整地土に敷き込まれたためである。鬼瓦の分布をみても、破片でしかも整地面全体に散在している。

時期は、瓦の年代観から13世紀後半から14世紀前半の創建、その後2度の再建がある。新しい要素として、6号道の2期の掘り方に室町時代後半の五輪塔火輪があること、その西には2点の鉄砲玉が出土した土坑があることなどから、16世紀以降にも寺としての意識が残ったのであろうか。建物背後にある墓が、その傍証のようでもある。



第211图 2号建物遺構図(1)

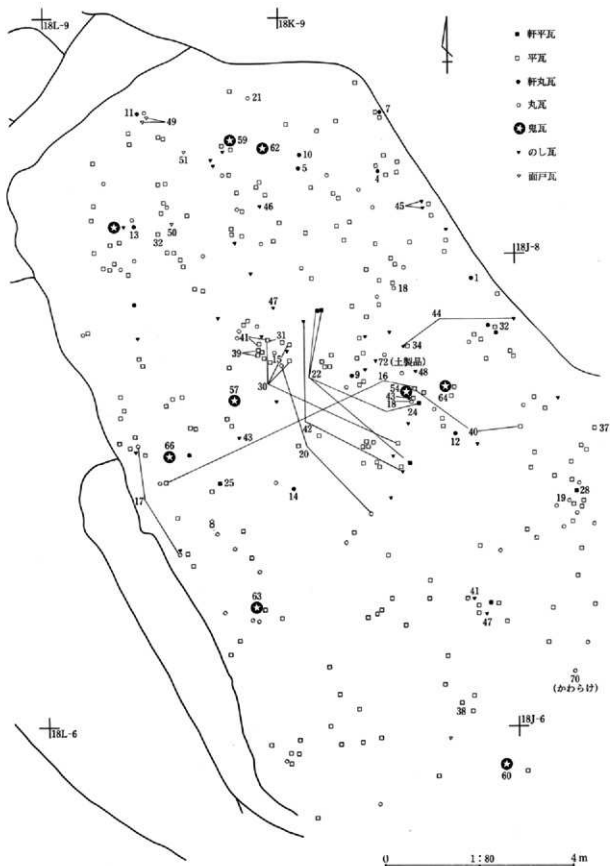


瓦は、破片数424点、釘は、300点余りがある。鉄釘、銅釘の2種類があり、瓦釘も含まれている。平折釘が最も多く、角釘がこれに次いでいる。建物の南西方向に集中する傾向があり、倒壊を示すものであろうか。これと重複するように大きな破片の瓦が出土している。

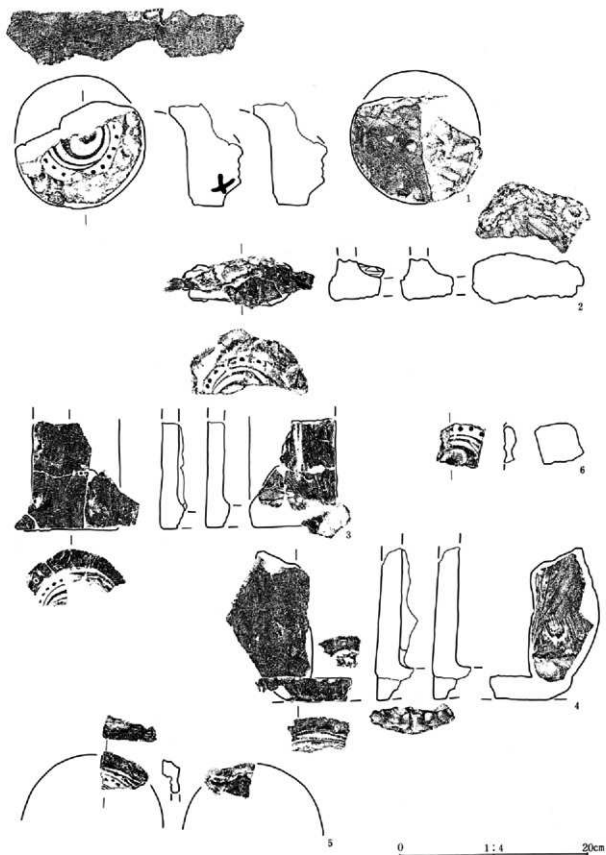
鉄釘は、16.8cmを最長に、以下11cm、9cm、7cmに法量上の集中域がある。銅釘は5cm前後、赤く彩色されたものがある。建物でも内部と外部とに、用途に応じて使い分けられたものであろう。

遺存状態は、いずれも良好で調査時の取上げで折損したものを含めても完存例が殆どである。中に被熱したのがあり、2期の火災に相当するものであろう。折れ曲がりの状態は、くの字、Sの字、しの字の3つに分類できる。数としては、直が大半である。くの字では、頭部折り曲げから端部折り曲げまで細分ができる。木質の付着状態や彩色の具合からは、頭まで打ち込まずに、本来が折り曲げていたようである。その長さからすれば、大半は板か1寸程度の角材を打ち付けたものであろう。

このほか金属製品には、魚々子をもつ飾金具1点がある。



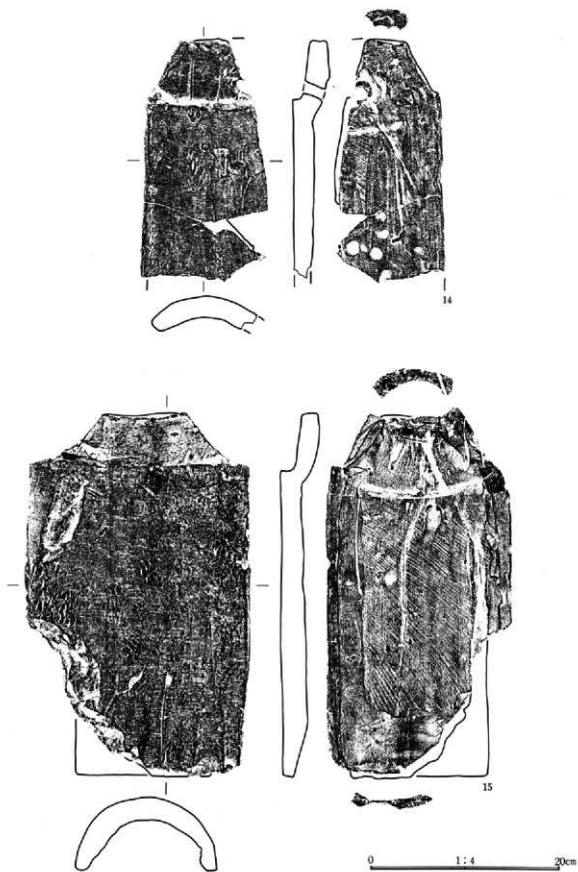
第213図 2号建物瓦出土図



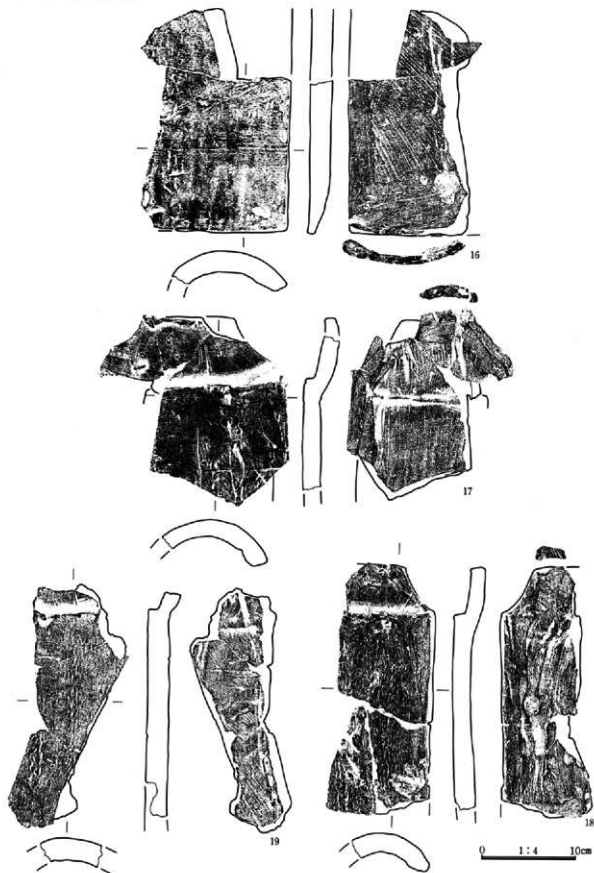
第215图 2号建物出土遺物图(1)



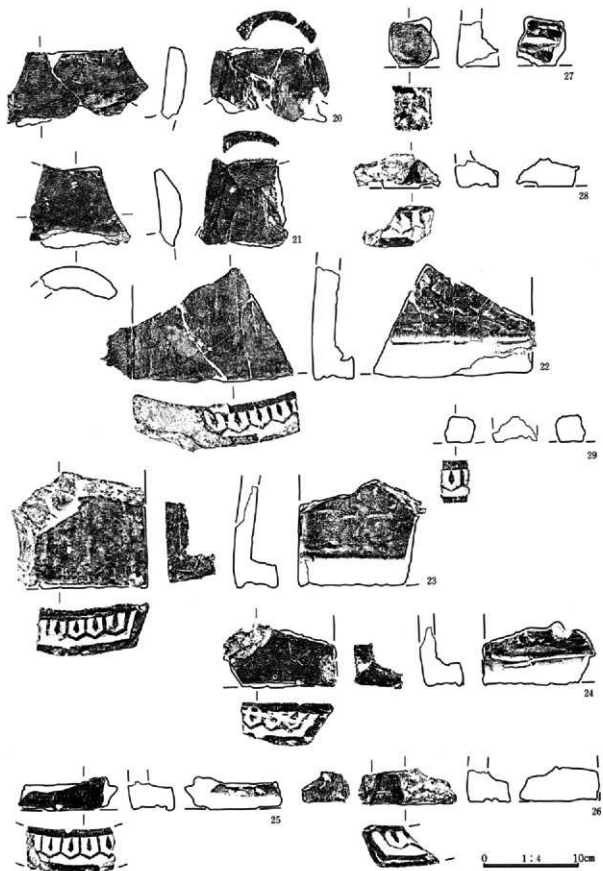
第216図 2号建物出土遺物図(2)



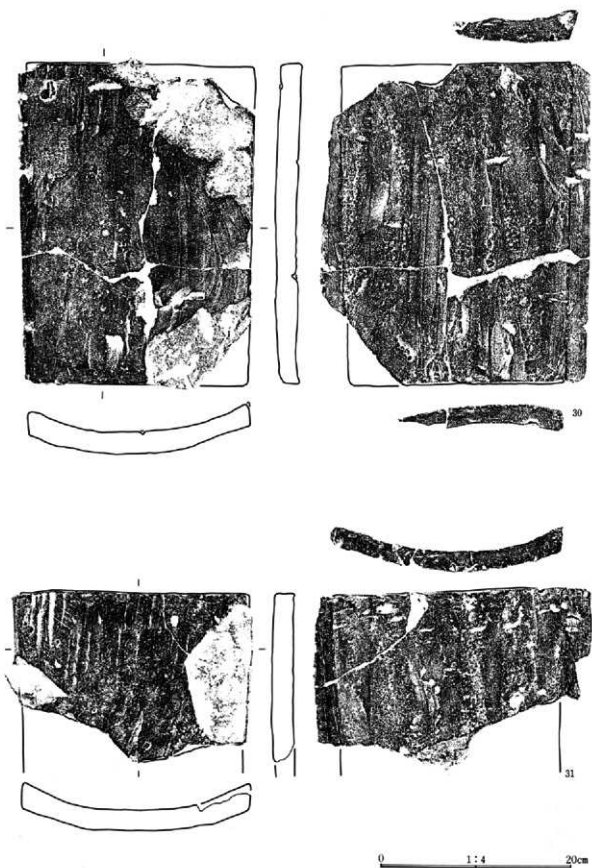
第217图 2号建物出土遺物図(3)



第218図 2号建物出土遺物(4)



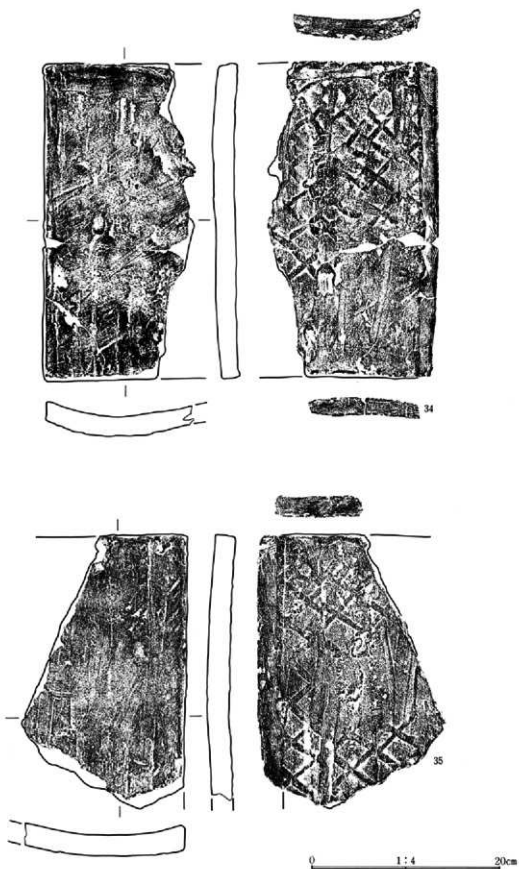
第219图 2号建物出土遺物(5)



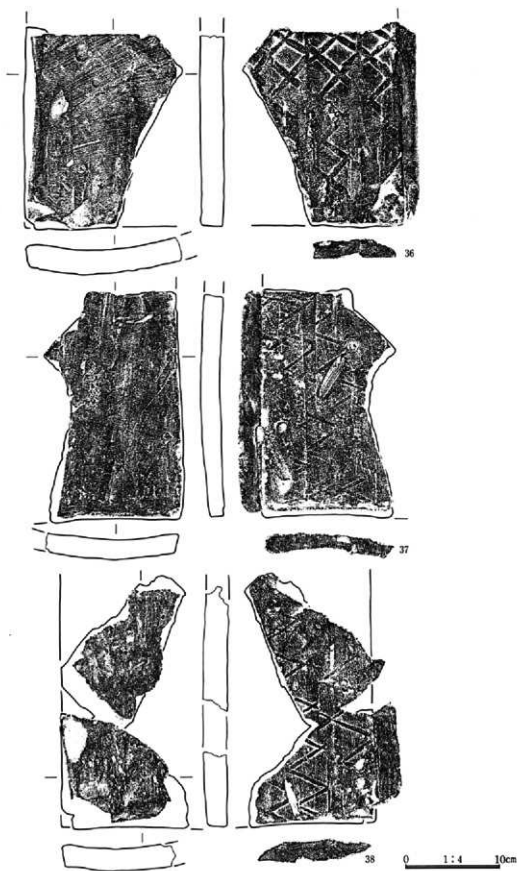
第220図 2号建物出土遺物図(6)



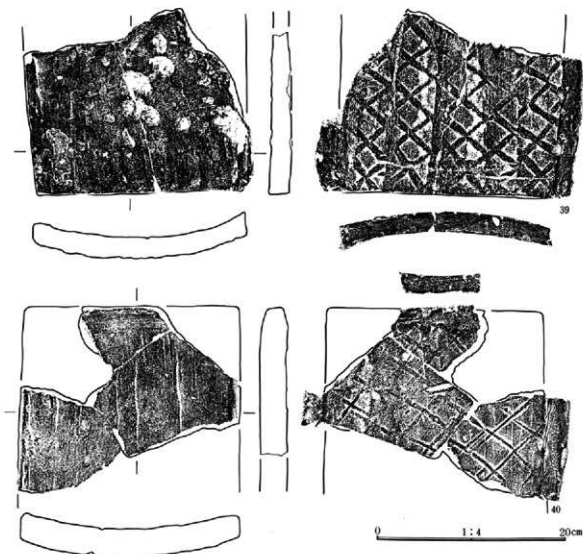
第221图 2号建物出土遺物図(7)



第222図 2号建物出土遺物図(8)

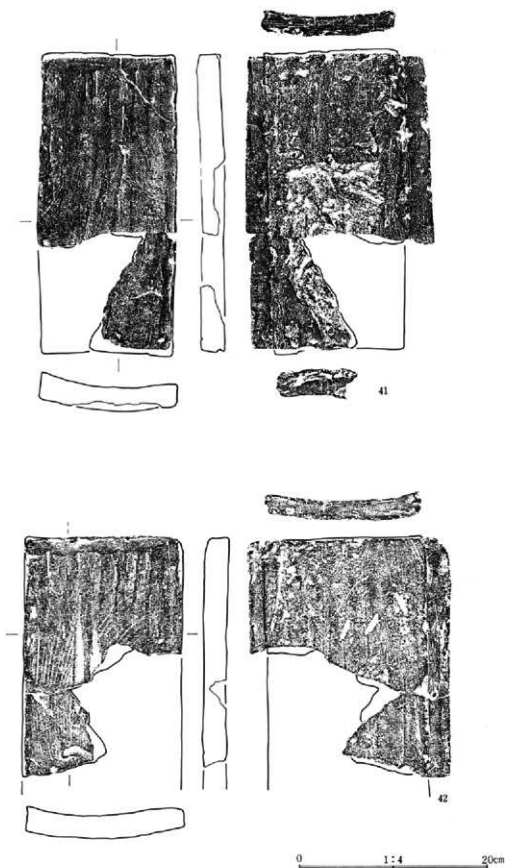


第223图 2号建物出土遺物図(9)

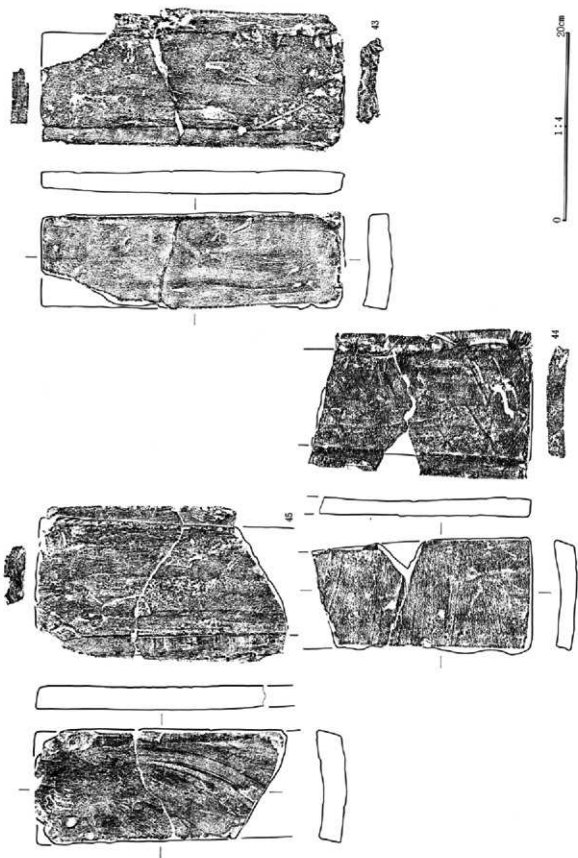


第224図 2号建物出土遺物図00

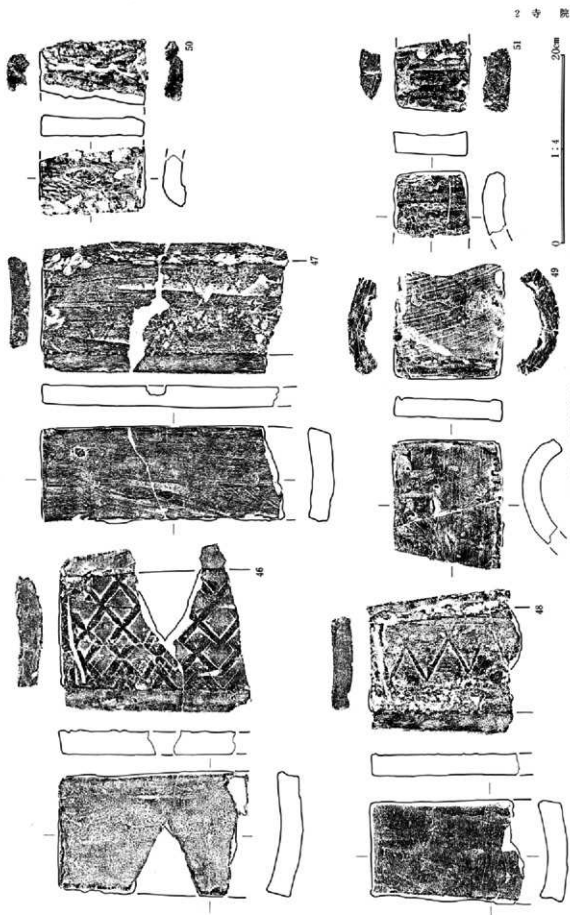
2号建物は、424点の瓦が出土している。1号建物に比較して、瓦の組成や個別の特徴に大差は見られないが、接合率が低く、破片も小さいのは度重なる再建とそれに伴う整地によると考えられる。軒丸瓦は、珠文三巴文、珠文は2本の圈線で囲まれ、面径その他の特徴で1号建物と同范とみてよい。瓦当貼付け、内面は丁寧にナデつけられている。丸瓦は、凸面綱目タタキ、凹面には布目痕を残す。軒平瓦は、隅刻下向き剣頭文のみである。瓦当貼付け、剣中の縞は太く菱形に表現されている。平瓦は、1号建物同様に表裏ナデ整形の一群と凸面に格子目タタキを持つ一群とに分けられる。後者が数の上では多く、やや厚くて大振りなものがある。熨斗瓦は、平瓦を焼成前に半載したものと凸面格子目タタキで1枚作りのものがある。数比の上では前者が多い。面戸瓦は、玉縁付丸瓦を焼成前に裁断したもので凸面に綱目タタキがある。鬼瓦は、少なくとも胎土や焼成の点から5個体以上に分けられる。1号建物に比較して、やや小振りで大棟よりは隅棟を飾るタイプかと思われる。



第225图 2号建物出土遺物図01



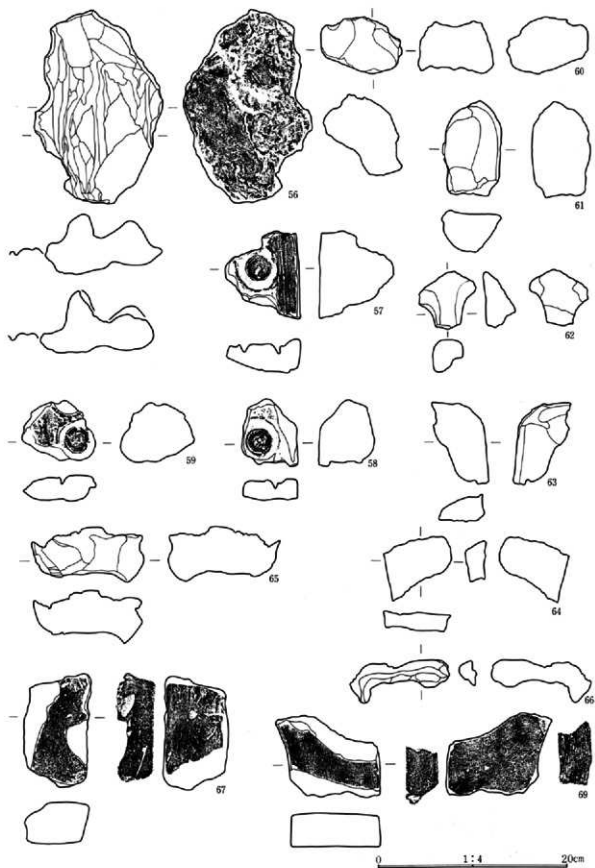
第226図 2号建物出土遺物図②



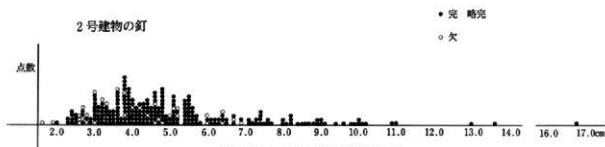
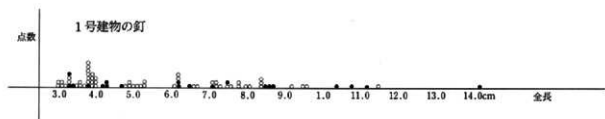
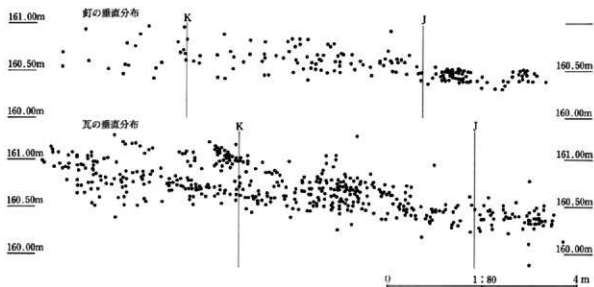
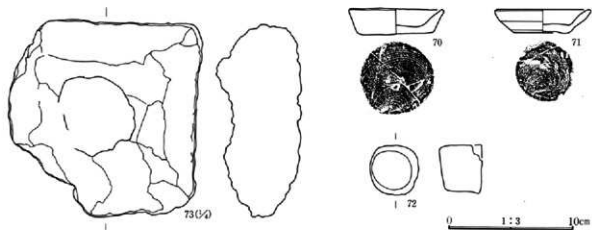
第227图 2号建物出土遺物図面③



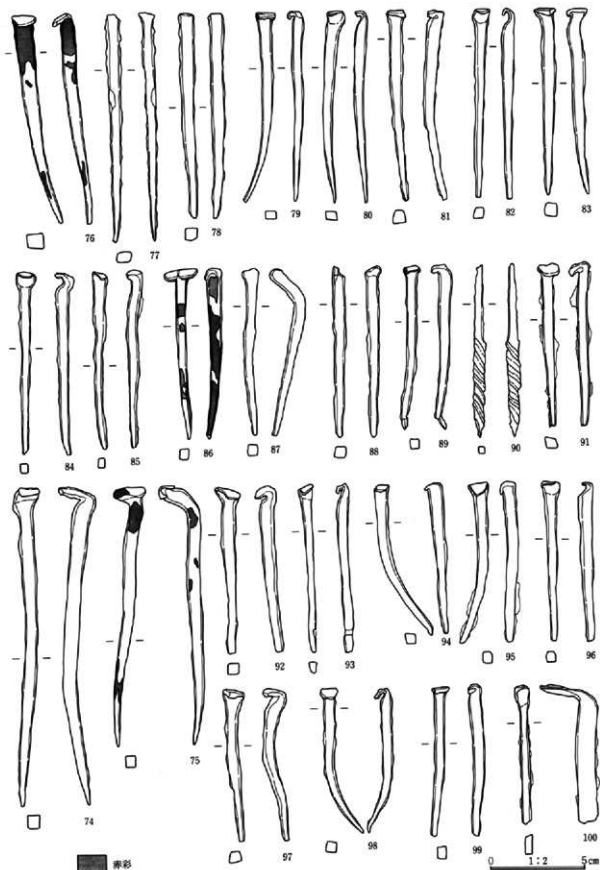
第228図 2号建物出土遺物図00



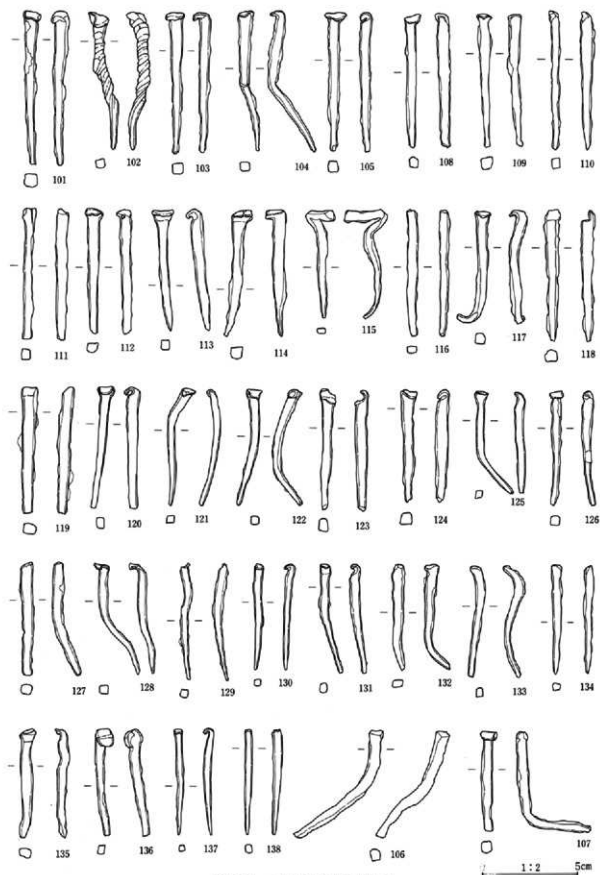
第229图 2号建物出土遺物図説



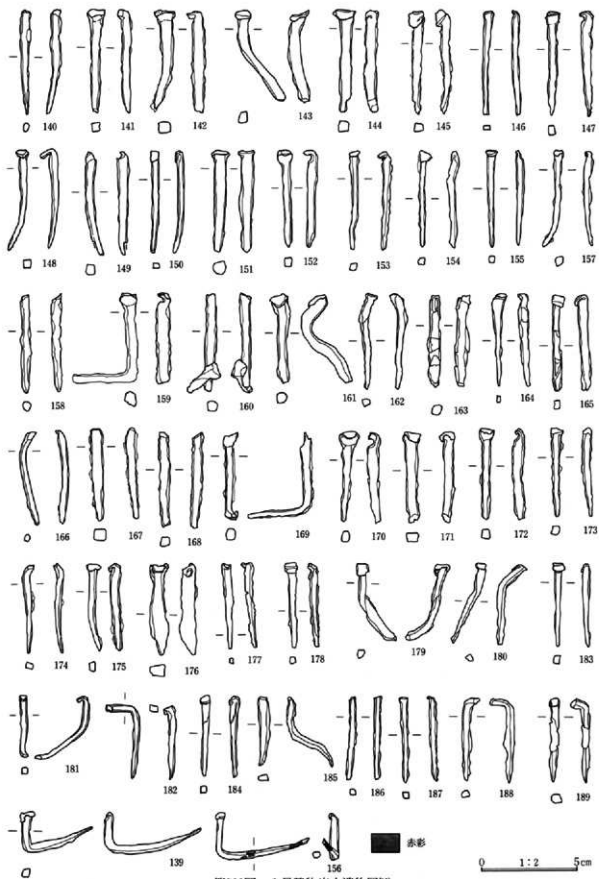
第230図 2号建物出土遺物図06



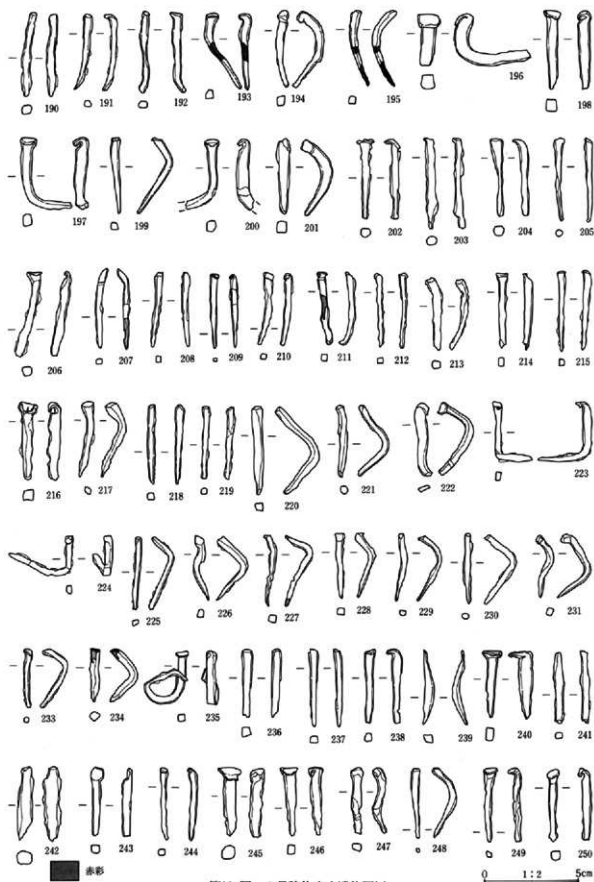
第231图 2号建物出土遺物図(07)



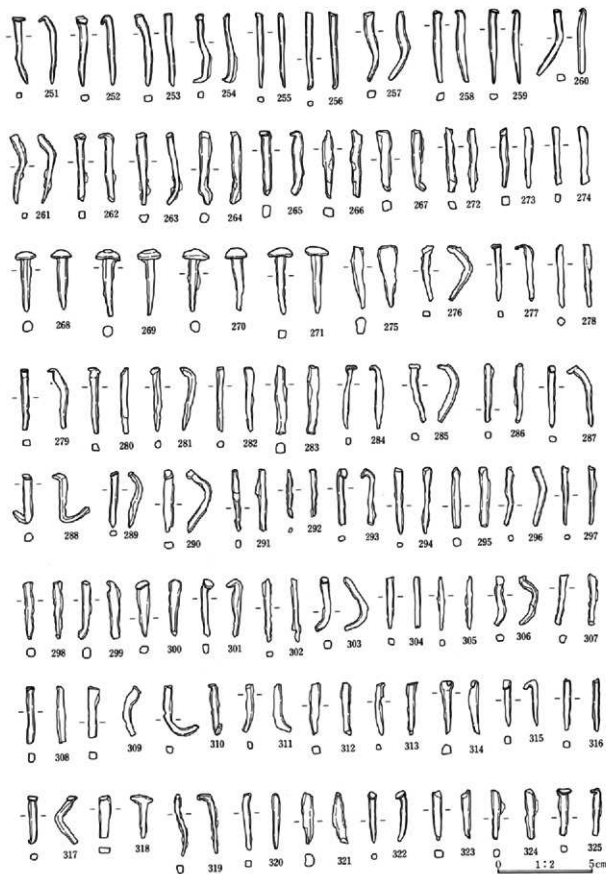
第232図 2号建物出土遺物図(10)



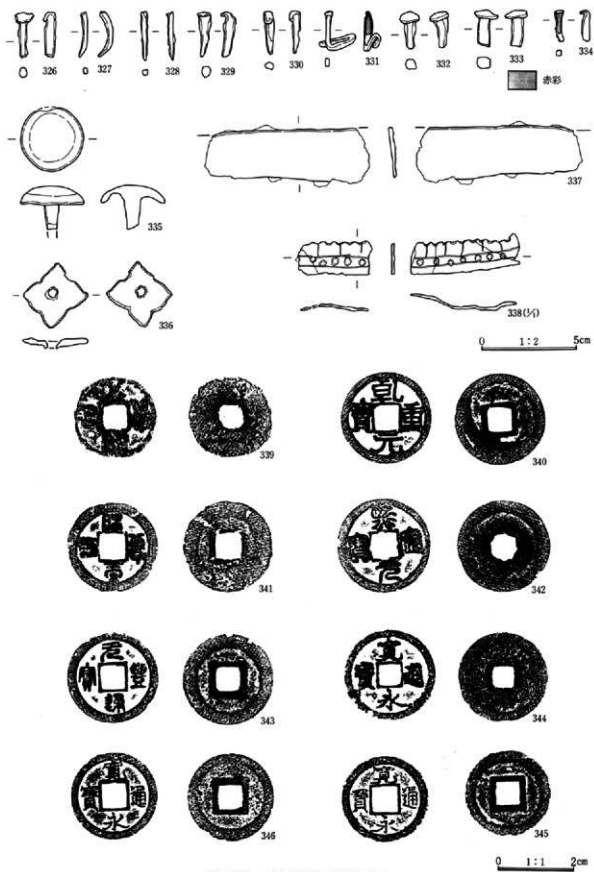
第233图 2号建物出土遺物図例



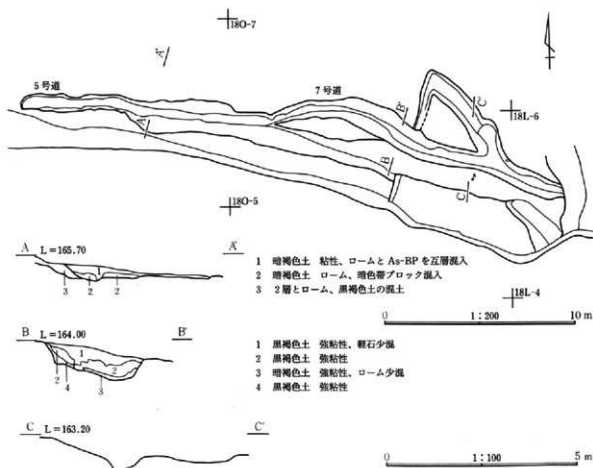
第234図 2号建物出土遺物図(20)



第235图 2号建物出土遺物図20



第236図 2号建物出土遺物図(2)



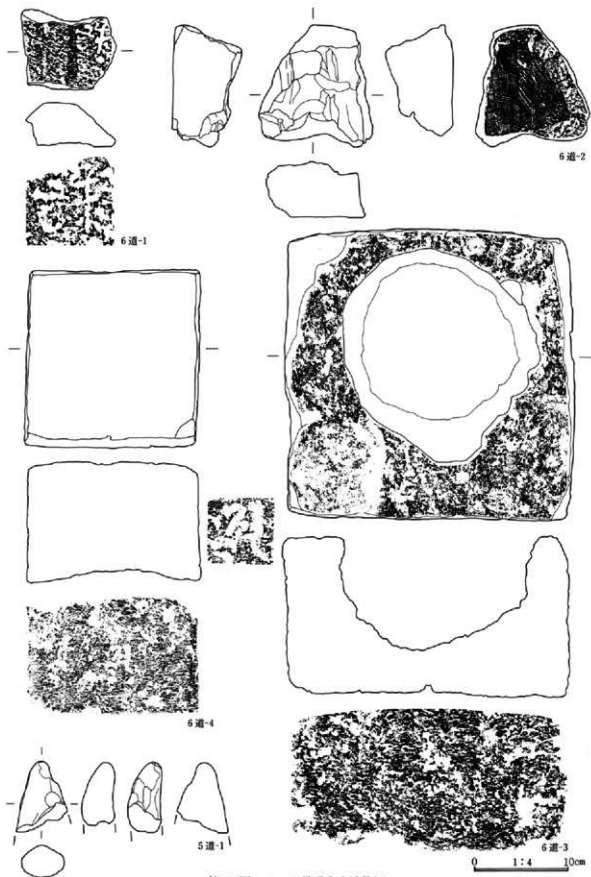
第237図 5・7号道構造

5号・7号道 (第237・238図 P L63・145)

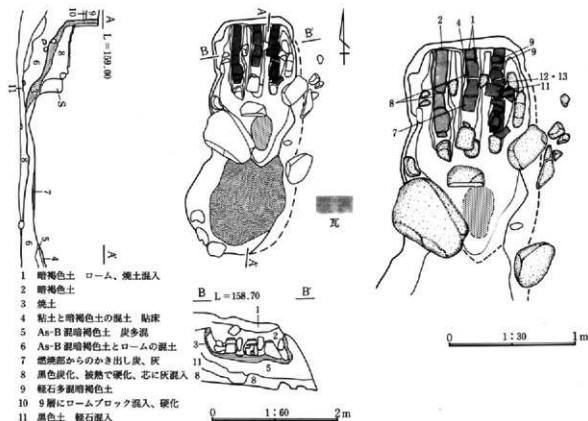
18K~Q-4・5グリット、2号建物の南西隅から1号建物、さらに北側斜面をほぼ直に登る道である。長さ30mにわたり検出されている。7号は5号から枝分かれしたものである。6号道からつながり、掘り方の特徴からは6号・8号溝が続くものと推定される。上幅2mをこす溝状の掘り方の中に、幅60cmの硬化面がある。埋没状態からは、2回以上の掘り直しが考えられる。

6号道 (第211・238図 P L63・148)

18E~G-3~5グリットにある。寺へ入る中心の道と考えられ、2号建物の正面にあたる。左手斜面に登る5号、7号道は分岐したものである。As-B 混整地面から70cmほど掘り込み、そのまま硬化させて路面を作る。埋没状態からは、3期にわけられる。1期は上幅5m近い大きな掘り方で、茶褐色土で自然埋没している。2期は、東寄りに中心を取り、上幅約3m、一段深い掘り方である。3期は、埋没した2期の掘り方の中に半分規模で掘り直したものである。尾根側からは断続的に土砂が流れ込んでおり、そのつど修築されたものと考えられる。このうち3期には、中位に角閃石安山岩製五輪塔や板碑が破片で投げ込まれている。路肩の土留めとして組まれていた形跡もある。上限を示す遺物はないが、この五輪塔の年代観からすると、15世紀から16世紀を下限とすることができる。



第238図 5・6号道出土遺物図



第239図 165号土坑遺構図

165号土坑(瓦窯) (第239～246図 P L64・136・137)

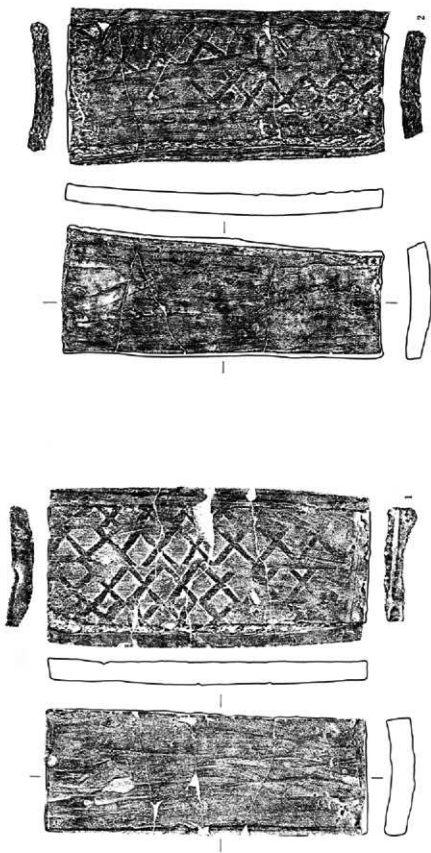
18BC-4グリット、寺に伴う瓦窯である。17区STピット群がある削平段と2号建物がある整地面との中間、わずかに掘り残された南面する高まりに作られている。調査した範囲では、1基単独に存在する。27号溝で左壁を削られ、11号集石に伴う整地で天井部付近まで削平されている。焼成室から灰原にかけての右壁上部は、重機による掘削で消失している。

坂詰秀一氏の平窯分類のIV類である。全長3.75m、焼成室は幅1.35m、長さ1.25m、深さ0.60mの方形、壁は、ササ土で塗り固めている。先端中央部には、煙道がついている。焼成室内のロストルは3条、幅20cm、長さ105cm、火床面からの高さ25cm、ササ多混土を石や甍斗瓦を芯にして塗り固めたものである。上面には甍斗瓦を二重にのせている。先端部は、人頭大の石で補強されている。隙間には、火力を調整するためと思われる拳大の河原石が詰め込むように立てて置かれている。

燃焼室は、幅1.50m、長さ1.10m、深さ1.10mの方形、壁は厚さ3cm前後が赤く焼け、その内側も灰色に変色している。隔壁はない。焚口は、浅い掘り方があり皿状に焼土が残されている。

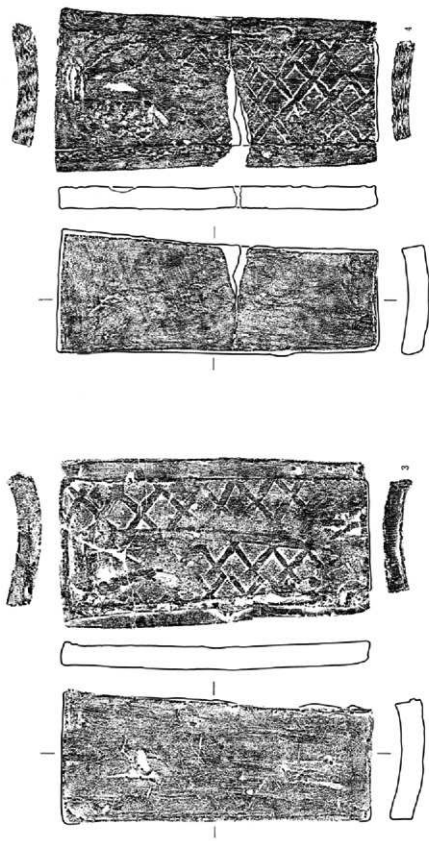
灰原は幅1.70m、長さ1.40m、深さ1.05mの方形、上から炭、灰が合わせて10cm残る。換業回数としては、あまり多くないことが推定される。この中には、掲載した鬼瓦が破片で出土した。破損品が混入したようで、いずれも割れ口までスズで黒くよごれている。

灰原から出土した炭は、太い枝が主のようで遺物収納箱に1箱ほどある。この中から6点を樹種同定をした。結果、主要な燃料材としてマツ、クスギ、ケヤキがあげられている。このほかにクリ、サクラ、カエデがある。この内容は、平安時代の冨での植物珪酸体分析に近いものがある。瓦窯跡で使用した燃料材も、周辺から入手したものと考えられる。



0 1:4 20cm

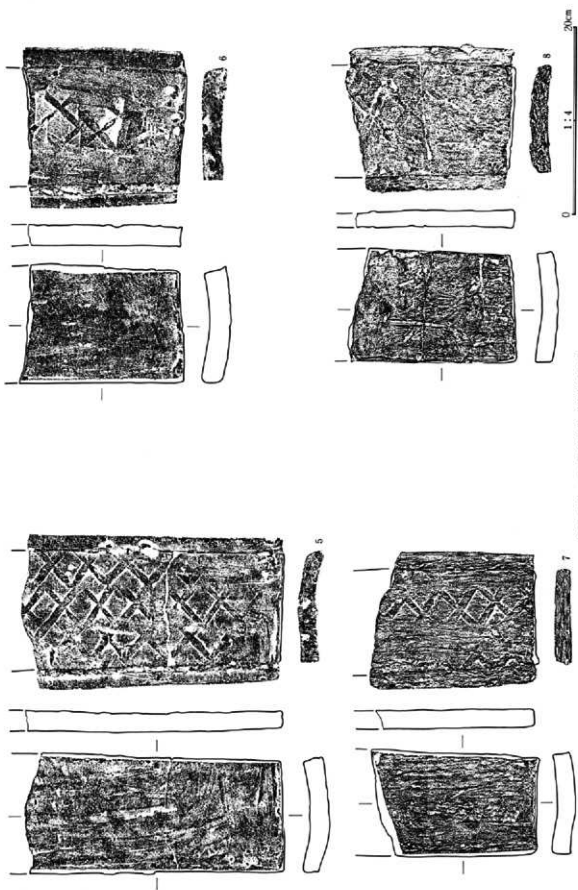
第240図 165号土坑出土遺物図(1)



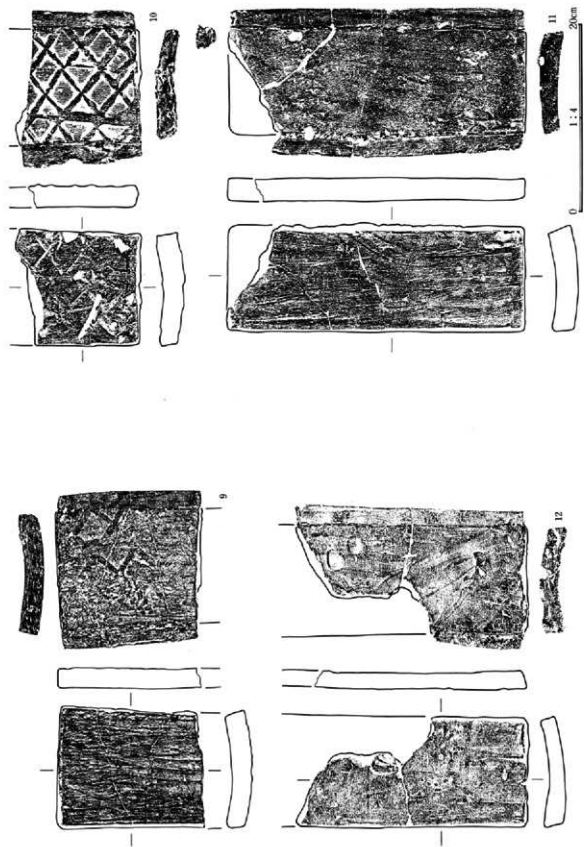
2
寺
際

0 1.4 20cm

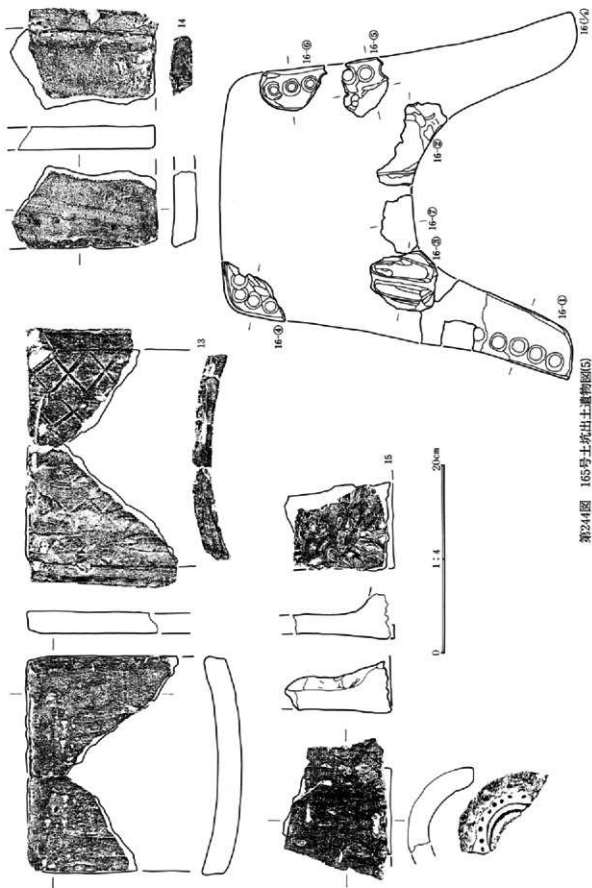
第241圖 165号土坑出土遺物(2)



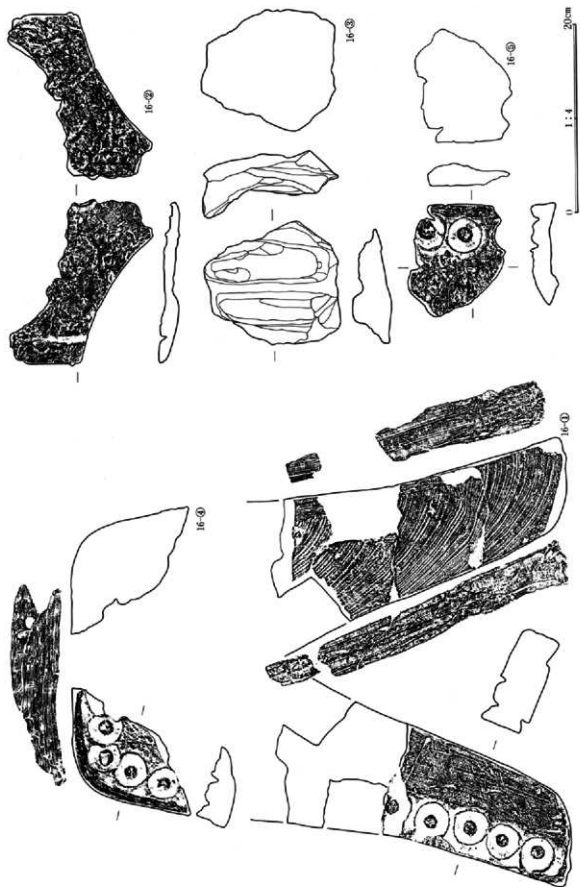
第242図 165号土坑出土遺物図(3)



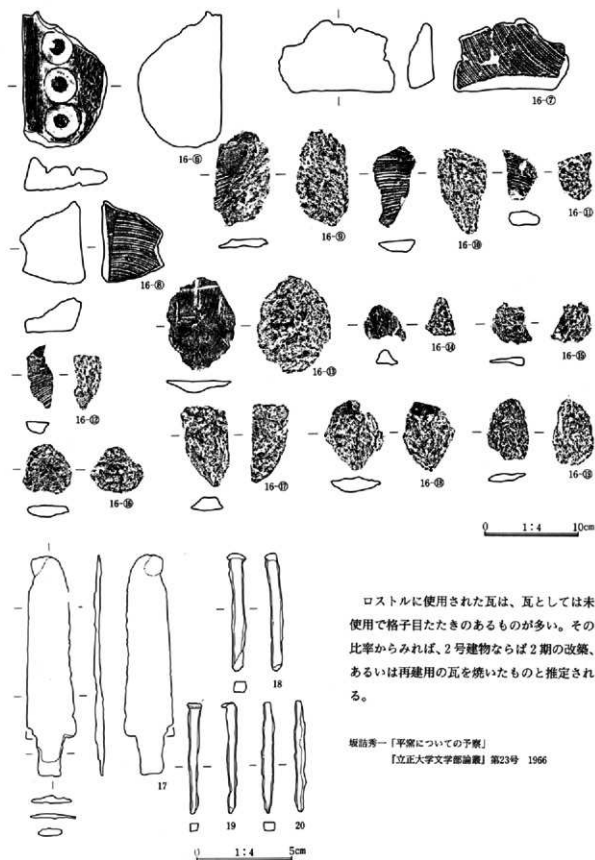
第243图 165号土坑出土器物图(4)



第244図 165号土坑出土遺物図(5)



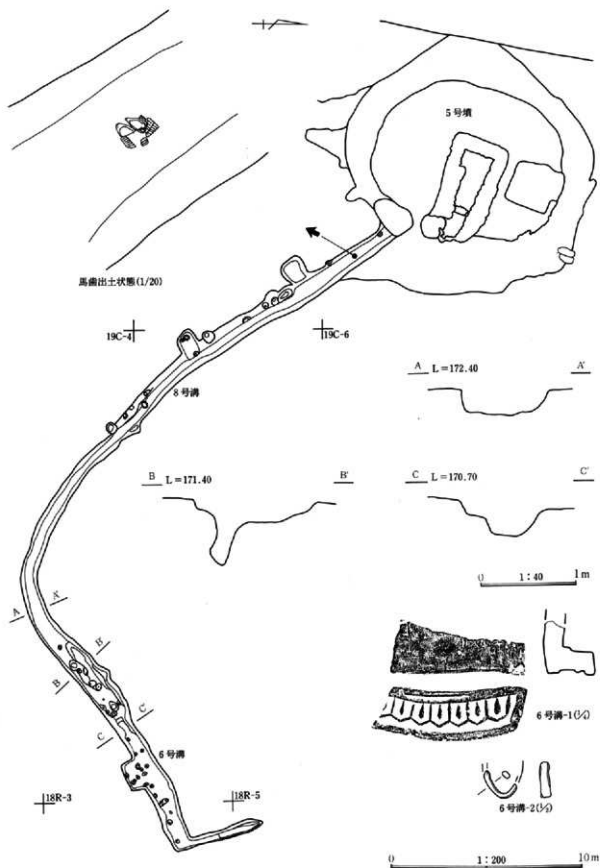
第245图 165号土坑出土遗物图(6)



ロストルに使用された瓦は、瓦としては未
使用で格子目たきのあるものが多い。その
比率からみれば、2号建物ならば2期の改築、
あるいは再建用の瓦を焼いたものと推定され
る。

坂詰秀一「平家についての考察」
『立正大学文学部論叢』第23号 1966

第246図 165号土坑出土遺物(図7)



第247图 6・8号溝遺構図・遺物図

6号・8号溝 (第247図 P L57・143・148)

18Q-19C、3～6グリット、尾根の東斜面肩口を弧状にめぐる溝である。5号・7号道とつながり、さらに5号古墳の周堀を使い9号道までのびることも考えられる。寺の外郭や尾根上段での建物配置を知る遺構である。周囲には、時代不明とした50あまりのピットや土坑がある。上幅1m前後、As-B混暗褐色土でほぼ全体が埋没している。底面には、柵列とも考えられるピットがまばらにあいている。馬の歯は、溝を利用して土坑を掘り、その中に埋葬したようである。鑑定では、若駒馬であることが判明している。

11号溝 (第183図 P L148)

6N-20グリット、1号建物がある削平段の南側を区画、排水も兼ねた溝と思われる。

27号・29号溝 (第248図 P L62)

18B C-3～6グリット、2号建物前の整地面と17区STピット群がある削平段の中間にある。2本は平行し、間には遺状の硬化面があることからその側溝と考えられる。硬化面は部分的ながら、砂利層で最大3枚に分けられる。27号溝の下面には瓦窯跡の165号土坑、上面には11号集石が重複している。集石はこの遺状遺構を踏襲したように作られたものである。

28号溝 (第249図 P L58・148)

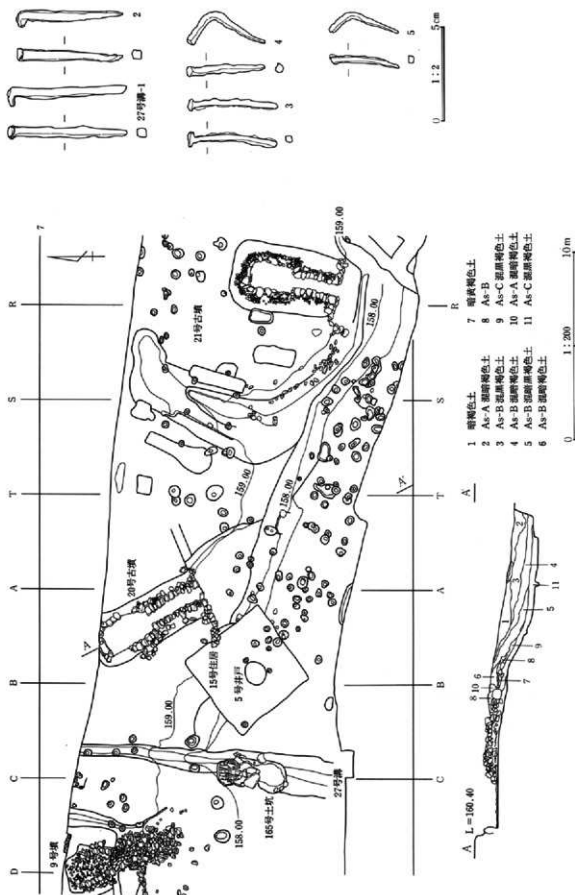
17O-Q-2～5グリット、東尾根の斜面を南北に縦断する。掘り方の形状は、館の南大堀の特徴に類似する。上幅2m、断面は箱形、底面は途中で2箇所の段があり爪先だつほどの上り勾配である。南北では3m近い勾配差、防衛的な性格をおびる。法面の中段にあくピットは橋脚と思われる。北端は17区土坑群、南端は17区STピット群に重複する。

17区STピット群 (第248図 P L62)

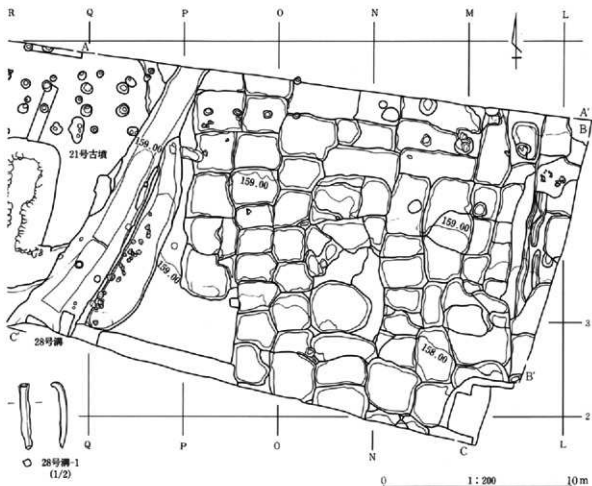
17R-T-2～4グリット、東尾根の南斜面、削平段に集中するピットの総称である。総数80本あまり、掘立柱建物を思わせる列が複数あり、南面する掘立柱建物か柵列の可能性もある。

削平段は、20号古墳の前で一端途切れて、2号建物前の整地面とは別の区画を作るようである。6号道右手に開けた一角として、南の調査区域外まで広げて検討する必要がある。その西端にあるのが5号井戸、さらに西側を27号・29号溝、その下面に瓦窯跡である165号土坑がある。段の構造は、法面の角度40°、2号建物の西側を囲む法面と類似する。その基部に犬走り様の小さな平坦面がつくのも特徴である。17Sライン、17Tラインにある2箇所の屈曲部は、調査時の状況では堅穴住居の隅に近い印象を受けた。15号住居跡とは、1軒相当の余地があり削られている可能性が高い。

ピットの状況は、形状や規模の点で一律ではない。大きさと形状は、直径が10～30cm大の円形が多い中、一部に角柱を思わせる方形のものが含まれる。底面に礎石をすえたものが2本、栗石が混じるものが数本ある。深さは3～30cm超、この深さの違いが時期差でもある。覆土は、ロームの有無、色調の差からA～Cに3大別した。Aは黒褐色土とロームの混土、Bは黒褐色土にローム粒が混入、Cは黒褐色土とローム漸移層の混土である。東側でA・B、西側でCが多い。



第248図 17区S・Tピット群遺構図・遺物図



第249図 17区土坑群遺構図(1)・遺物図

17区土坑群 (第249～252図 P L 62・63・145・146・151)

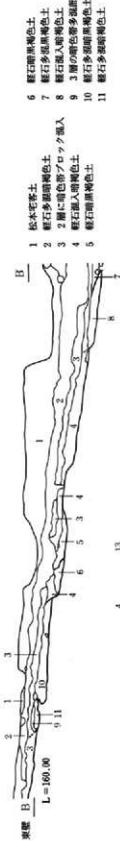
17K—O—1～5グリット、寺と館の中間にあり暗色帯を目的とした採掘坑である。当初瓦窯むけの粘土採掘坑と考えたが、胎土分析の結果、瓦用の粘土ではないことが判明している (第12章瓦の胎土分析参照)。用途は、掘削の規模や土質から壁材が妥当と考えられる。北西部には江戸時代後期以降の2号屋敷、中世の28号溝が重複する。28号溝よりも古いのが、上限を特定できる遺物や資料はない。

尾根の南斜面、その中段で縦25m、横20mの範囲に広がる。西と南はほぼ限界、北と東はさらに調査区域外に続いている。この中心では、未報告の扱いとした左壁の2石だけを残す、直径10m前後の古墳1基が削平されている。南北方向に新旧9列がある。埋没状況からは、東から西への順序がわかる。2列単位で、掘りながらその残土で隣りを埋め戻すという方法のようである。1列の中では、北から南へと掘り進む。1坪弱の方形に仕切られ、ほぼ規則的に連続している。暗色帯のところだけがウロ状になり、壁には刃の幅10cmほどの掘削道具の痕跡が数多く残されている。掲載した遺物は、残土に混入したものである。

この種の採掘坑は、1号屋敷に伴う4号道の下でも検出されている。これも、1号屋敷の改築時の壁土か道普請用と考えたが、その規模からして一時的である。帯状に連続する掘削痕はにているが、不整形でたぬき掘りの状態である。



- 1 松本宅客土
 - 2 軽石多量混雑褐色土
 - 3 軽石多量混雑褐色土
 - 4 褐色帯下の褐色土
- 暗色帯ブロック混入



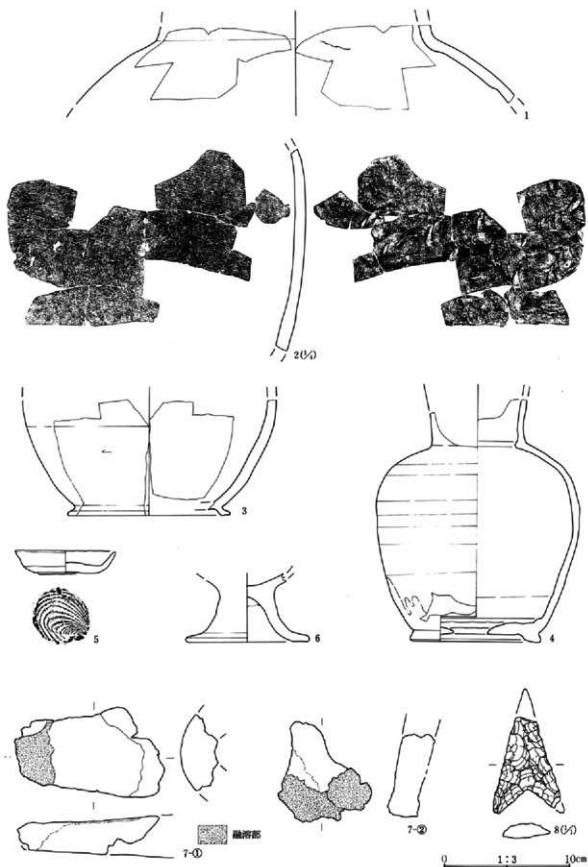
- 1 松本宅客土
- 2 軽石多量混雑褐色土
- 3 2層に暗色帯ブロック混入
- 4 軽石混入暗褐色土
- 5 軽石混雑褐色土
- 6 軽石混雑褐色土
- 7 軽石多量混雑褐色土
- 8 軽石混入暗褐色土
- 9 3層の暗色帯多量混入
- 10 軽石多量混雑褐色土
- 11 軽石多量混雑褐色土



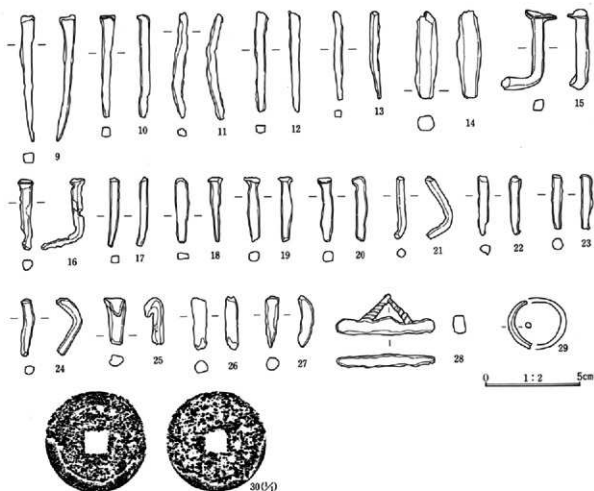
- 1 松本宅客土
- 2 松本宅客土
- 3 A=A 主要混雑褐色土
- 4 3層にローム混入
- 5 A=C 混雑褐色土
- 6 A=B 主要混雑褐色土
- 7 6層にロームブロック
- 8 6層と5層の混入
- 9 A=B
- 10 5層とロームブロック
- 11 10層の礫作土
- 12 客土と5層
- 13 軽石多量混雑褐色土
- 14 13層に5層を塊状に混入
- 15 細砂層
- 16 細砂層
- 17 細砂層シルト質
- 18 細砂層
- 19 ローム混雑砂層
- 20 細砂層
- 21 5層とロームブロック
- 22 暗褐色土とローム混入
- 23 軽石多量混雑褐色土
- 24 23層とロームの混入
- 25 5層上に6層混入
- 26 礫層下のローム
- 27 6層上にロームの混入
- 28~32 軽石多量混雑褐色土
- 33 5層と23層の混入
- 34 23層の塊状互層
- 35 細砂層
- 36 暗褐色土と混雑褐色土
- 37 細砂層の混入
- 38 細砂層と粗層の混入
- 39 暗褐色土

0 1:100 5 m

第250図 17区土坑群遺構図(2)



第251図 17区土坑群出土遺物図(1)



第252図 17区土坑群出土遺物図(2)

1号～17号墓 (第253～255図 P.L.53～55・142・151)

墓は、茶毘跡である火葬土坑跡と土坑墓とに分けられる。下記のように立地を異にして小群を作る。

17区 東尾根の南斜面、古墳の周堀の中にする。16～18号の土坑墓

18区 東尾根の谷ふところ、2号建物裏の斜面にある。3号、5号～15号の土坑墓

19区 東尾根の東南斜面肩口、4号の土坑墓

20区 西第1尾根の頂上部、1号、2号の火葬茶毘跡

この中でまとまりを持つのが、18区と20区の一群である。

18区の一群は、2号建物の背後、一見手を加えたような平坦面にまとまる。おおよそ20m四方の範囲であろうか、方位にばらつきはあるが継続して作られた墓地と呼べるまとまり方である。縦1～1.50m前後の長方形、北頭位、西頭位、その他の3つに区分できる。埋葬状態がわかるものに北頭位の3号墓がある。2段の掘り方がある。深い方が埋葬部、浅い方は縦2.50m、横2mほどでの1基分の墓域と考えられる。さらに外側には旧地表面と思われる硬化面がみられる。埋葬部は、人骨の状態から西向き北頭位、伸異葬も考えられる規模である。副葬品はない。盛り土の上に入頭大の石で蓋をし、土坑の縁にも縦に石が差し込むように並べられている。この中にある角閃石安山岩製の五輪塔地輪は、墓標ではなく蓋石に混入したものである。その年代観からすれば15世紀以降である。

この3号墓を北頭位の好例とすれば、ほぼ直交の西頭位で屈葬、北宋銭を副葬する9号、10号墓がある。

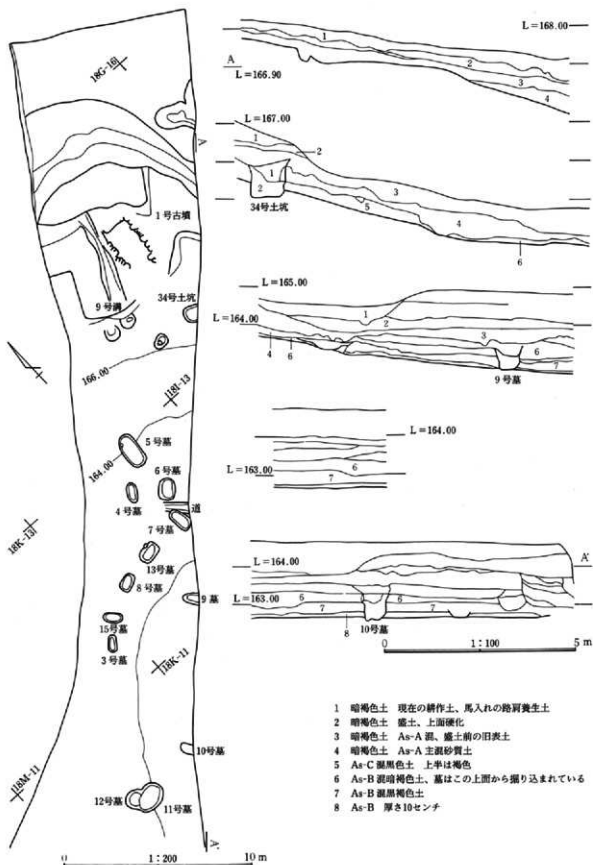
深さは50cm以上、上面の構造は削られていて不明だがひとつの典型例である。この他に、頭に杯をふせる13号墓も注目される。また、7号墓はさほど時間差がないうちに、東西に抜ける道の下敷きになっている。墓域の構成と変遷を知る資料である。18区の一帯は、寺域の中にあり2号建物などとの関係を求めやすいが、その年代観からすると東の極楽院存続期に伴う墓地と考えられる。

20区の一帯は、削られて調査からもれた1基を含め都合3基の火葬茶毘跡がある。1号は、遺存状態良好な茶毘跡である。床に2個の石を対で置き、一方に煙出しの張出部がある。灰と炭が厚く残り、壁は1cmほどの厚さで焼けている。炭は、直径1cmをこすタケが多い。鑑定結果からは、腕、腰、頭、中肢骨などがあり一様に細いことから成人女子、焼け具合からは死後時間をおかず火葬されたと推定される。20区は、この墓以外に遺構はなく、寺からみて日没の方向に西方の浄土世界を意識し規制された一角だったのではないだろうか。それが、尾根を占有して全体が野辺送りの茶毘跡かと推定される。

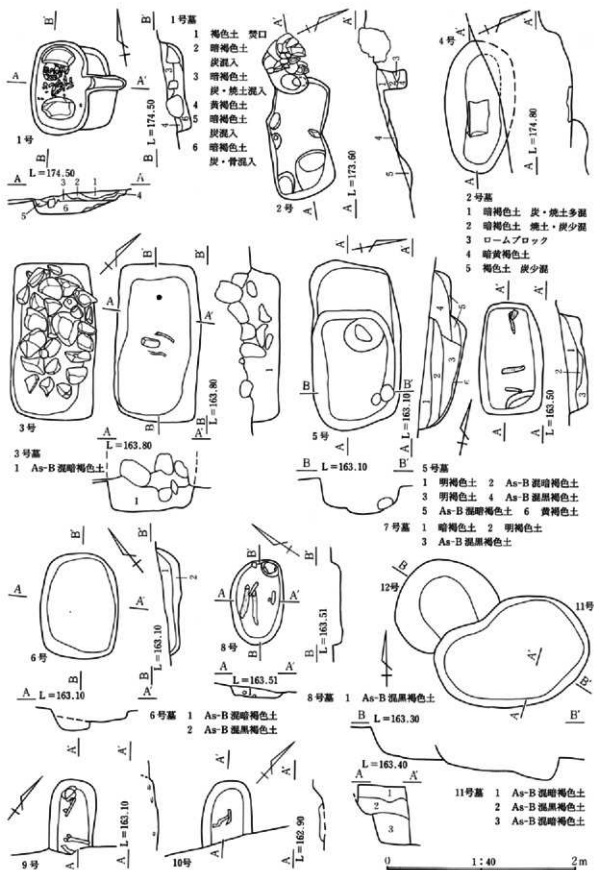
和天山天神前遺跡中世墓一覧表

番号	位置	形状	縦・横・深さ	方位	遺物	備考
1号	20G-10グリット	長方形	100・60・20	N-12'-E	人骨	火葬茶毘跡、東辺に張出部
2号	20E-10	長方形	130・55・5	N-30'-E		火葬茶毘跡
3号	18K-11	長方形	166・90・50	N-40'-E	人骨	盛り土に集石
4号	19AB-12	長方形	145・65・5	N-58'-W	板碑	
5号	18I-12・13	長方形	180・88・20	N-5'-E	人骨	
6号	18I-12	長方形	112・82・25	N-39'-E		
7号	18I-12・13	長方形	117・67・15	N-14'-W	人骨、皇宋通宝	横臥屈葬
8号	18I-11・12	長方形	88・56・10	N-60'-E	人骨	横臥屈葬
9号	18J-11	長方形	78・46・50	N-38'-W	人骨、至和通宝	横臥屈葬未発掘
10号	18K-10	長方形	65・53・55	N-40'-W	人骨、天聖元宝	未発掘
11号	18KL-9・10	長方形	160・105・60	N-25'-W		12号より新
12号	18L-10	長方形	110・90・50	N-64'-E		11号より古、深さ推定
13号	18J-11・12	長方形	112・78・30	N-80'-E	人骨、杯	杯を頭部に置く
14号	18I J-12	長方形	91・50・5	N-26'-E		掘り方状態
15号	18J K-11	長方形	94・48・4	N-45'-W		
16号	17FG-4・5	長方形	150・95・40	N-23'-E		
17号	17E-3					集石のみ
18号	17E-3・4	長方形	95・53・15	N-19'-E		

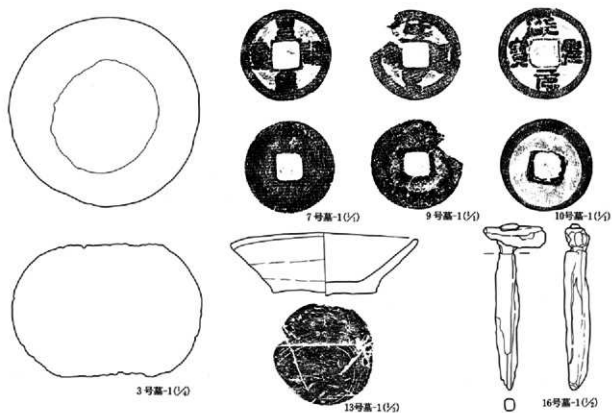
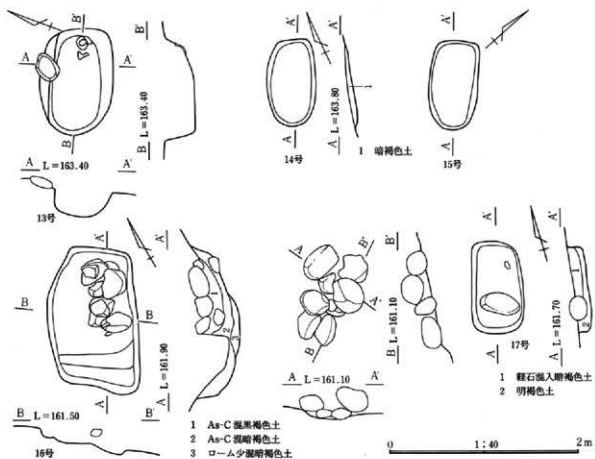
調査中に現地で指導を仰いだ群馬県文化財保護審議会会長 近藤義昭氏からは、4号墓から出土した板碑について墓台の彫りが浅く、反花のかえりが弱いことから南北朝頃、一尊種子と指摘を受けた。



第253図 3～15号墓坑遺構図



第254図 1~12号墓坑遺構図



第255图 13~17号基坑遗構図・遺物図

3 館

16区を中心とした遺構は6期に変遷する。重複関係、方位を指標とする。

1期は、28号掘立柱建物跡プランの下層で検出された、直径1m前後の円形土坑群が該当する。

4基の土坑がL字形に並び、建物を推定させるものである。うち1基の坑底からは、埋納されたと考えられる洪武通宝、永楽通宝が出土している。28号の地鎮跡、掘立柱建物跡の2説が考えられる。銭の年代観から、6期区分の上限が15世紀前半以降とすることができる。1期以前にも、水瓶や常滑焼の壺、青磁などから前身の存在も暗示される。

2期は、28号掘立柱建物跡とした削平段が該当する。

暗色帯近くまで掘り込んだ削平段に、ローム、黒褐色土、暗褐色土の混土で版築状の盛土をしている。肩口に並ぶ小さなピットは、土留めの杭列と考えられる。

3期は、大型の柱穴をもつ27号掘立柱建物跡が該当する。

28号は掘り方とも考えられるが、わずかに軸線がずれている。21号、22号溝は、桁の延長上にある。

4期は、1号、2号焼土遺構が該当する。

水瓶を埋納した94号をはじめとした土坑が伴う。16号、17号溝が東辺を区画する。27号、28号の掘立柱建物跡に重複し、3期までの場所を引き続いて踏襲するが、全体の方位の一致と3期までとの方位のずれが時期区分の有力根拠である。このずれから1～3期と4期との間で画期も指摘できる。

5期は、畠が該当する。6期の土塁直下だけに残存、北側は、6期の掘立柱建物群に伴う整地で削平されている。1～4期まで継続した遺構が、一時断絶し畠に転換したものである。

6期は、6号、8号、23号をはじめとした掘立柱建物跡が該当する。

館の性格を帯び、建物は東西2つの群に分かれて土塁と大堀で囲まれている。西群は、後に斎藤壇と呼ばれる一角にあたり、極楽院の前身と推定される。東群を中心に移して江戸時代まで存続する。

5号～29号掘立柱建物 (第256～275図 P L50～52・142・148)

配置 掘立柱建物は、東西に分けられる2群がある。

西群 13棟 6、7、8、9、10、11、19、23、24、25、26、27、28

東群 11棟 5、12、13、14、15、16、17、18、20、21、22

東西ともに、尾根のほぼ中央部、特定の箇所継続的に建て替えが行われている。

6号、7号、23号のコの字配置が典型としてあげられる。

柱穴の掘り方が西では直径30cm大、東ではそれ以下と小ぶりであり時期差とみられる。

方向 東西棟 N-66～80°-W 西群 7棟 7、8、9、11、23、24、26

東群 9棟 5、12、13、14、16、17、18、21、22

南北棟 N-22～30°-E 西群 5棟 6、10、19、25、27

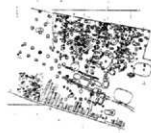
東群 2棟 15、20

この2大別される方向は、直交を意図し東西棟が主屋、南北棟はその脇屋とみることもできる。

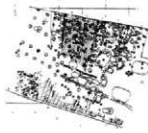
変遷 西群が先行、館、極楽院前身の中心施設として変遷する。1期以降、軸線をずらせるだけでほぼ踏襲され継続性は高い。畠は、その間の画期を示すものである。上限は、28号の下層にある土坑で出土銭から15世紀前半以降と考えられる。下限は、東群の建物が該当し、江戸時代まで存続する。



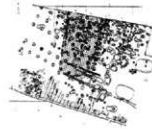
1期 円形土坑群



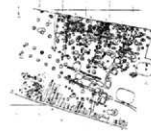
2期 削平段



3期 27号孤立柱建物



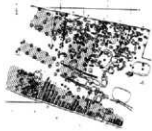
4期 1号・2号機土



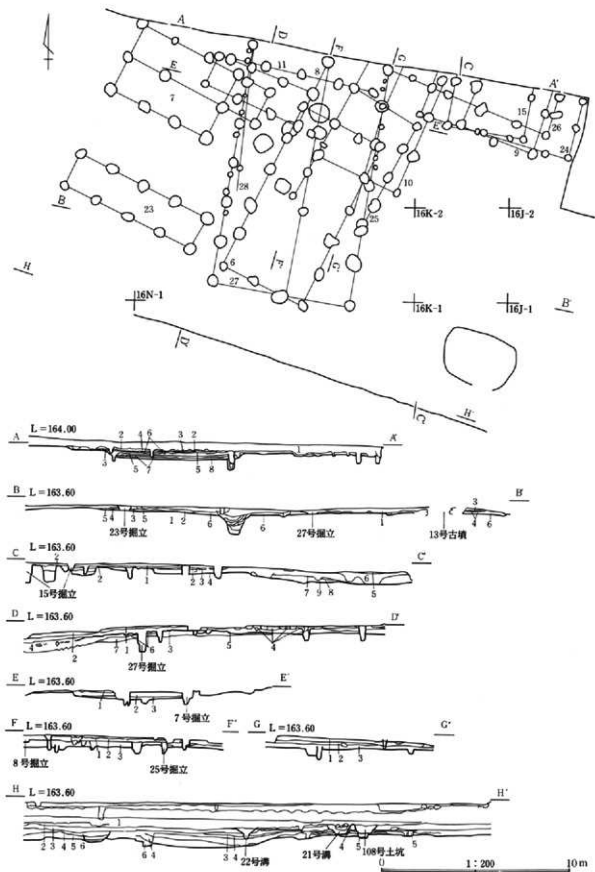
5期 畚



6期 掘立群



第256图 16区中世遺構全体图



第257図 16区掘立柱建物概念図

16区中世面

A-A'

- 1 軽石多混暗褐色土 表土、耕作土
- 2 1号焼土 炭多混赤褐色土
- 3 炭層
- 4 よくしまる黒褐色土
- 5 ローム少混暗褐色土
- 6 ローム多混明褐色土
- 7 ローム多混、やや粘性の暗褐色土
- 8 ローム混暗褐色土

D-D'

- 1 土層と暗褐色土
- 2 中世島耕作土 As-B 多混暗褐色土
- 3 As-B 多混暗褐色土
- 4 As-B 混暗褐色土
- 5 層にロームブロック多混
- 6 As-C 混黒褐色土 地山
- 7 ローム層移層 褐色土

B-B'

- 1 As-B、ロームブロック混暗褐色土
- 2 中世整地土 ロームブロック主体
- 3 As-C 混黒褐色土
- 4 As-C
- 5 暗褐色土
- 6 ローム漸移層

E-E'

- 1 As-B、焼土多混赤褐色土
- 2 ロームブロック多混明暗褐色土
- 3 ロームブロック多混暗褐色土

F-F' E-E'と共通

G-G'

- 1 ロームブロック多混明暗褐色土
- 2 ロームブロック多混明暗褐色土
- 3 黄褐色土 強粘性、緻密

C-C'

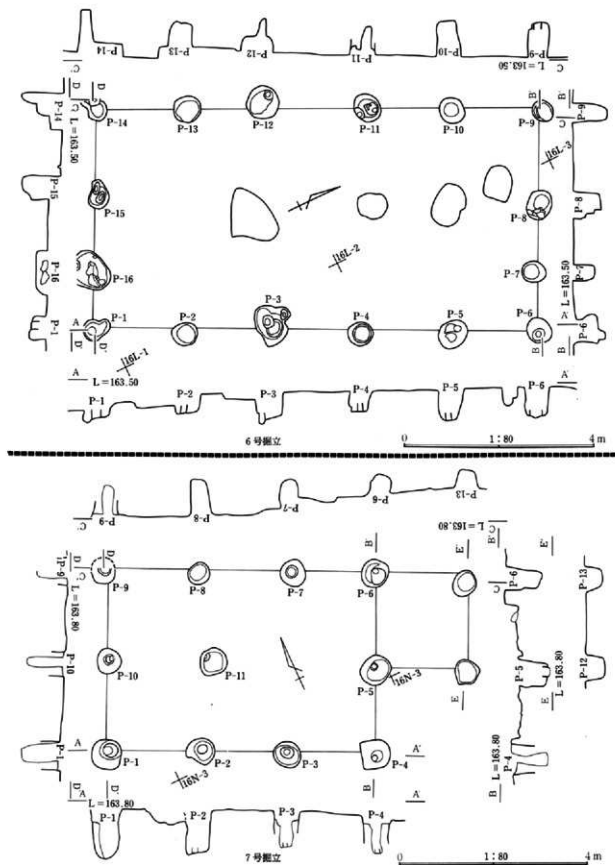
- 1 As-B 少混暗褐色土
- 2 As-B 多混赤褐色土
- 3 ローム主体の黄褐色土
- 4 As-B 多混暗褐色土
- 5 土層 茶褐色土
- 6 As-B と粘質土多混暗褐色土
- 7 As-B 多混暗褐色土
- 8 As-B
- 9 As-C 混黒褐色土

H-H'

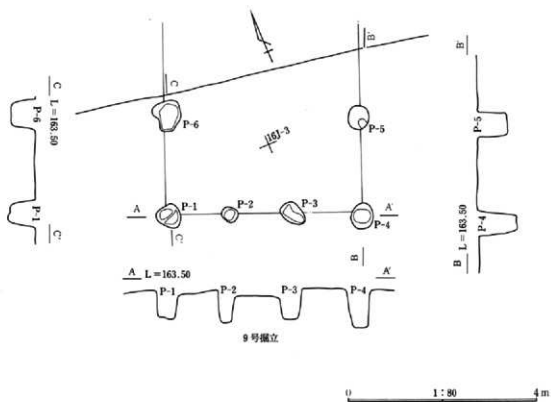
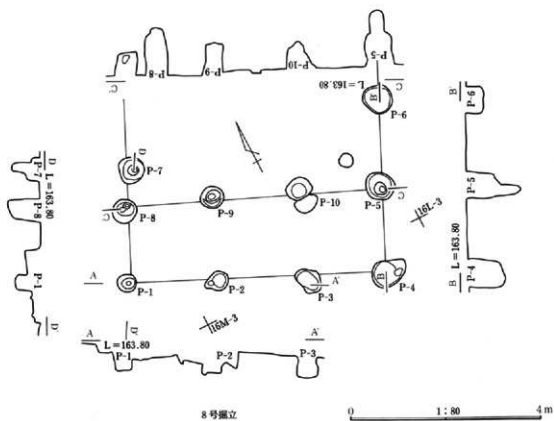
- 1 軽石多混暗褐色土
- 2 As-B 混暗褐色土
- 3 As-B
- 4 As-C 混黒褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 黄褐色土と黒褐色土の混土

和田山天神前遺跡掘立柱建物一覧表

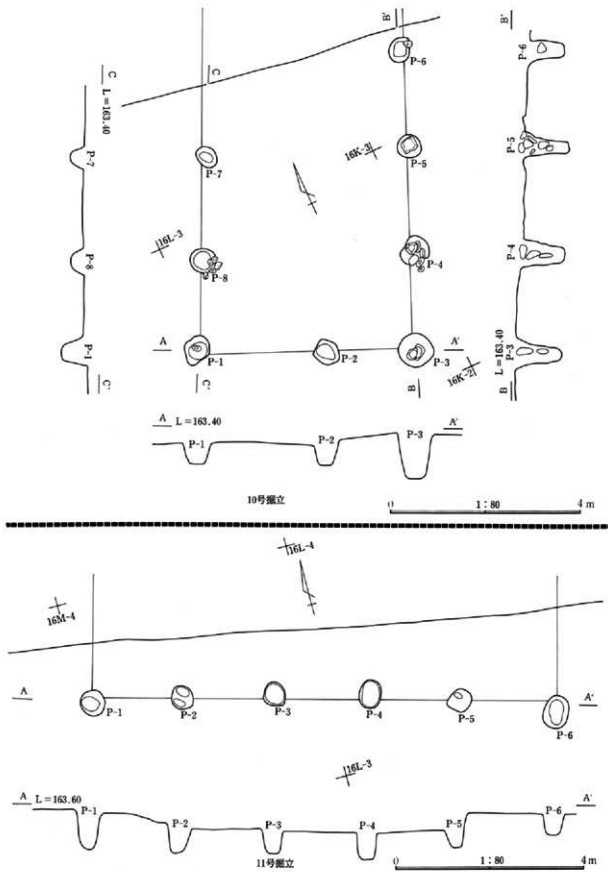
番号	位 置	梁・桁	梁行・桁間	棟 方 向	重 複 関 係	備 考
5号	16EG-1・2	1・5		東西N-68°-W	11墳→5掘	欄列か
6号	16K~M-1~3	3・5	490・940	南北N-25°-E	28掘→27掘→6掘	
7号	16L~N-2・3	2・3	400・560	東西N-62°-W	88坑→7掘	
8号	16J~M-2・3	2・3	365・540	東西N-64°-W		総柱か
9号	16I J-2・3	2・3	385・406	南北N-64°-W		
10号	16J~L-1~3	2・3	462・640	南北N-22°-E	94坑→10掘	
11号	16K~M-3	1・5	・988	東西N-75°-W	1号焼土→11掘	
12号	6・16FG-19・20・1	3・3	480・620	東西N-74°-W		
13号	6・16E~H20・	1・3	348・1320	東西N-66°-W		
14号	6FG-19・20	2・4	400・780	東西N-60°-W		
15号	16I J-2・3	2・1	410・270	南北N-68°-W		
16号	6F~H19・20 16H-1	2・4	340・1000	東西N-68°-W		
17号	16E~G20・1	2・3	400・780	東西N-65°-W	11墳→17掘→2集石	
18号	6・16D~F-20・1	2・4	300・900	東西N-74°-W		
19号	6HI-20 16FG-1	2・2	460・560	南北N-23°-E		
20号	6・16FG-20・1	2・2	420・480	南北N-22°-E		
21号	6・16FG-20・1	2・2	220・420	東西N-60°-W	21掘→1集石	総柱
22号	6FG-17・18	2・3	425・575	東西N-80°-W	10墳→22掘	
23号	6MN-17・18	1・4	180・750	東西N-60°-W		
24号	16I J-2・3	2・5	306・825	東西N-76°-W		
25号	16KL-1~3	2・4	396・629	南北N-30°-E		
26号	16I~K-2・3	2・4	220・772	東西N-67°-W		
27号	16KL-1~3	2・6	728・1260	南北N-19°-E		総柱
28号	16KL-1~3		585・790	南北N-7°-E	28掘→27掘、27掘の掘り方か	



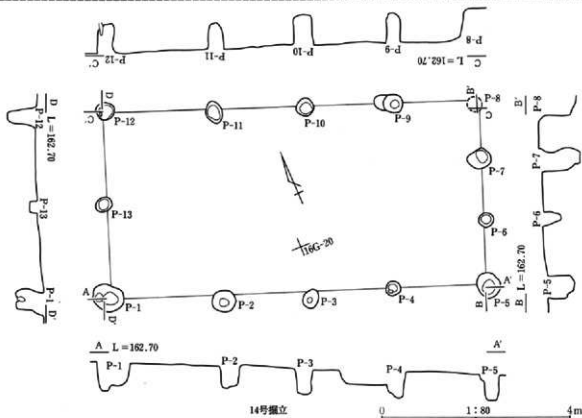
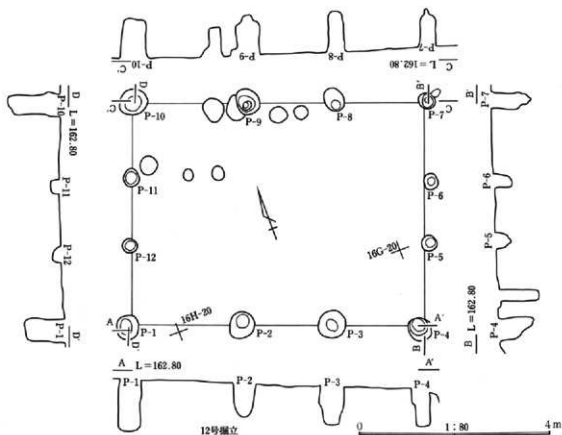
第258図 6・7号掘立柱建物遺構図



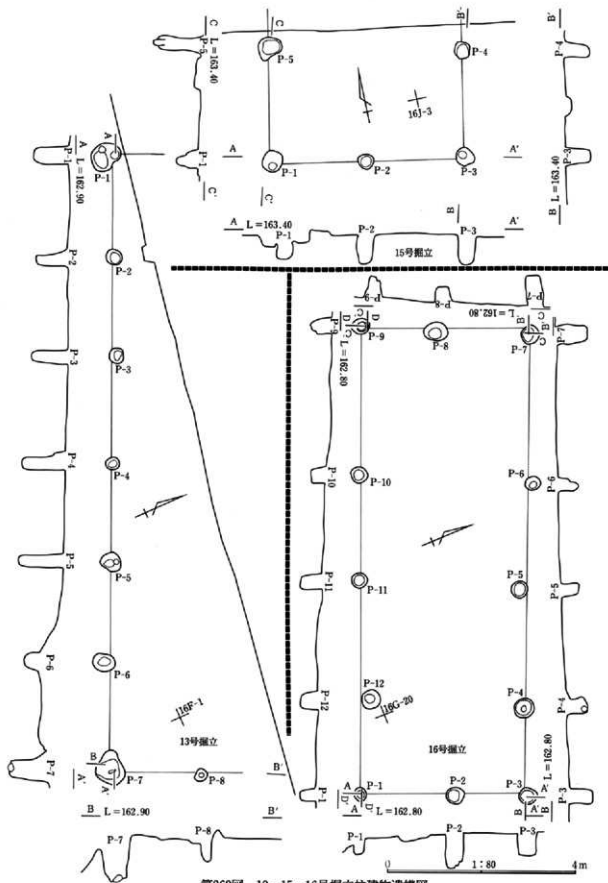
第259图 8・9号掘立柱建物遺構図



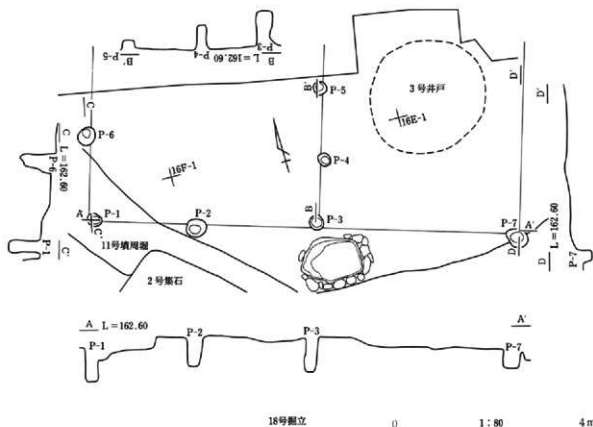
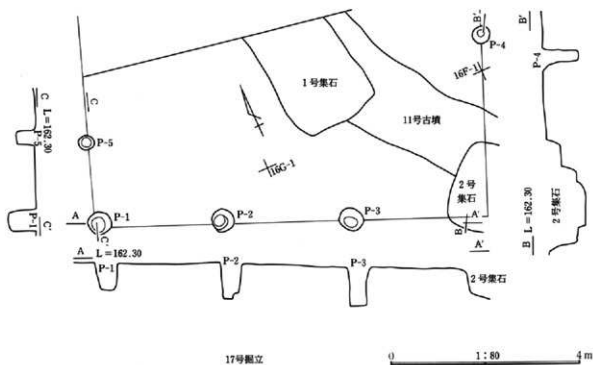
第260図 10・11号掘立柱建物遺構図



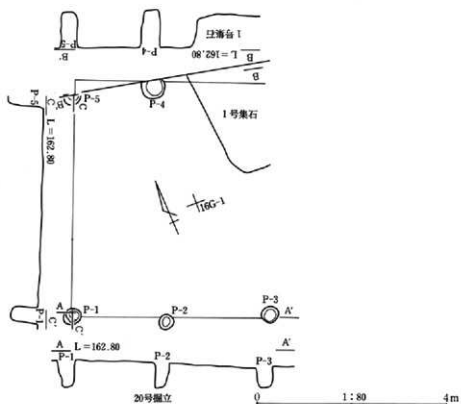
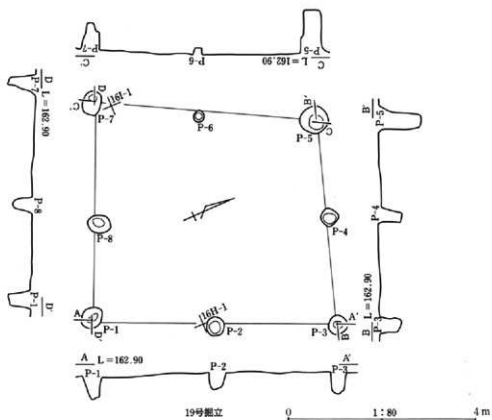
第261图 12·14号独立柱建筑物结构图



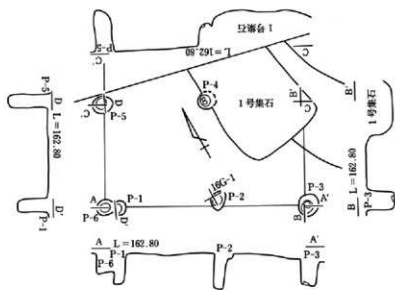
第262図 13・15・16号独立柱建物遺構図



第263图 17・18号孤立柱建物遺構図

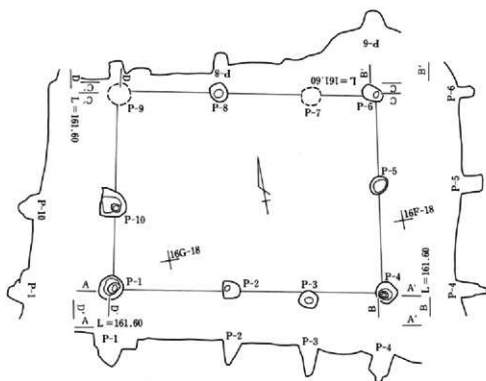


第264図 19・20号掘立柱建物遺構図



21号掘立

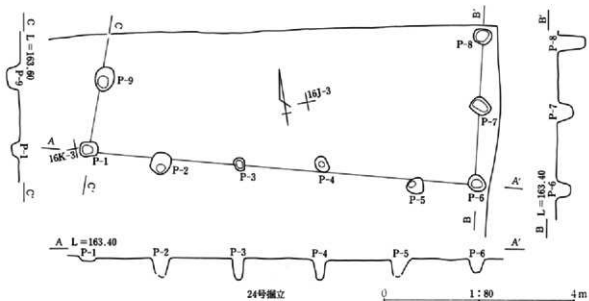
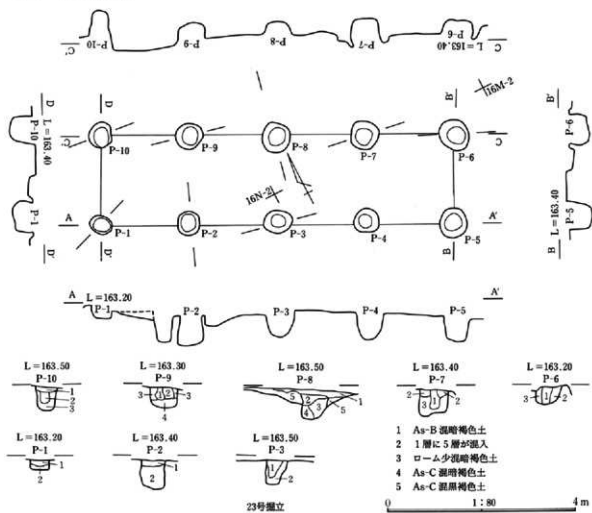
0 1:80 4m



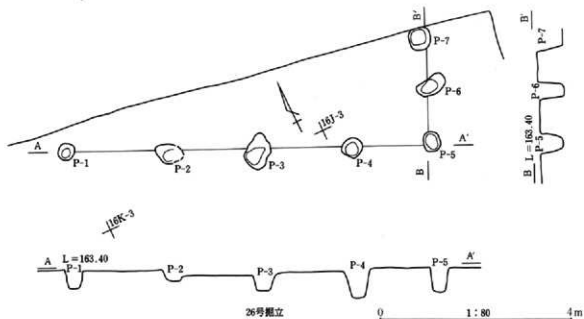
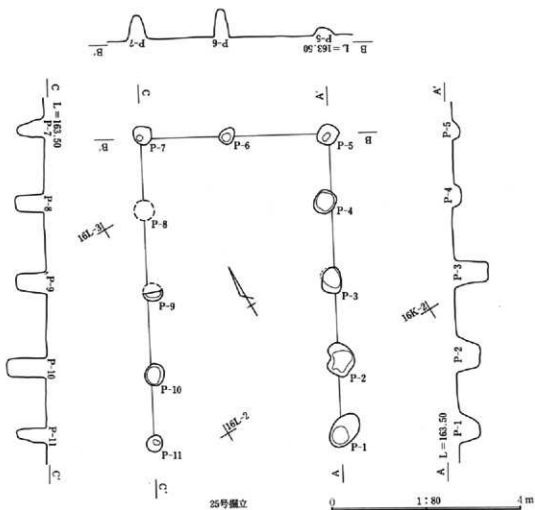
22号掘立

0 1:80 4m

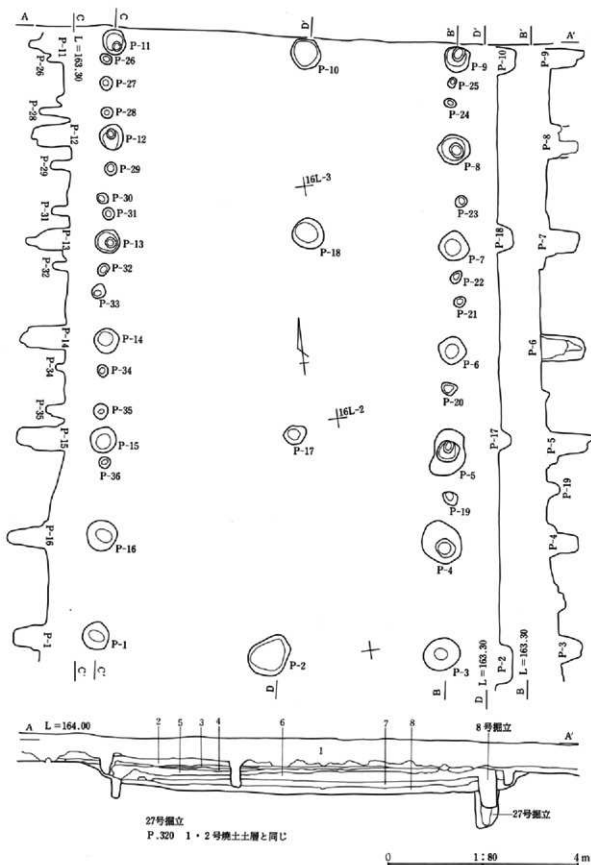
第265图 21・22号掘立柱建物遺構図



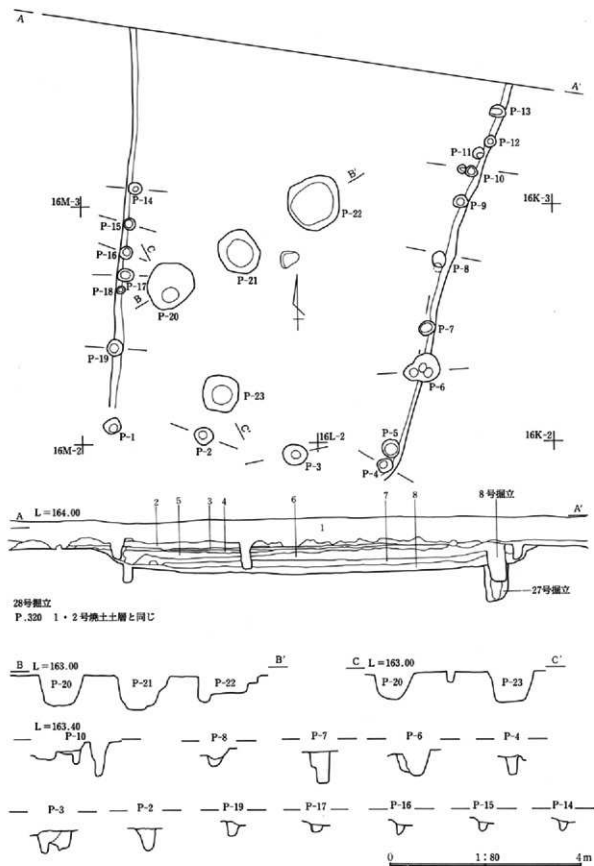
第266図 23・24号掘立柱建物遺構図



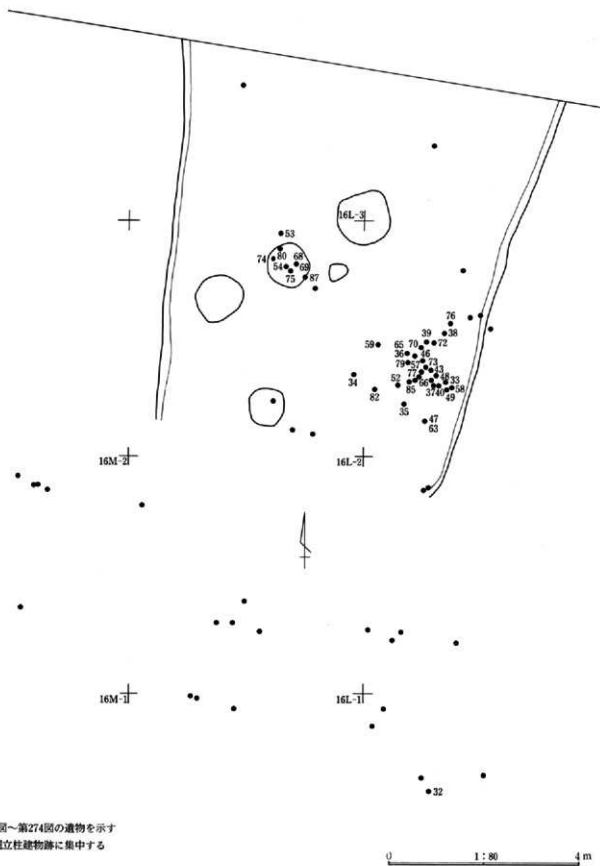
第267图 25·26号独立柱建筑物遺構図



第268図 27号掘立柱建物遺構図

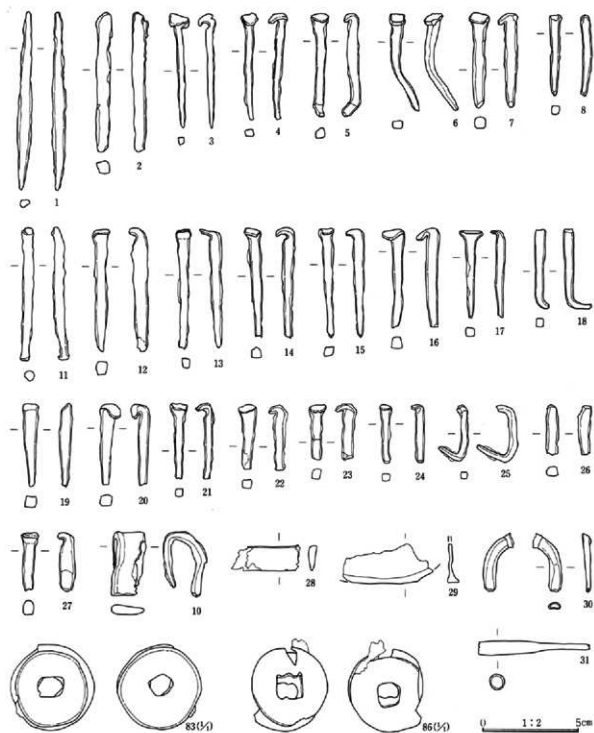


第269図 28号掘立柱建物遺構図

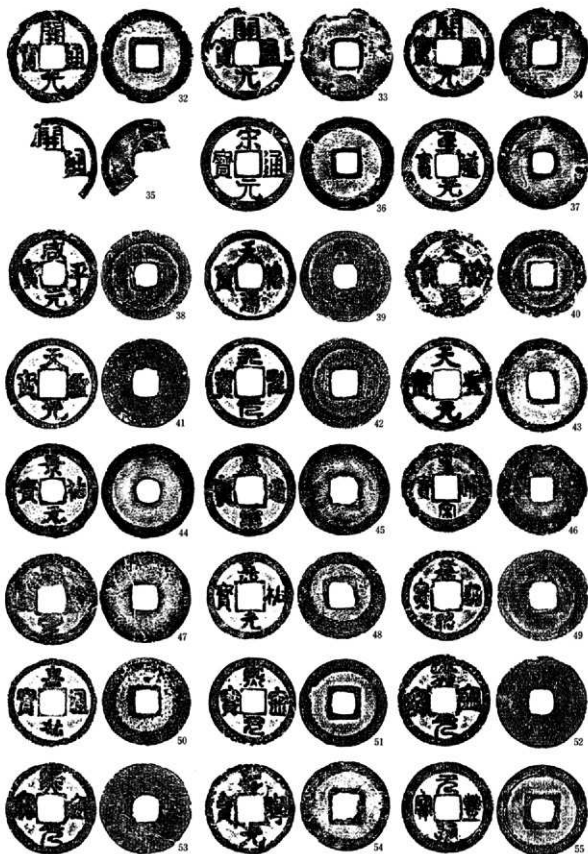


第271回～第274回の遺物を示す
28号掘立柱建物跡に集中する

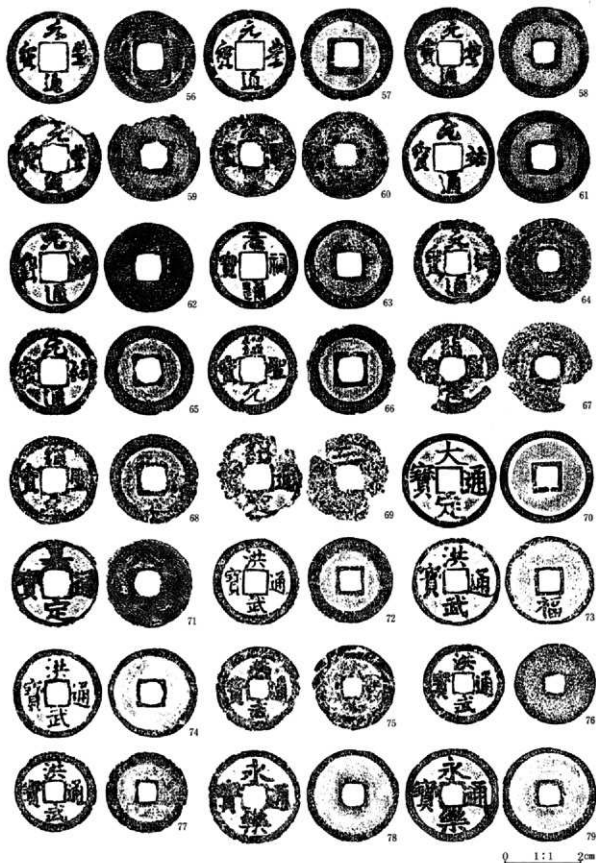
第270回 16区古銭遺物図



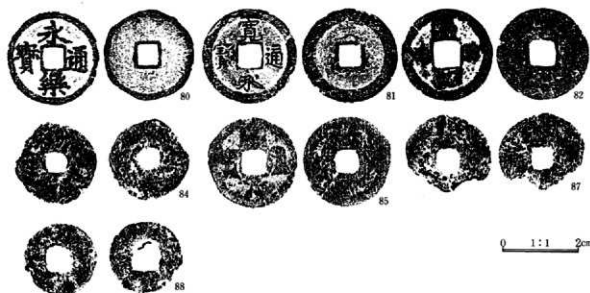
第271图 16区孤立柱建物出土遗物图(1)



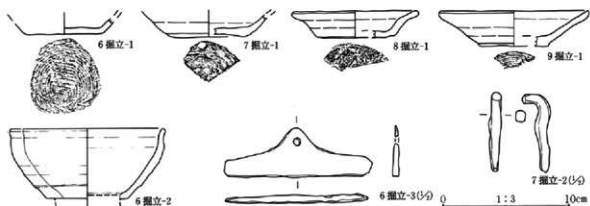
第272図 16区掘立柱建物出土遺物(2)



第273图 16区掘立柱建物出土遺物图(3)



第274図 16区掘立柱建物出土遺物図(4)



第275図 6・7・8・9号掘立柱建物出土遺物図

2号住居跡 (第276図 P L4・68)

161-1グリットにある竅穴状遺構である。縦3.85m、横2.70mの隅丸方形、主軸方向N-85°-W、隣接する6号集石とは掘り方が類似し、覆土は黒色土で長方形土坑に共通する。土坑群のひとつとして、4期の東辺を区画する可能性がある。床面は、ローム層中まで掘り込み、ほぼ平坦、壁際をのぞいて硬化した状態である。壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。長軸上にあるビット2本は、覆土が異なり新しい建物か細列の一部と判断される。かわらけ2個体が出土している。床面下には、縄文時代の102号土坑がある。

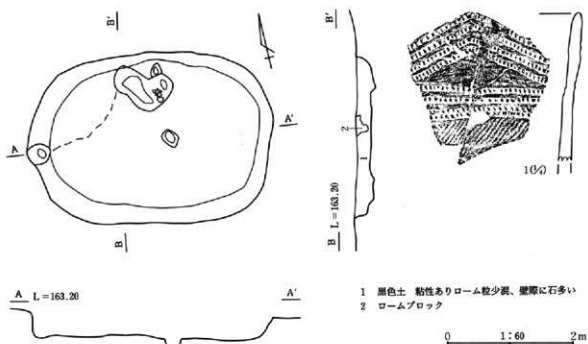
土坑 (第277~288図 P L34~40・64・103~105・113・147)

合計21基を形状、覆土、重複関係、出土遺物から中世とした。水瓶が出土した94号土坑が特記される。

長方形が14基、円形と方形があわせて7基である。このほかにも122号、123号などのように掘立柱建物跡の柱穴として除外したものがあつた。

1号、2号の焼土遺構を、東辺から南辺をL字形に取り巻くように分布する。

南北に縦列する94号、95号、122号、123号、同じく南北で17号溝の延長上には96号、110号、111号、112号



第276図 2号住居跡遺構図・遺物図

がある。この2列は、東辺でほぼ接した位置関係にある。時期差も考えられたが特定できない。東西方向には、掘り方が類似する96号と100号が対のようにある。6期の19号溝が、この2期をつなぐように重複することから、その後継する軸線である。94号は、この中でも規模も大きく抜き出た存在である。

覆土は、黒色土か黒褐色土が長方形のものに多い。円形や方形のものは、掘り方が一段深く人為埋没しているのが特徴である。96号、100号、104号は、ロームと黒色土などで互層に埋められている。110号～112号も、半ば混土化した土で埋められている。これらの中に、94号でみられた焼けた壁土が混入しているのも関連する遺構とみる理由である。100号には、周辺の遺構やグリットと接合する常滑の甕が含まれる。14世紀代の特徴をもち、投棄か意図的な埋納を示す好例にならう。104号は6期整地層の下にあり、埋土中位からは開元通宝をはじめとした銭が出土。これも埋納の一例と考えられる。

それに対して97号と108号は、墓の可能性がある。97号は二段に分かれた掘り方の中に銭と釘、そして標示物とも思われる人頭大の石が肩口に置かれている。108号は、北方位、油煙のついたかわらけと銭各1点が出土している。坑底近くには、薄い黒灰層があるのも特徴である。

重複関係は、方位では6期にあたる掘立柱建物に近似するが、88号、94号、95号、100号などのように先行するものが多い。

94号土坑は、縦3.55m、横2.50m、深さ90cmの長方形、西の壁際には、10号掘立柱建物跡が重複する。坑底の北側には、円形をした2基の掘り方がある。西が直径60cm、深さ10cm、東が直径70cm、深さ15cm、その西側から、信貴形と分類される銅製の水瓶が出土した。注口を西にむけ、北の壁に倒れかかるような状態である。むきだしで埋納されたと考えられるが、ツル科植物が付着している。

水瓶は、全高推定28.4cm、本体高24.1cm、胴部高12.6cm、頸部高11.5cm、蓋高4.3cm、高麗犬高4.1cm、高麗犬長3.1cm、胴部最大径13.1cm、口縁部径8.6cm、頸部最大径9.2cm、頸部最小径5.2cm、注口最大径1.6cm、注口最小径0.8cm、注口から把手22cm、把手幅2.2cmが各部位の計測値である。クリーニング後の重量は、本

体が1281.3g、蓋173.5g、合計1454.8gである。東京国立文化財研究所で、鉛同位体分析を請をつかい実施している。複製品製作にあたり、防錆をはじめとする保存処理をしている。

遺存状態は良好である。破損部位として、蓋についた高麗犬頭部の摩擦と右足付け根の欠損、蓋と胴部をつなぐ蝶番の折損、胴部本体の下胴部に使用時にできたと思われる10cmあまりのひび割れ、注口の表に腐食により3箇所穴があいている。使用時の指頭大のくぼみが2箇所ある。

覆土は、5層に分けられる。1層は焼土粒を含む暗褐色土、2層は焼土塊を多量に含む赤褐色土、3層は焼土ブロック、灰を含む黒褐色土、上層に薄い黒灰層がある、4層はローム多泥の明褐色土、5層は4層に近似するがローム粒、黒褐色土を含む、やや粘質な明褐色土である。壁土、銭は1～3層に含まれる。銭の中には、融着したものがあつて焼けた壁土との関係をうかがわせる。無文銭も特徴である。

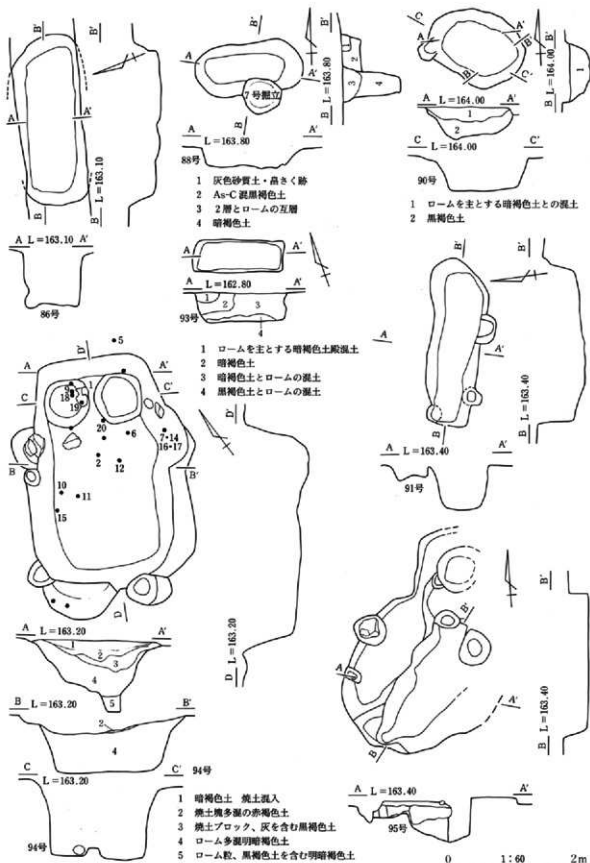
壁土はスサを多く含み、焼けている。壁は厚さ5cm前後で、タケの小舞を境にして分離剥落した状態のものである。ナデ痕は、指跡を残す、ザラつくがほぼ平ら、丁寧にナデられた3つに分類できる。小舞は、半截と丸筒がある。幅は2.5～3cm前後のものが多い。必ずしも並列したのではなく、凸面と凹面は内壁と外壁のちがいであろう。

山田幸一「壁」と人間の文化史45 法政大学出版局 1981

小島宙次「日本の民家」講談社現代新書528 1978

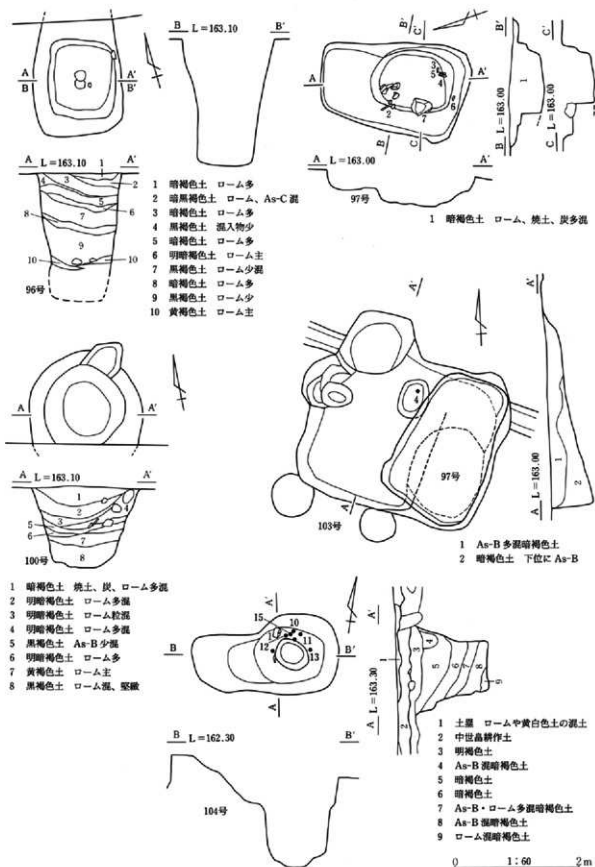
和山天神前遺跡中世土坑一覧表

番号	位置	形状	縦・横・深さ	方位	遺物	重複関係
86号	16DE-2	長方形	270・115・90	N-72°-W		11号古墳
88号	16MN-2	長方形	180・80・40	N-80°-W		88坑→7掘
90号	16L-1	長方形	150・105・56	N-60°-W		
91号	16I J-1・2	長方形	260・78・75	N-74°-W		
93号	16G-1	長方形	141・50・46	N-70°-W		
94号	16J K-1・2	長方形	355・250・90	N-30°-E	水瓶、壁材	94坑→10掘
95号	16J-2・3	長方形	220・60・70	N-30°-E		95坑→16掘
96号	6・16K-20・1	方形	200・140・202	N-12°-E		人為埋没
97号	6K-20	長方形	230・145・52	N-30°-E	かわらけ、銭、釘	墓坑か
100号	16L-1	円形	180・180・130		常滑甕	100坑→6掘
103号	6K-20	方形	300・250・25	N-72°-W	熊掌元宝、銅錠	20溝→97坑・103坑
104号	6J K-19	円形	140・125・176		釘、銭、鋳金具	
108号	6M-19・20	長方形	190・135・65	N-12°-E	銭	108坑→1集石、墓坑か
110号	16J-1	円形	108・106・50			
111号	16J-1	円形	101・92・55			中に集石
112号	16J-1	円形	126・125・85			
147号	16T・17A-3・4	長方形	253・150・72	N-55°-W		底面に貼床
148号	17B-2	長方形	150・73・16	N-80°-W		
149号	17A-5	長方形	135・30・40	N-60°-W		南西隅のみ検出
150号	17A-4	長方形	208・100・64	N-80°-E		
151号	17A-4	長方形	168・70・92	N-68°-W		151坑→149坑

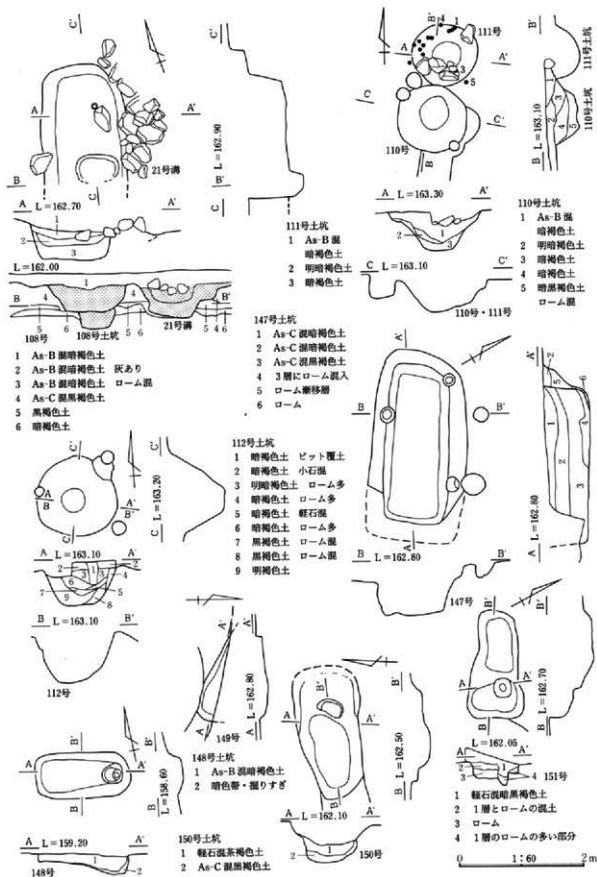


第277図 86~95号土坑遺構図

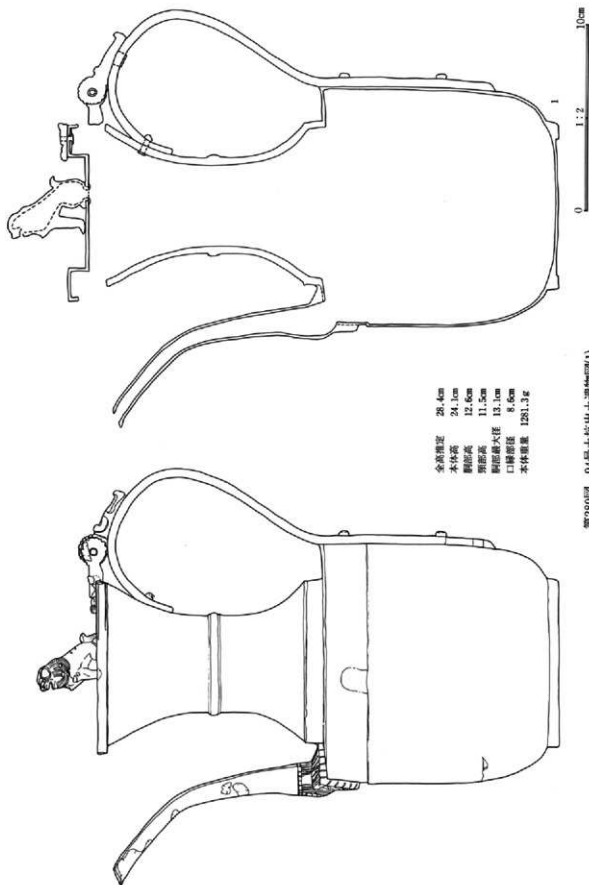
第7章 中世の遺構と遺物



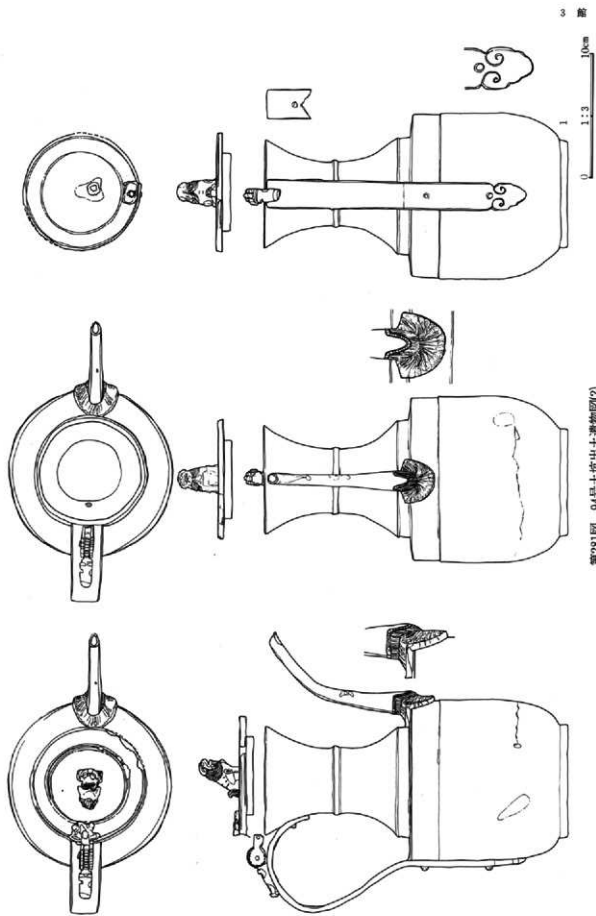
第278図 96~104号土坑遺構図



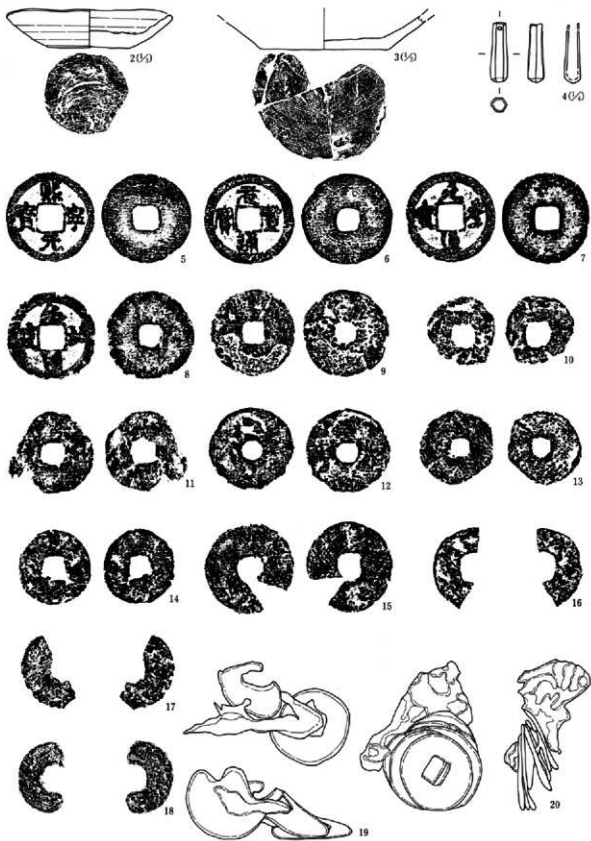
第279図 108~151号土坑遺構図



第280図 94号土坑出土遺物図(1)

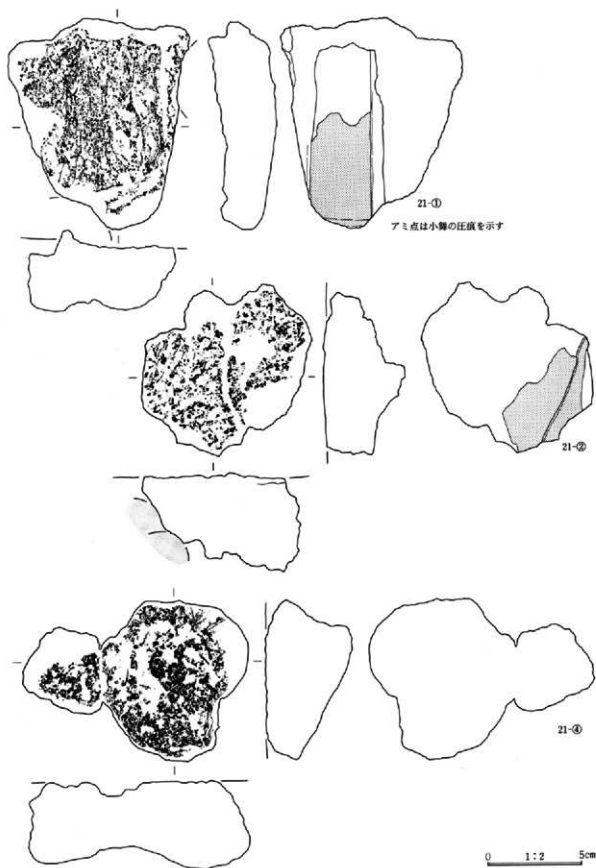


第281图 94号土坑出土器物图(2)

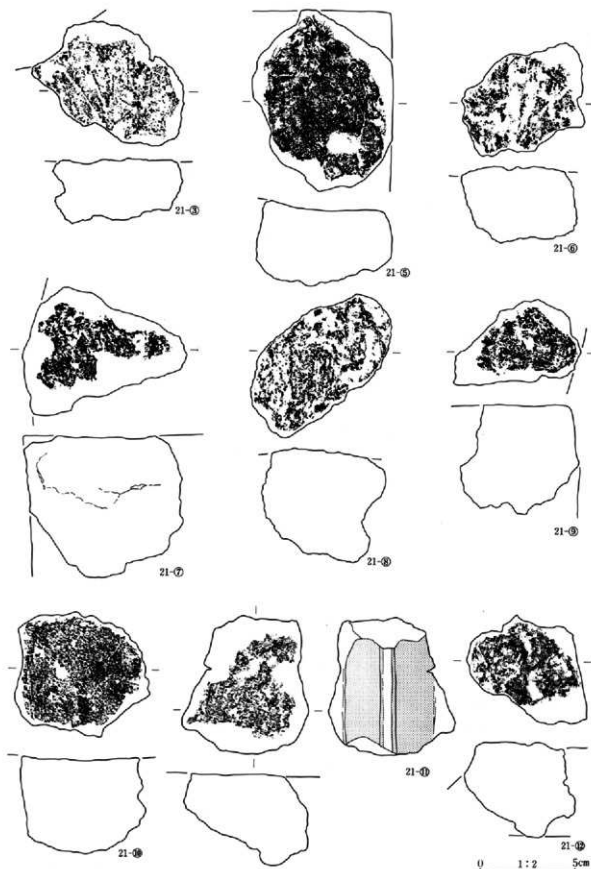


第282図 94号土坑出土遺物図(3)

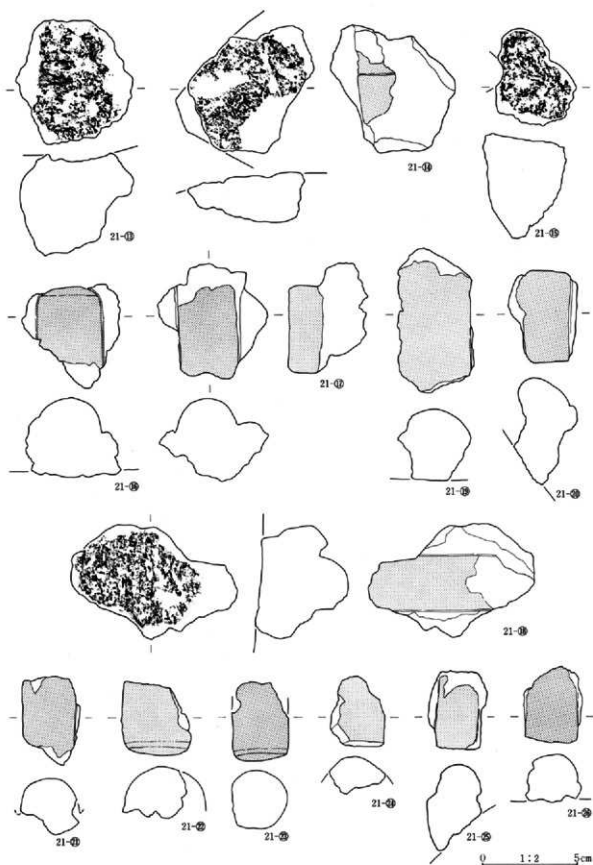
0 1:1 2cm



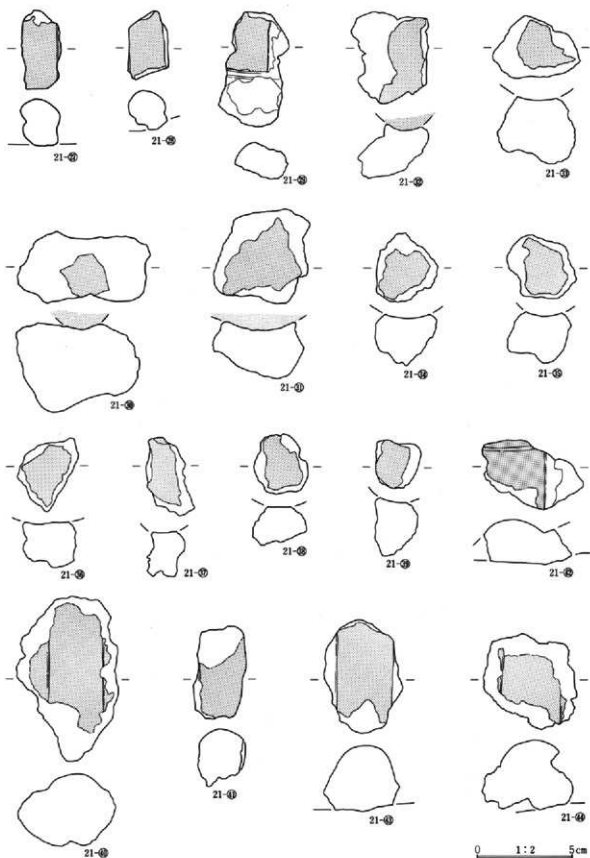
第283図 94号土坑出土遺物図(4)



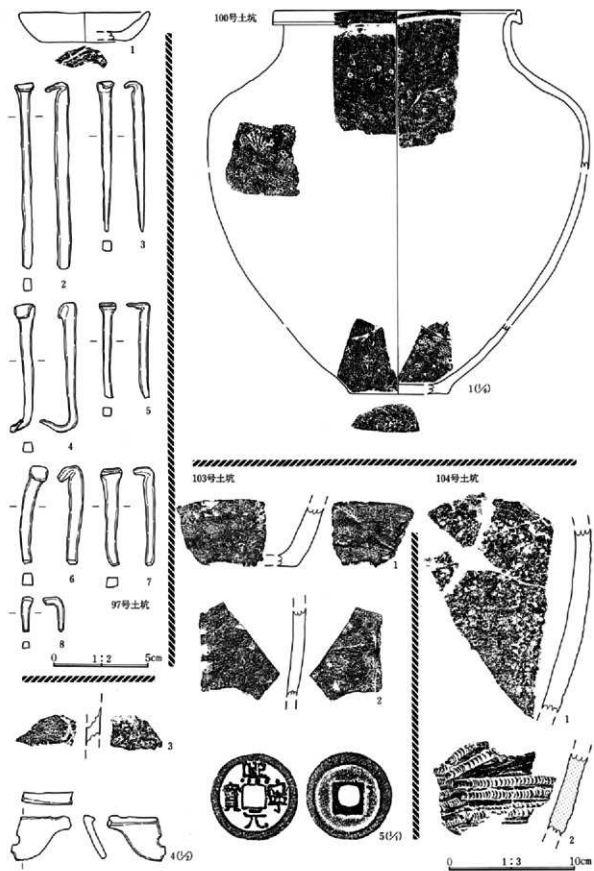
第284図 94号土坑出土遺物図(5)



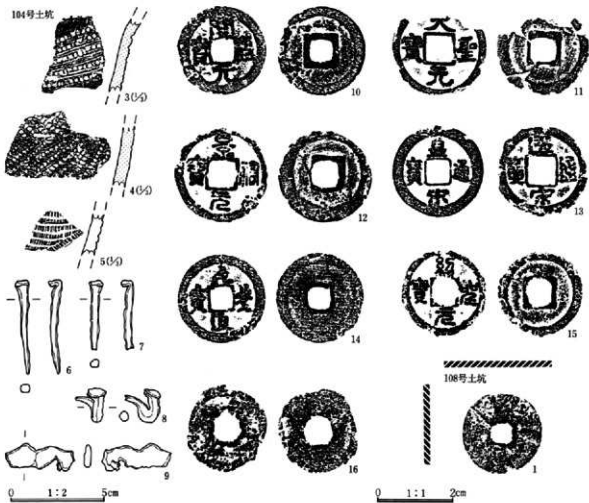
第285图 94号土坑出土遗物图(6)



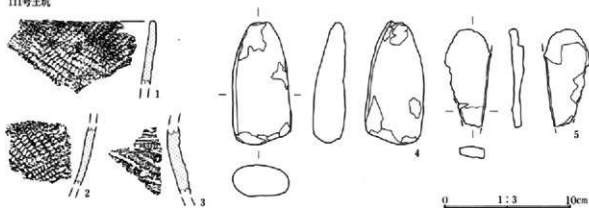
第286図 94号土坑出土遺物図(7)



第287图 97·100·103·104号土坑出土文物图



111号土坑



147号土坑



第288図 104・108・111・147号土坑出土遺物図

2号井戸 (第289・290図 P L57・143・148)

18J-2グリット、2号建物がある整地面の南西隅にある。縦170cm、横184cmの地山井筒朝顔型井戸である。深さ8m、左右の壁には掘削時のものと思われる足掛け用の横穴が、一尺程度の間隔で対にあいている。人為埋没、最下層は青灰色砂質土で一部はヘドロ化し枝や葉などが混入する。中位は黄白色粘質土と暗褐色土の混土で、五輪塔空輪や瓦、聖元元宝が出土している。検出面は、蓋をするように黄白色粘質土が詰め込まれている。井戸からは、削平段の基部をめぐり排水用と考えられる溝がある。

3号井戸 (第289・290図 P L57・143)

16D-1グリット、11号古墳を整理して構えられている18号掘立柱建物プランに重複する。87号土坑を変更、上面2.40mで深さ1.50m付近以下、直径1.20mの地山井筒朝顔型井戸である。深さ8.50m、榛名白川の現河床にも近いが湧水がなく掘削途中で放棄されたものである。中位まで11号古墳を削り人為的に埋めている。埋土には、埴輪、瓦石、常滑焼の甕が混在する。

4号井戸 (第289図 P L57)

6N-1グリット、土塁の内側にある14号古墳の玄室を、そのまま上面の石組みとして利用して作られている。縦1.35m、横1.20mの地山井筒朝顔型井戸である。深さ5m以上、重機で掘削をした。中位以下に人頭大から拳大の礫が多く混入する褐色土で埋没している。底面は平坦で、ヘドロ化していない。

5号井戸 (第289図 P L143)

17A-4グリット、15号住居跡を切って作られている。直径95cmの地山井筒型、深さ1.30mの浅井戸である。ロームと褐色土の互層で人為的に埋められている。掘り方や深さの点では、2号建物の南西にある6号井戸に類似する。隣接して瓦窯跡の16号土坑があり、湧水の形跡に乏しいが作業用の井戸とも考えられる。

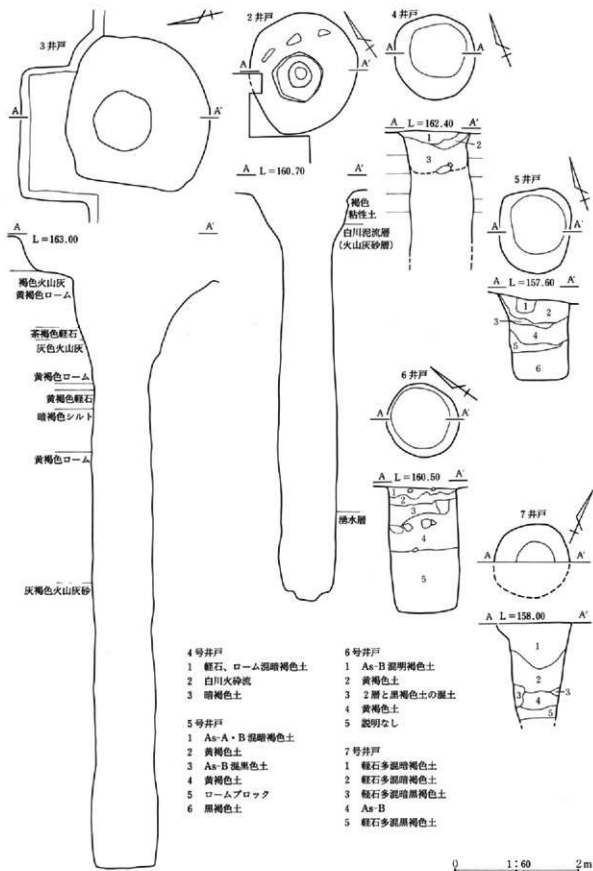
6号井戸 (第289図 P L57・143・148)

18J-5・6グリット、2号建物の掘り方調査で南西隅にあたる箇所を検出された。直径1.20mの地山井筒型、深さ2mの浅井戸である。湧水や滲水を思わせるウロ状の痕跡には乏しい。3期にわけられる2号建物の創建期か2期に伴うものである。5号井戸と同様、ロームと褐色土の互層で人為的に埋められている。

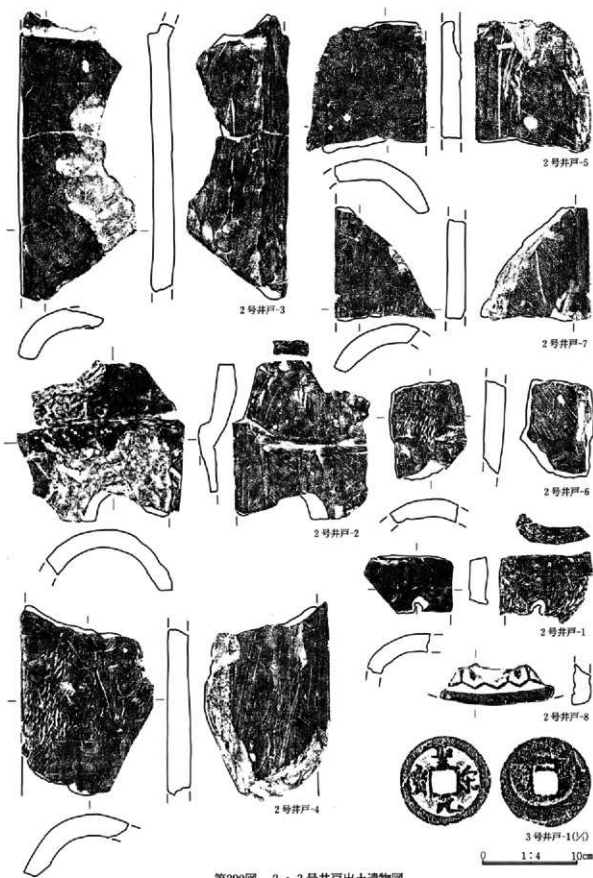
7号井戸 (第289図 P L148)

18FG-2グリット、6号道の左手、調査区の南壁にかかり、As-B 鼎を切って検出された。直径約1m、深さ2mの地山井筒朝顔型井戸である。覆土は6層に分けられ、底面から高さ60cm付近まで井筒の痕跡がある。半埋没後、人為的に埋められた形跡がある。

以上、中世の井戸は、寺域内で4基、東で2基がある。深さ2m以内の浅井戸と8m前後の深井戸に分けられ、時期や用途での差があるものと考えられる。2号井戸のように、壁にマンガン凝集が多く鉄分が多い水質と指摘されたものもある。また、大半が人為的に埋め戻されているのも特徴のひとつである。



第289図 2～7号井戸遺構図



第290图 2·3号井尸出土器物图

1号～6号集石（第291・293図 P L59・60・143・144・148）

16区古墳に囲まれた中に、やや集中している。畳1枚ほどの大きさで長方形の掘り方、石を詰め込んだ遺構である。墳丘をさけて周堀の中にあるものも多く、整地と合わせて盛土を確保するため削平した古墳から出た石を処理したものと考えられる。

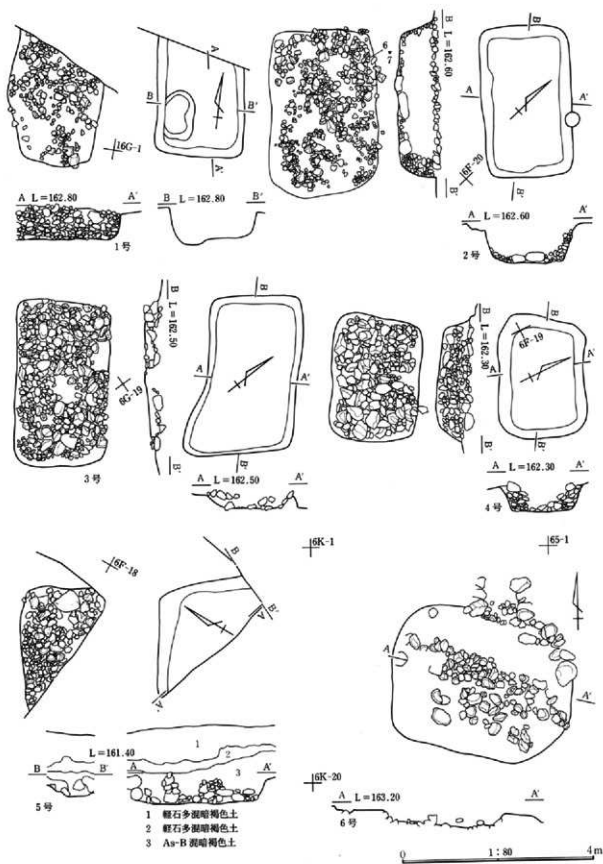
1号は、拳大からまれに人頭大の石で埋まる。重複する11号古墳の葦石と思われる。2号は、拳大にまじり、石室の壁か天井の石が7点含まれている。また、壁際が一見すると貼りつけたように密着しており、1号との差異をみせている。3号は、掘り方の形状、大きさの点で他と類似しているが、唯一浅い。4号は、10号古墳の周堀が途切れた所にある。長方形の掘り方と規模は、1号・2号と共通する。石は壁際に人頭大ほどのものが多くみられ、石組みを想定して調査を進めたが壁を作るような規則性は読み取りにくい。5号は、北西隅とそれに続く範囲が検出される。底面がローム層に達し、長方形と推定される掘り方は他と同じである。石は10号古墳の葦石と思われ、底面から50cmほどの間に集中している。底面に近い下位と拳大ものが集中、中央部と上位に大ぶりなものが多い。6号は、13号古墳前庭の石組みそのままを利用し、13号溝を切って作られている。他の5基との差異は、掘り方がひとまわり大きく、底面がローム層に達せず浅いこと。石が比較的大ぶりで、中央部に帯状に集中していることがあげられる。規模や方位の点で、2号住居と名付けて調査した竪穴状遺構に共通している。

和田山天神前遺跡集石遺構一覧表

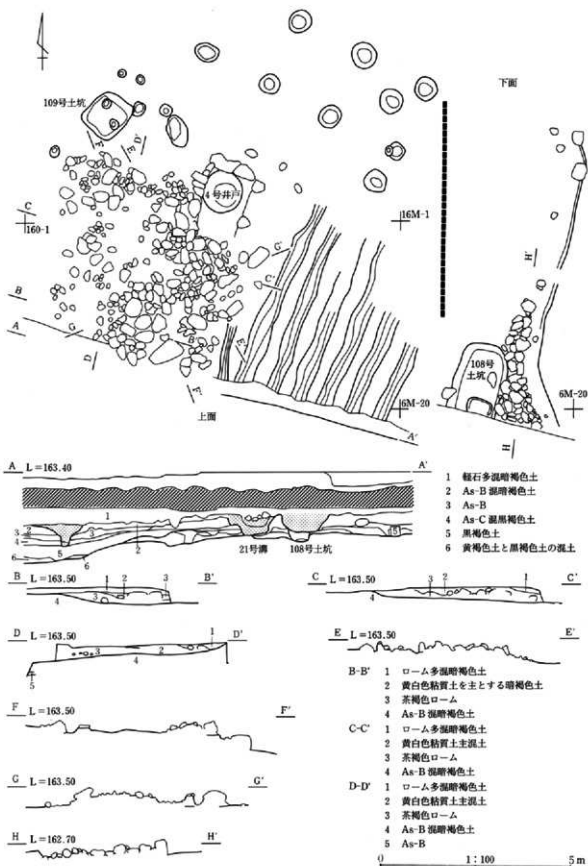
番号	位置	形状	縦・横・深さ	方位	遺物	重複関係
1号	16E-1	長方形	230・180・60	N-5°-W	永業通宝	11号古墳
2号	6EF-20	長方形	320・190・90	N-48°-W	政和通宝、元熙通宝、埴輪	11号古墳
3号	6F-19	長方形	350・195・30	N-50°-W	円筒埴輪	
4号	6EF-18・19	長方形	260・175・85	N-65°-W	埴輪、縄文土器、石器	10号古墳
5号	6EF-17	長方形	180・210・65	N-20°-W	埴輪、縄文土器、石器	10号古墳
6号	6IJ-20	長方形	400・300・50	N-78°-W	埴輪、縄文土器	13号古墳

14号古墳上面集石（第292図 P L59・60・143・144・148）

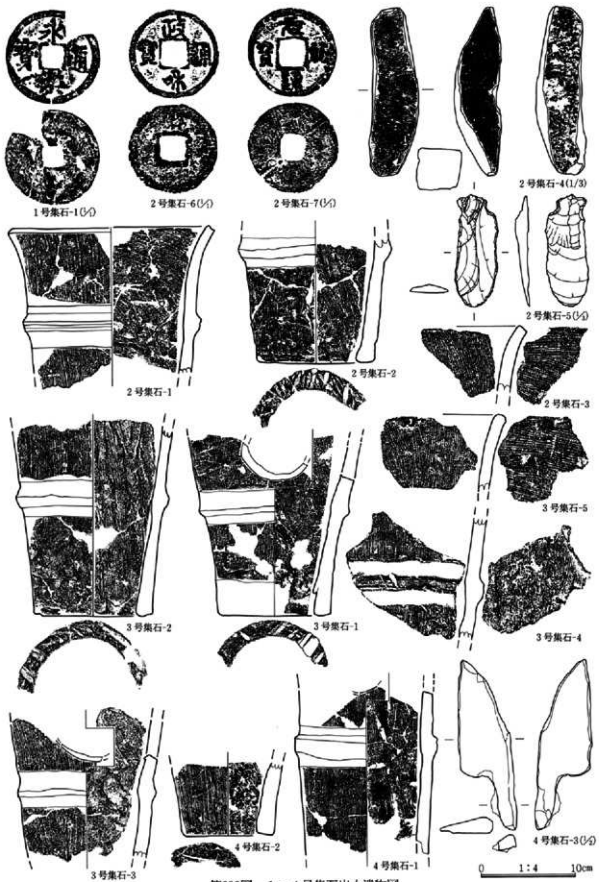
6N-20、16MN-1グリッドで検出された土塁の芯材である。14号古墳の墳丘の高まりと石室をはじめとする石を利用したもので、同様に15号古墳の高まりを利用して作られた橋台と対をなす遺構である。縦約6m、横約5mの方形、主軸方向N-65°-Wである。構築は、墳丘上面を全体に削平、石を芯にして白黄色粘質土を多く混入した暗褐色土で盛り上げる。北側から積み重ねていることが、断面からわかる。西側に続くことも考えられるが、16Pライン近くの南北断面では盛り土を示す箇所はない。また、石も途切れるようである。東側には、白黄色粘質土が12号古墳まで続いている。この直下には、南北方向の畦をもつ畠がある。周辺の遺構では、下層に21号、22号溝、108号土坑がある。同時期には、すぐ北側に張り出すように4号井戸、約3mの余地をもって平行する24号、6号～8号の掘立柱建物がある。これらの建物群を囲む土塁と考えられる。



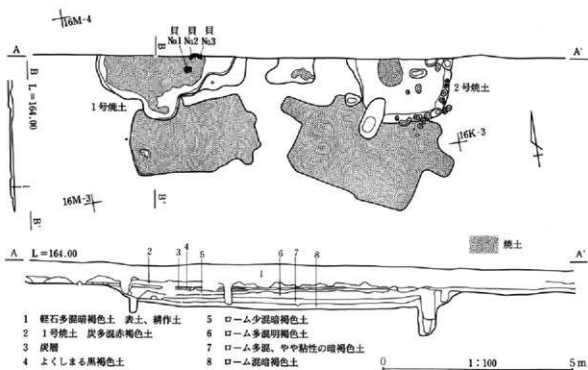
第291图 1~6号集石遺構図



第292図 14号古墳上面集石遺構図



第293图 1~4号集石出土器物图



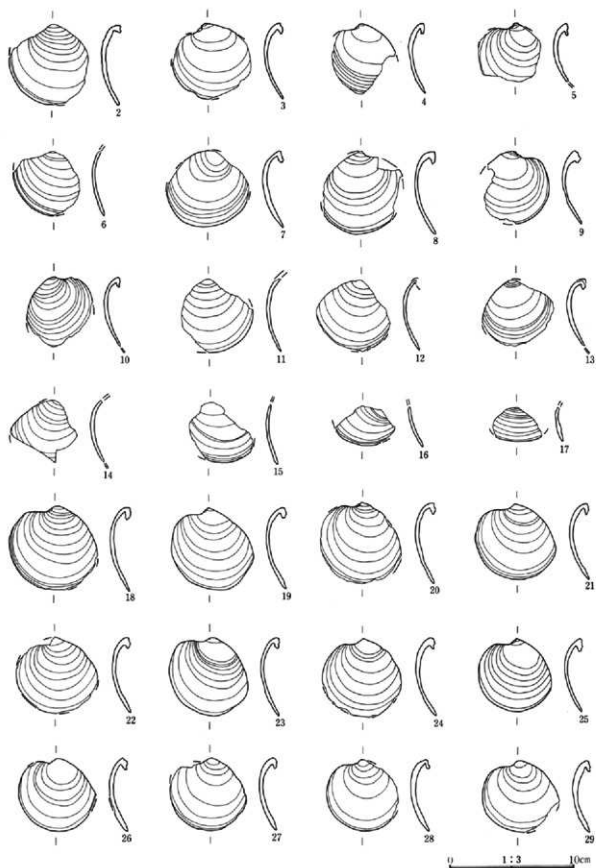
第294図 1・2号焼土遺構図

1号・2号焼土 (第294～299図 P L59・148・153～157)

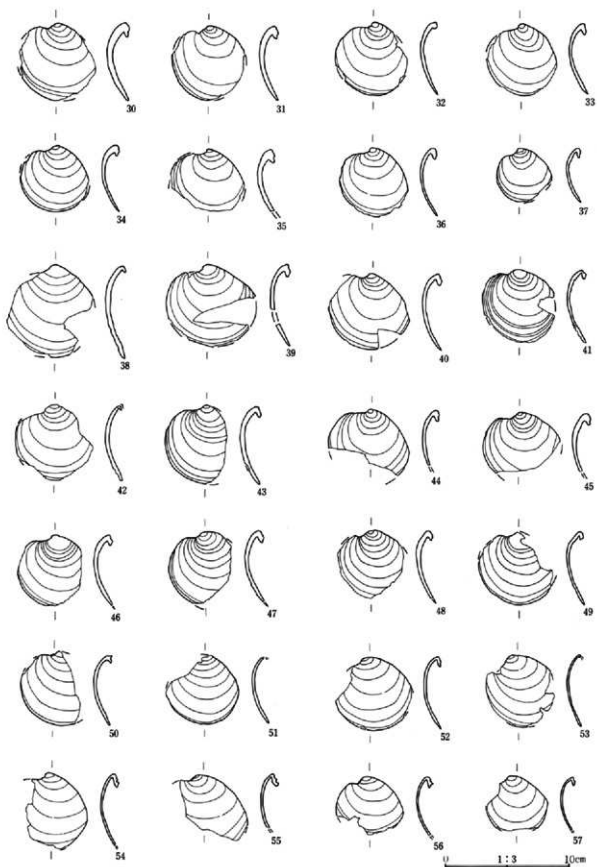
16K Lー2・3グリットにあり、極楽院の伝承地とされる斎禰壇とよばれる一角の中にあたる。下層には、28・29号掘立柱建物跡、上層には6号をはじめとする掘立柱建物跡がある。一坪ほどの広さをもち、焼け土が広がる遺構である。修験にともなう火を焚いた場所と推定される。構造は、盛土された整地面から少なくとも10cm以上掘り込み長方形に区画、壁際を細い杭で土留めをしているようである。上屋の有無は確定できない。区画された内部には、下層に炭と灰がありその上面は一面に焼け土が広がる。炭や灰からは、多量かつ継続して火を焚いたことが推定される。炭の中には、板状のものや竹らしいものがある。

1号は、連続性のある新旧2基からなる。旧期は、縦3.30m、横1.80m、検出時に掘り方が露出したものと思われ、わずかに焼け土がみられる程度で構造は不明である。南西隅の石は、掘り方に据えられた台石ともみえる。新期は、一部が重複して南半分が検出された。縦3.70m、横1.10m、南辺中央部に焚口を思わせる張り出部がついている。内部は、検出面から10cmほど下がりほぼ平坦、中央部には焼け土と炭、灰が広がる。この一角にカマガイの貝殻が、3箇所に分かれて集積されている。集積1は15点、集積2は230点、集積3は110点の数である。出土状態の特徴は、焼け土層をわずかに掘りこむ程度の小さな穴に埋められている。貝殻は、身を上にして重ねられている。貝殻の特徴は、被熱で灰色に変色している。整理中に破損しているが、本来は完全な形である。確定できる加工の痕跡や細工はない。唯一、集積1の中に貫通していないが管径で穿孔したものが1点だけある。貝殻は、使用後に廃棄されたものであろうか。

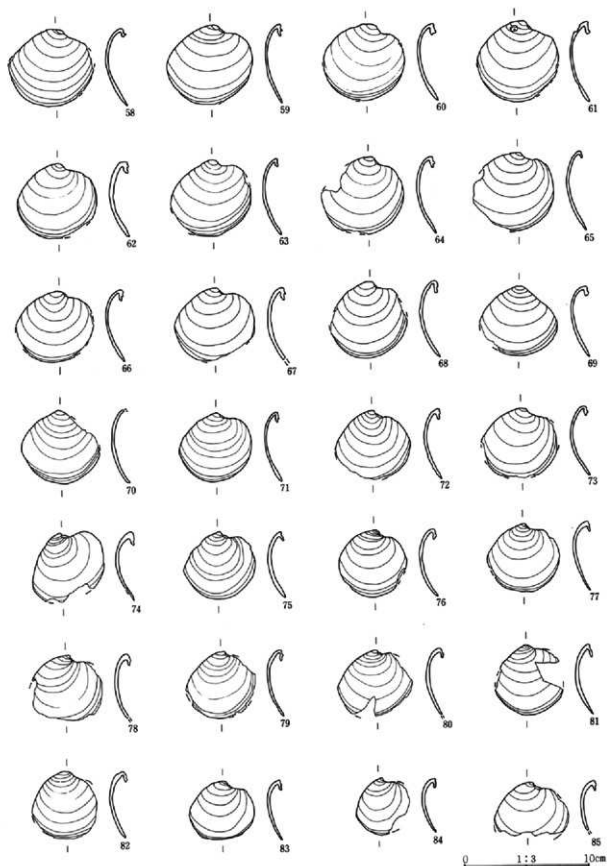
2号も連続性がある新旧2基からなる。旧期は、縦3.50m、横2.50m、北辺に新期が重複する。東西両辺に張り出部がついている。1号の旧期と同じく掘り方の状態で、被熱でわずかに赤くなっている。新期は南半分が検出される。縦2.40m、横1.50m、深さ10cmほどの掘り込みがあり、壁際を幅20cmの溝がめぐり中に直径10cmのビットが密に並んでいる。外周を囲う簡単な土留め用杭列と思われる。



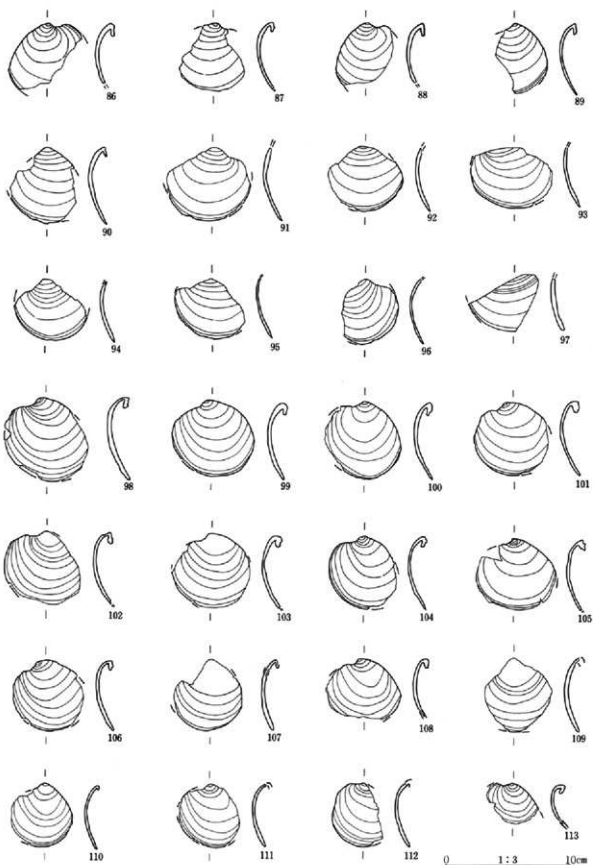
第295图 1号烧土出土遗物图(1)



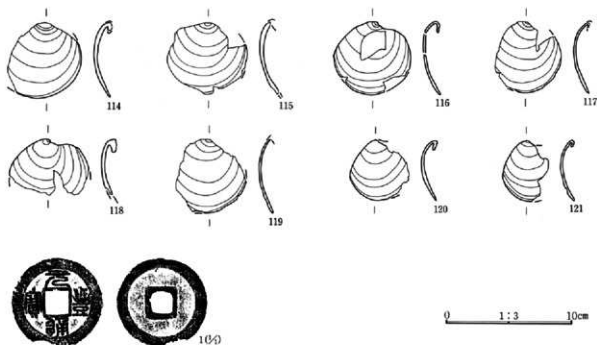
第296図 1号施土出土遺物図(2)



第297图 1号坑出土文物图(3)



第298图 1号出土土遺物图(4)



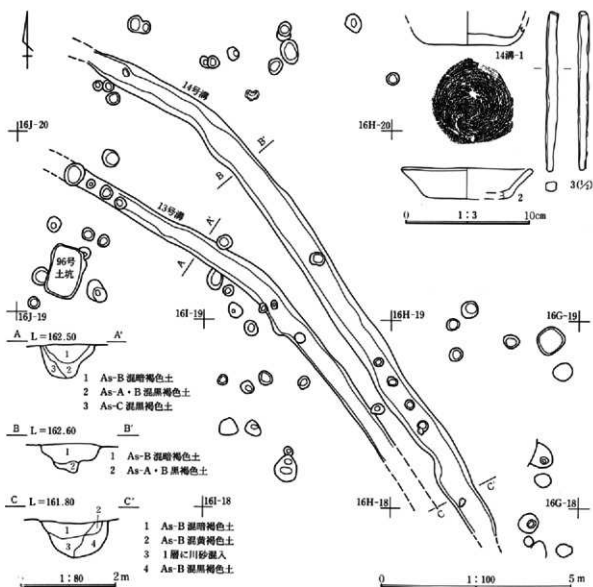
第299図 1号焼土出土遺物(5)

溝 (第300図 P L 57・58・143・148)

新旧10条がある。溝本来の機能としてではなく、建物や土塁に沿って区画を目的としたり、柵列の掘り方となるものも含まれる。方位からは、21号と22号が27号掘立柱建物跡の南面を区画している。地形勾配にも沿い、建物からの排水機能も考えられる。16号、17号が焼土遺構の東辺を浅い掘り込みで区画している。13号、14号、18号～20号は、土塁の内側をめぐる柵列の掘り方である。2条で1対の構造が推定され、23号掘立柱建物跡に取り付いている。15号も同じく23号掘立柱建物跡に取り付いているが、1本構造で18号に対応するものであろうか。

和山天神前遺跡中世溝一覧表

番号	位 置	上幅・深さ	方 位	遺 物	重 複 関 係
13号	6 G I-17~20	50・36	N-60'-W		20溝に続く
14号	6 G I-17~20	80・32	N-60'-W	釘	19溝に続く 5集石より古い
15号	16NO-13	160・60	N-70'-W		
16号	16 J-2	30・15	N-5'-E		17溝より古い
17号	16 I J-2・3	40・15	N-10'-E		16溝より新しい
18号	18K L-1	50・20	N-70'-W		中央にビット、柵列か
19号	18K L-1	20・15	N-70'-W		14溝に続く
20号	6 K L-20・16L-1	30・15	N-70'-W		13溝に続く
21号	6 M20・16M-1	80・60	N-5'-E		21溝→108坑→畠→土塁
22号	6 K-19・20	100・55	N-5'-E		22溝→畠→土塁

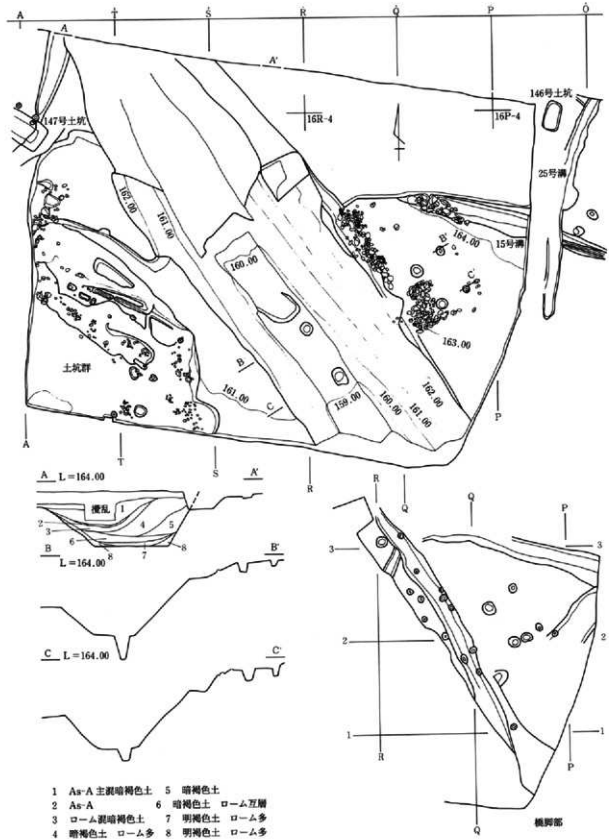


第300図 13・14号溝遺構図・遺物図

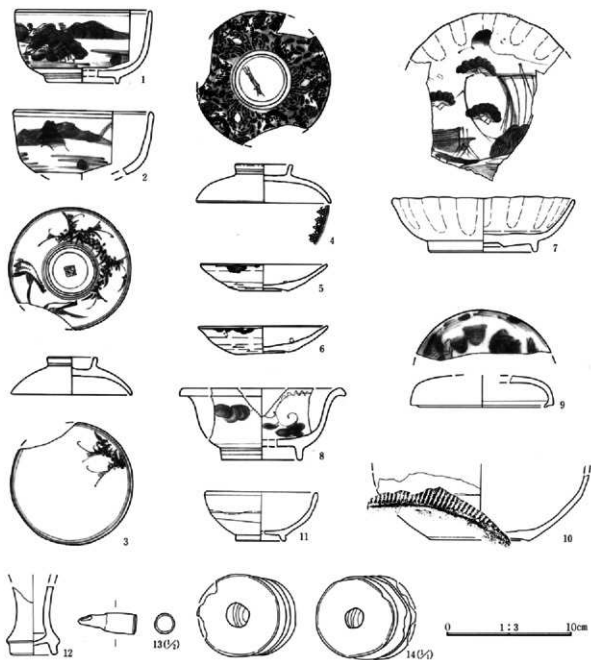
南大堀 (第301図 P L65・142)

16P～T-20～4グリットにまたがる、船の南西を区画する堀である。東堀が尾根の端部を一段深く掘削しているのに対して、中段を斜交、南におお余地を残している。電探調査では、東南の延長線上でも存在が推定され、北西には菅原神社方向のにびている。上幅4m、底面幅2m、深さ2mの箱堀である。底面は北西への上り勾配で、途中には段差がある。内側の法面60°、外側50°と違いをみせている。掘立柱建物群の西縁上にあたる位置で橋が検出されている。橋上の15号古墳上には2対、底面には1対、外側に1対の柱穴がある。長さ16m以上、幅は底面の柱間で1.50mである。古墳上の柱穴からは、直径20cmの柱根が検出されている。

埋没状態からは、掘削、改修、江戸時代の再利用の3時期が読み取れる。掘削後は、土砂流入後も堀払いをして当初の状態が維持されている。その後、山側からの土砂流入、そして土塁崩落でその機能を失っていったようである。少なくとも江戸時代の天明年間前後までは空堀の状態がみられる。堀の南側には、8号道や土坑が多数掘られている。掲載した遺物は、南の土坑群からの出土である。



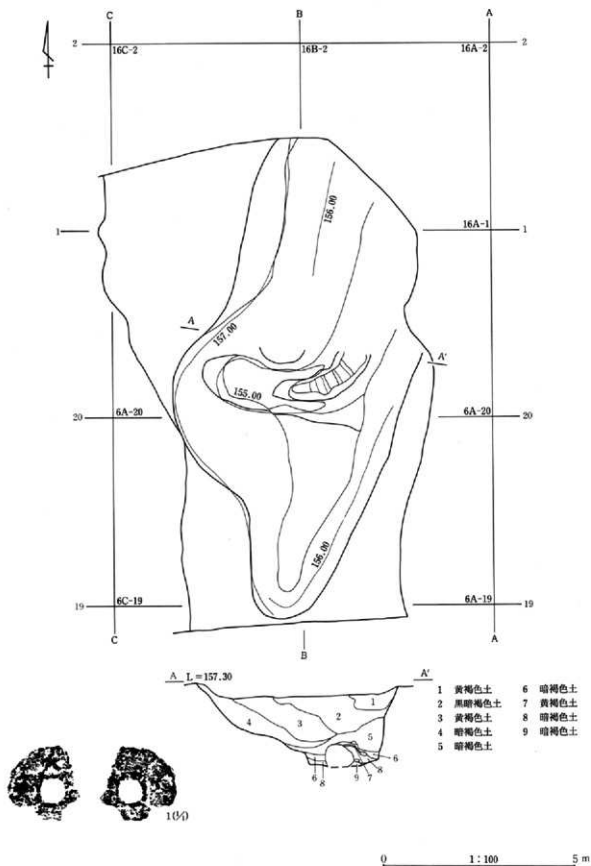
第301图 南大掘遺構図



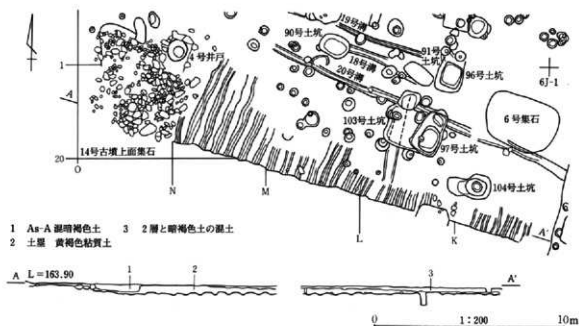
第302図 南大塚出土遺物図

東大塚 (第303図 P.L.65)

16A～C-18～1グリットにまたがり、尾根の端部を掘削し、館の東辺を区画する堀である。電探調査では、南大塚に続くと推定されているが中間には10号古墳がある。この位置には、伝承では榛名白川から尾根の南の池に通水する貫堀（かんぼり）があるとされている。尾根の先端には、この堀の東南側になお別郭を構える余地がある。榛名白川を外郭の堀として、その内側の堀とも考えられる。尾根上の中世面とは8mの段差があり、尾根側に幅4mの平坦面がある。上幅6m、深さ2m、南端は底面が二段になり、途切れて土橋状になることも考えられる。埋没状態からは、2時期以上がある。当初は底面が平坦な箱堀であるが、尾根側からの土砂の流入が多く、直ちに中心を尾根側に移して改修されている。



第303図 東大堀遺構・遺物図



第304図 6区中世遺構図

中世島 (第304図 P L 67)

6 J～N-19・20、16M-1グリット、12号古墳と14号古墳の間、東西22m、南北最大5mの範囲で土壁の直下にだけある。北側は、館内部の整地で削られている。畝は南北方向にあり、幅40cm、高さ20cm、畝間80cmである。耕作土は、暗褐色土である。

6期区分のうち5期にあたり、6期を前後に区分する指標である。畝の残り方は、耕作中か直後を思わせる極めて良好な状態で、館の出現が急でかつ強制的に行われたことを示している。時期を示す遺物は出土していないが、14号古墳を利用してできた土壁の中には北宋銭が混入している。これを年代の下限とすることができる。また、耕作土の下面には108号土坑、21・22号溝がある。

第7章 参考文献

- 小林康幸 『関東地方における中世瓦の一探』 『神奈川考古』 25号 1989
- 小林康幸 『東日本における中世瓦生産』 『考古学の諸相 (坂田秀一先生追悼記念論文集) 1996
『浄土庭園と寺院』 永福寺創建800年記念シンポジウム記録集1997
- 青木 豊 『所謂聖徳太子に関する考察』 『国学院大学考古学資料館紀要』 第13輯 1997
- 久保智康 『中世・近世の鏡』 日本の美術394 至文堂 1999
- 上原真人 『瓦を読む』 歴史発掘111 講談社 1997
- 福原圭一 『戦国時代の上野国一極楽院の支配をめぐって』 『信濃』 44巻11号 1992

群馬県文化財保護審議会会長 近藤義雄氏には、中世寺院について浄土系、天台系の寺院で自然地形の中に建物を配置、周辺で現存するものとして寛政町の長純寺、法峰寺に類例を求めることができるとの指摘を受けた。瓦の年代は、刺頭文がやや画一的であること、巴文の尾が長いことから14世紀代であると合せて指摘を受けた。

瓦の年代は、上記のほかには鎌倉市教育委員会 小林康幸氏に13世紀後半と指摘されている。その理由として鎌倉地域の扁年を前提に、下向き刺頭文の様式、平瓦の斜格子タタキの特徴、軒平瓦の瓦当貼付技法があげられた。

第8章 江戸時代の遺構と遺物

1 概 要

調査区域のほとんどに遺構が残され、屋敷跡2箇所、畠、道、神社の前身などがまとまりをもって検出された。それは、谷地から尾根を含めてほぼ全域に開墾の手が入り、その中に民家が点在するという現代につながる景観に復元されよう。道や溝の一部は、明治年間の公図とも一致し、おおよそ江戸時代後期天明前後にまでさかのぼることができる。天明三年浅間山の噴火が契機となり、道の普請やそれに伴う新たな畠の区画で、今に見るような景色ができたのではないだろうか。

承応三(1671)年の上州群馬郡和田山村御縄打水帳には、石高138石余、田畑12町余とある。明治16年の上野国郡村誌では、戸数37、田畑20町余、地味雑穀乾鬆、米麦、蕎麦に適し桑不適、水利便早苦なしと村の様子を記載している。火山灰質の土壌、雑木の繁る様子が浮かんでくる。

屋敷は、江戸時代後期天明前後から明治時代前半までのものである。掘立柱建物や竪穴状遺構を併存することに特徴がある。また、豊富に残された遺物からは、当時の庶民生活の一端を知ることができる。

菅原神社は、上野国郡村誌和田山村によると旧天神社、徳川家光から20石6斗の朱印地を与えられている。検出されたのは、天明前後の石垣や溝である。和田山の集落としては、鬼門にあたる北東に熊野神社がある。

2 1号屋敷(第305~314図 P L49・138~141・147)

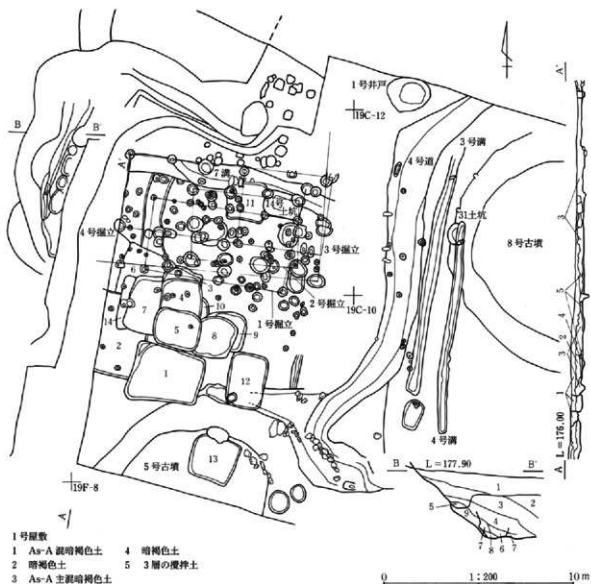
19B~F-7~12グリット、尾根の東開口を削平、谷地に面して三方を5号、22号、23号の各古墳に囲まれている。南北25m、東西20mの広さがあり、4号道沿いに北へも広がる。その構えは、北寄りに母屋である掘立柱建物、その前面に竪穴状遺構、北西隅に井戸というのが基本の配置である。大きく3期の変遷がある。1期は1号・2号掘立柱建物が、2期には3号・4号掘立柱建物が対応する。3期は、移転直前までの屋敷でプランなどは未検出である。和田山在住の見山力氏からは、明治初期までの旧宅跡と指摘された。

母屋である1~4号の掘立柱建物跡、1~14号の竪穴状遺構、7号溝、出入り口のカイドである4号道跡、斜面の土留跡と思われる3号、4号の溝、1号井戸、屋外の施設と思われる土坑などがある。7号溝が最も古く、天明以前と推定される母屋に併設された井戸の排水溝である。また、32号土坑は、暗色帯を目的とした探掘坑で、この改築時の壁等の土を目的としたものであろう。

1~4号掘立柱建物跡(第306・307図 P L49・148)

1号屋敷の南面する母屋である。柱穴と思われるピットは大小131本あり、その中から掘り方の形状や埋土の特徴から4棟を分別した。数が増える可能性は十分にある。掘立柱と礎石柱の2つのタイプがある。ただし、石の抜き取りを考慮しておく必要がある。柱穴には、As-Aを多量に混入する。軒先の雨垂れラインまで地業されている。

1号は、梁間2間、3.90m、桁間4間、7.50mの東西棟である。棟方向は、N-80°-Wである。柱穴は、方40cm前後と比較的大型、4寸程度方形の柱底が南西隅で検出されている。柱間は6尺である。建物の真ん中に柱穴があり、左右2間で間仕切りされている。

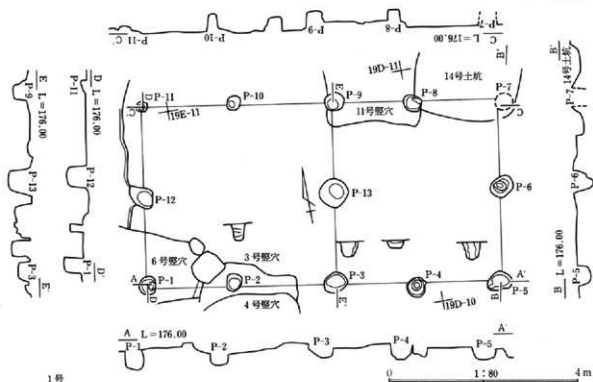


第305図 1号屋敷遺構図

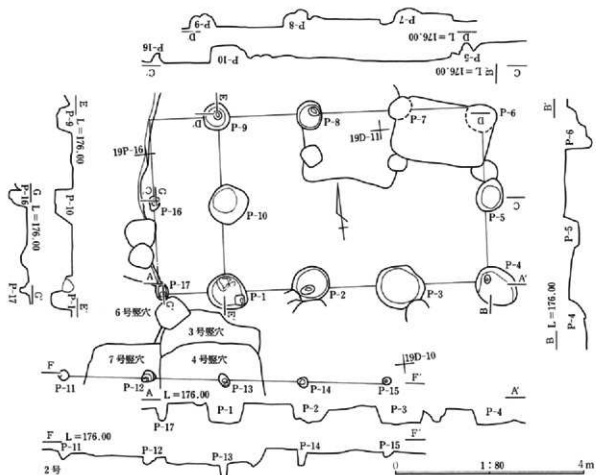
2号は、梁間2間、3.80m、桁間3間、5.70mの東西棟である。棟方向はN-85°-Wである。柱穴は、方60cmをこす大型で10cmをこす柱痕が4本検出されている。柱間は6尺をわずかに上回るようで、一定していない。南西隅に1間のギャクエンがつき、さらにその外側に西から南にかけて小ぶりな柱列がL字にめぐる。柱筋がほぼ揃い、ギャクと考えられる。1号からの発展形態と考えられる。北桁間の中央で11号竪穴状遺構が重複する。その位置から、かまどを備えたカッテとの解釈もできるが前後関係が定かでない。また、全体が3号のプラン内にあり2号の方が古い。

3号は、南東隅を中心とした東梁間2間、5.40m以上、南桁間4間、11.30m以上の東西棟である。南桁間で2号と重複しており、新しい建物であることがわかる。2号までに比較して大型化している。

4号は、梁間2間、桁間5間の東西棟である。西から2間目で間仕切れ、床貼りと土間のちがいを意味するのであろうか。柱穴は方形、掘り方に根固めの栗石が使われている。

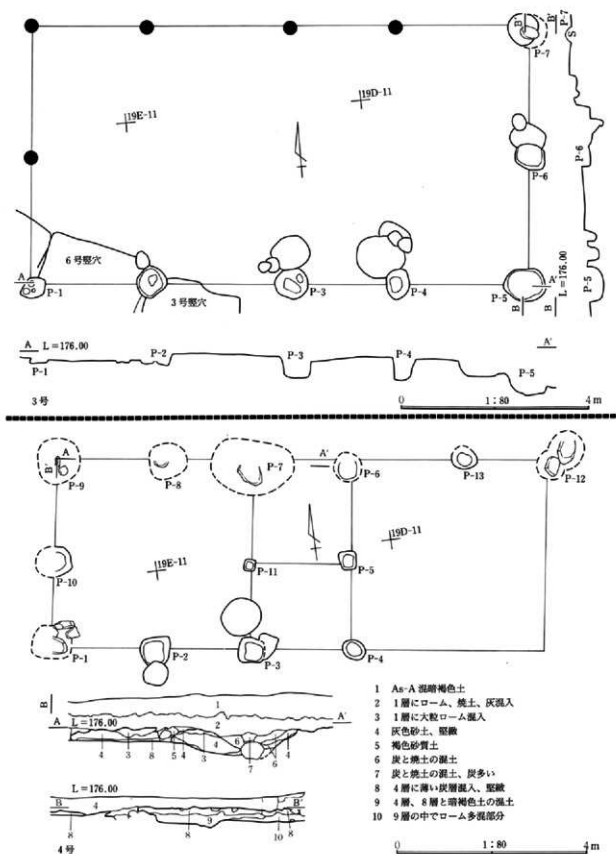


1号

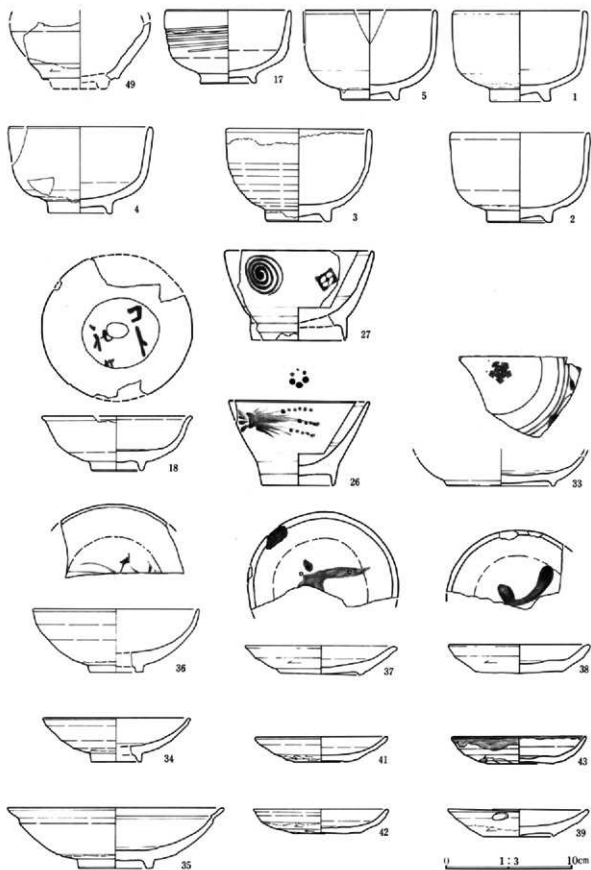


2号

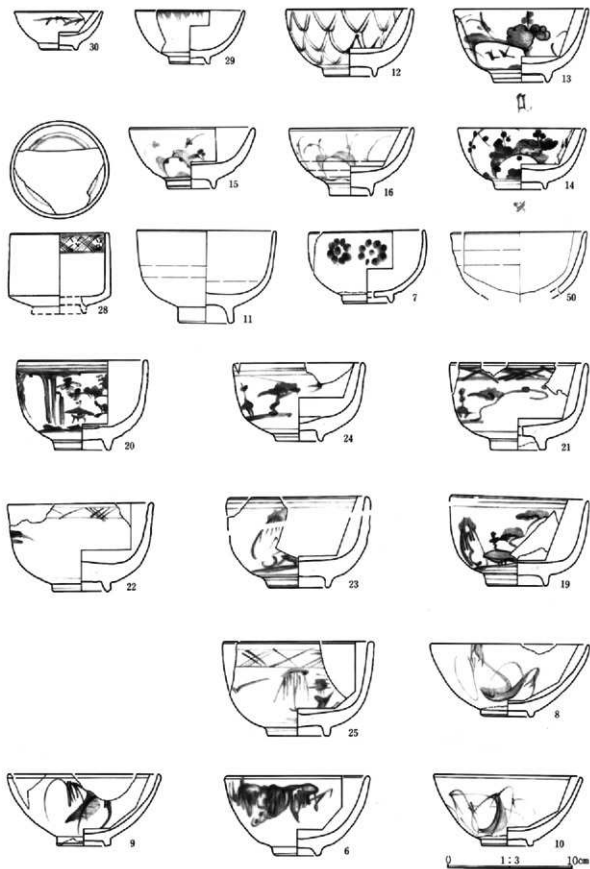
第306图 1・2号掘立柱建物遺構図



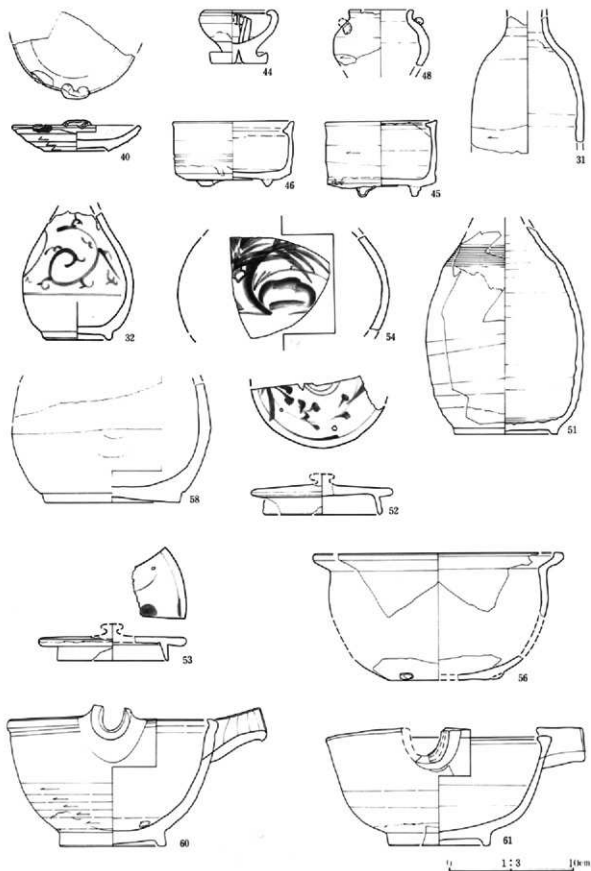
第307図 3・4号掘立柱建物構図



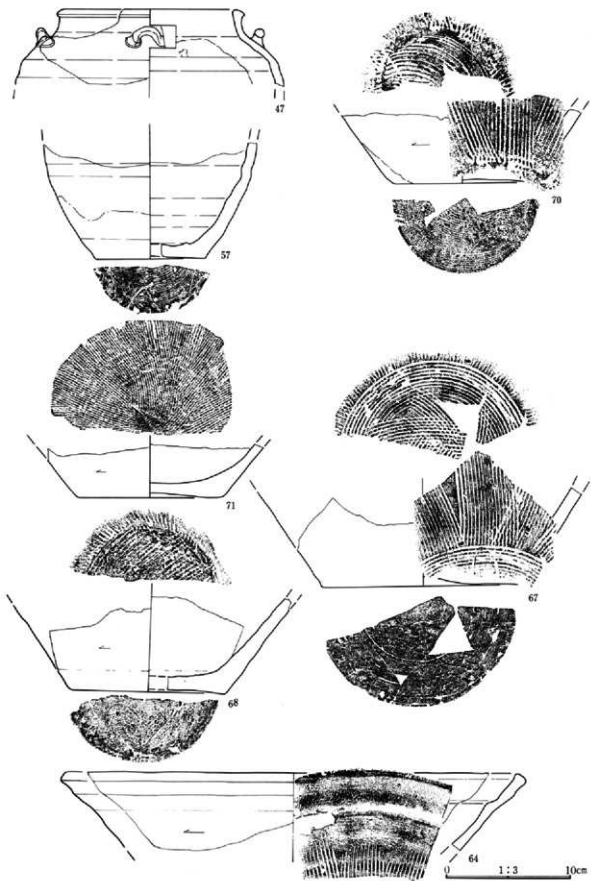
第308图 1号层出土文物图(1)



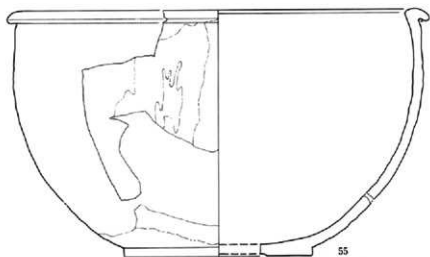
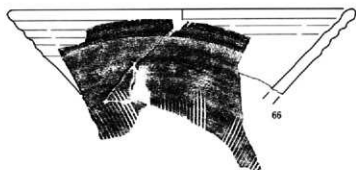
第309図 1号屋敷出土遺物(2)



第310图 1号屋敷出土遺物(3)

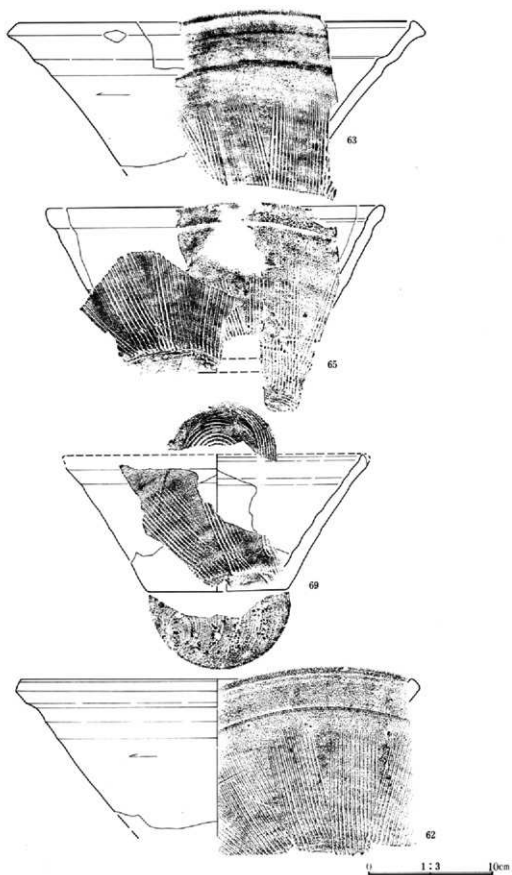


第311図 1号屋敷出土遺物図(4)

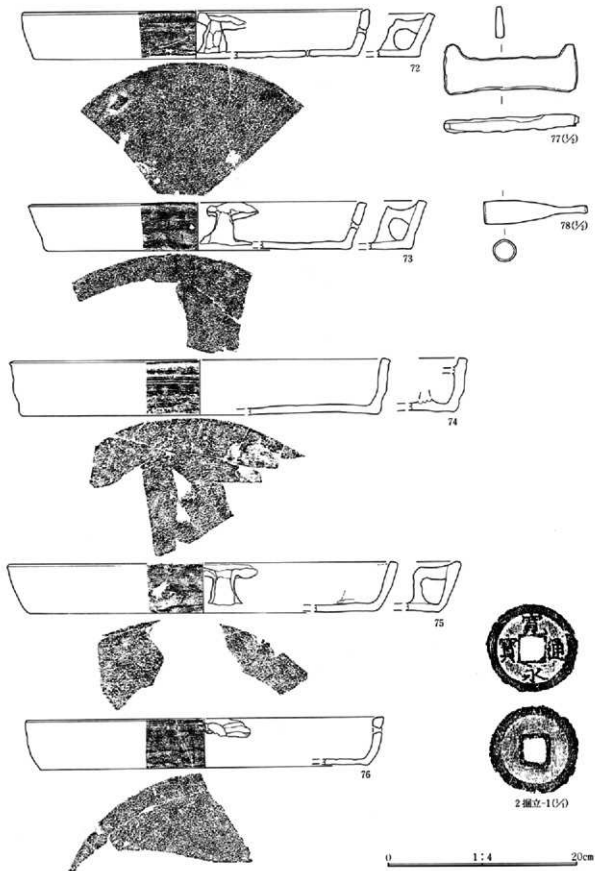


0 1:3 10cm

第312图 1号屋敷出土遺物図(5)



第313図 1号屋敷出土遺物図(6)



第314图 1号屋敷出土遗物图(7)・2号掘立柱建物出土遗物图

1号～14号竪穴状遺構 (第315～317図 P L 49・142・148)

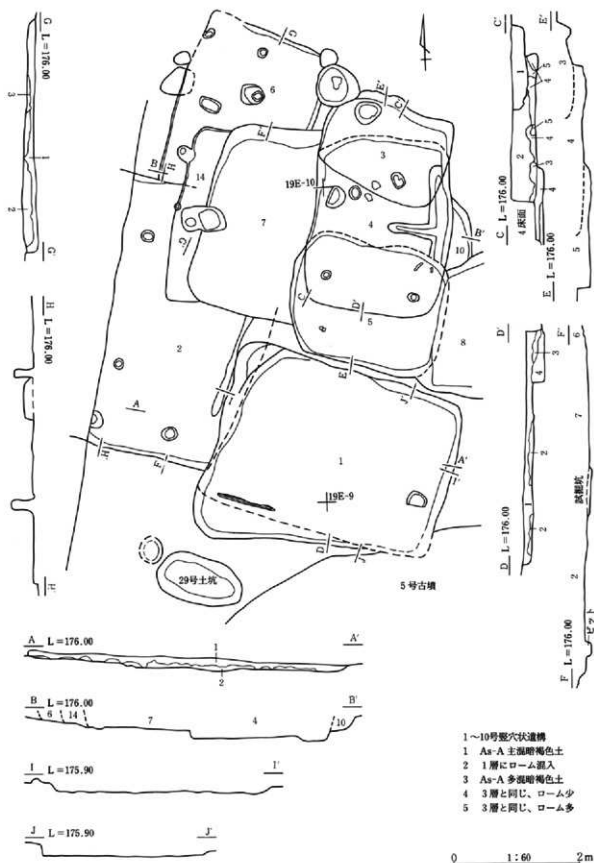
1号屋敷内にある母屋に付随した施設と考えられる。土間形式、長方形と方形の2つの形状があり、長方形から方形・小型化への変遷がみられる。半地下式の貯蔵施設という見方が一般的であるが、個別にいくつかの特徴をあげることができる。重複関係では、11号のように掘立柱建物プランにおさまり、かまどの設備があることから勝手として機能していたことも考えられる。用途は、形状や規模、深さに差があり、複数を考えるのが妥当であろうか。世田谷区立郷土資料館の石井栄一氏には、地域性を考慮した桑の作小屋との指摘も受けている。

番号	グリッド	形状	規模(縦・横)	主軸方向	備 考
1	19DE8・9	長方形	365・262	N-20°-E	煙管、釘、砥石
2	19E9	長方形	250・435	N-20°-E	煙管、2掘より古い
3	19DE10	方形	200・145	N-10°-E	3・4掘より古い
4	19DE9・10	方形	210・285	N-5°-E	煙管、釘、火鉢、砥石
5	19DE9	方形	245・190	N-115°-E	釘、寛永通宝
6	19E10	長方形	215・280	N-15°-E	3・4掘より古い
7	19E9・10	方形	155・305	N-20°-E	
8	19D9	方形	210・220	N-25°-E	
9	19D9	方形	210・200	N-10°-E	
10	19D9	方形	35・100		東辺の一部を検出
11	19CD10・11	方形	215・220	N-20°-E	かまどあり
12	19CD8・9	長方形	195・245	N-10°-E	桶・台石あり
13	19D7・8	方形	240・230	N-20°-E	かまどあり
14	19E9・10	方形	45・230		西辺の一部を検出

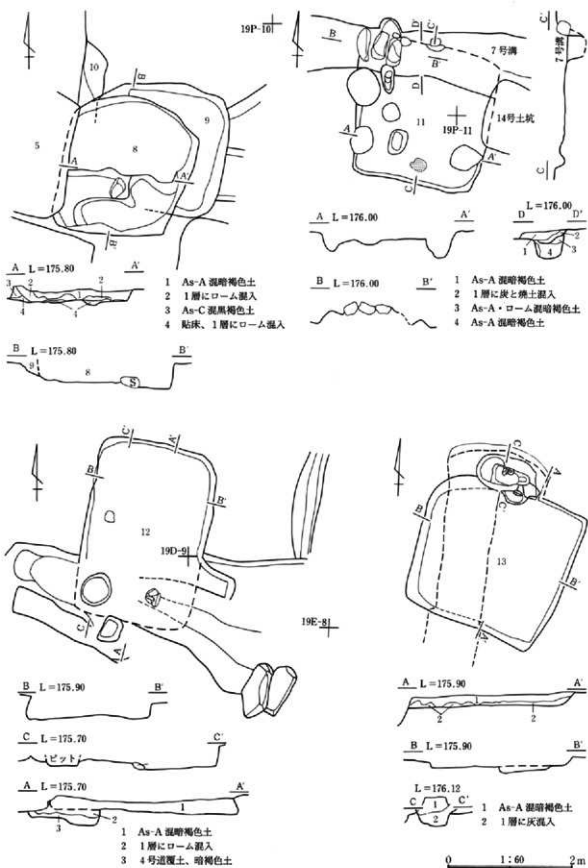
壁の断面が、直立するものと内側にやや袋状になるものがある。後者については、むきだしの土壁ではなく板状の押さえがあったのではないかと推定される。床面までの深さも、時期的なものがあるようだが確定できない。

規模は、方形が2m前後、長方形がこれをやや上回る3～4mである。重複関係では、長方形の2→1から方形の5→4→3へ、同じく長方形の6から方形の7→3、5→4の例から、長方形から方形へと小型化している。内部の造作では、1号、4号で壁際に土留めと推定される幅10cmの小溝がある。4号では、周溝の中に凹凸があり板の差し込み跡であろう。また、根太跡と思われるT字形のものが4号でみられた。2号では、柱穴と推定される4本のビットが、5号では長軸の中央に2本のビットが検出されている。12号では、南西隅に径1尺あまりの桶と思われる掘え穴があり、底面に薄い灰がみられた。湿気抜きであろうか。8号、12号では工作台上に適した人頭大、平坦面をもつ石が中央部付近に据えられていた。かまどをもつのが2軒ある。11号は、北辺の西寄りに長さ30cm前後の厚みがある石3個を並べて、全体で平坦面を作っている。上面や周囲には、煤けた状態で炭や一部に焼土もみられた。床よりも高く、へっついと呼ばれる固定式ではなく、可動式の置きかまどの仕様と考えられる。一方、13号は、北辺西寄りに楕円形の掘り込みがある。内側に貼付した粘土は焼けて、火を焚いた形跡がある。焼け方から小規模ながら、並列2穴式の構造が推定される。

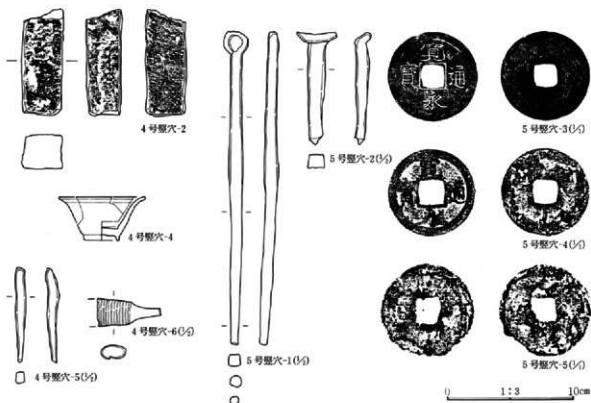
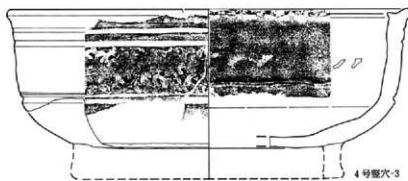
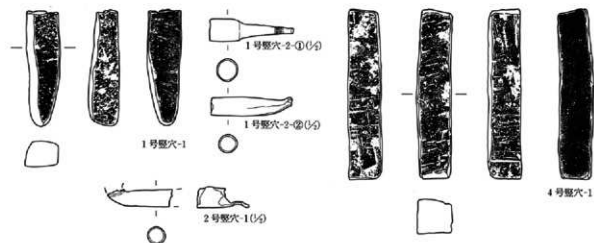
遺物は、共存するものとして明確なものではなく、混入の可能性が高い釘や煙管、内耳土器、火鉢、猪口、鎌、砥石がある。時期は、いずれもAs-A多混暗褐色土で埋まることから、おおよそ天明前後からの江戸時代後期である。



第315図 1~15号竖穴状遺構図



第316図 8～13号竪穴状遺構図



第317图 1・2・4・5号壑穴状出土遺物図

3号、4号、5号、7号溝 (第318・319図 P L49・57・143・148)

いずれも屋敷に伴うものであるが、7号をのぞいて外周の施設である。3号、4号は約1mをおいて平行している。4号道とも平行し、谷地側の境界を兼ねた土留施設と考えられる。ともに、幅50cmである。常滑焼甕、火鉢の破片が出土している。

5号は、4号道と交差するか分岐するもので、現在の筆境に名残りをとどめている。上幅1.60m、深さ30cm、断面は浅い皿状、古墳から抜き出した準大の石で一面に埋まっている。区画の改変により石を廃棄したものであろうか。その中に、のし瓦、こね鉢の破片が混在している。時期は、天明後の江戸時代である。

7号は、屋敷内では最も古く天明以前の屋敷構えの一部、北西隅にある未調査の井戸からの排水溝の一本である。4号掘立柱建物跡は、この溝を埋めた上に盛土を施して地業の柱穴を設けている。埋土には、多量の炭や焼土が混入することから被災に伴う改築で埋められたものと考えられる。

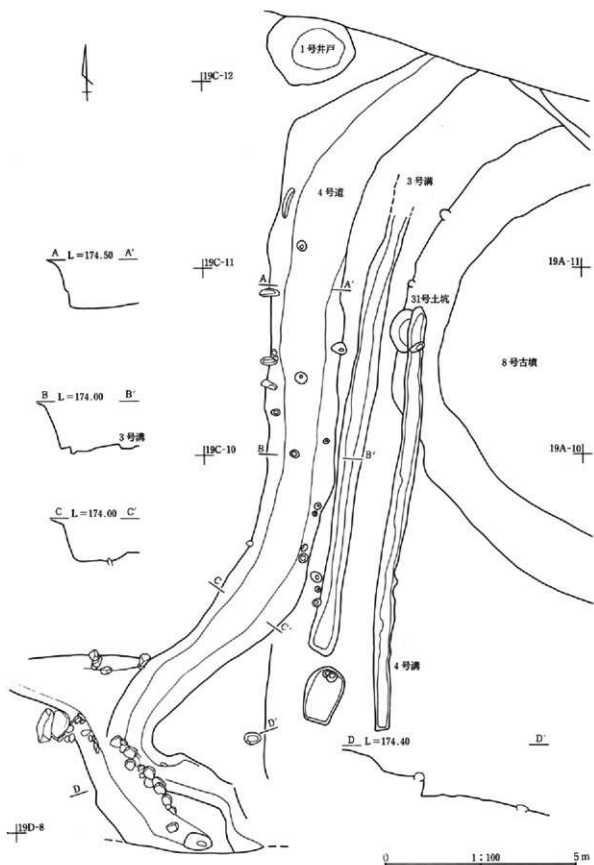
4号道 (第318図 P L49・57・63)

1号屋敷には、北と西の2方向から道がついている。そのオモテのカイドにあたると思われるのが、北からの4号道である。19A～D-7～12グリットにあり、尾根の肩口を削平して回りこむように作られている。北は現道の下面に続き、南は7号古墳の周堀へと続いていたようである。5号古墳の前庭に残る石垣は、その一部である。

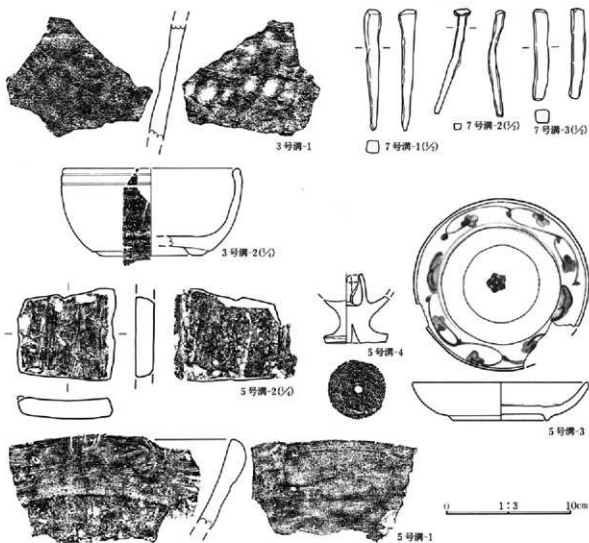
As-Aをはさんで新旧2時期がある。以前のものは、肩口を大きく切り取る形で暗色帯まで掘り下げ、直接路面としている。山側とは1mほどの段差があり、路肩は杭列で養生されている。中にAs-Aで埋設したものがある。一方の谷側は、路肩を馬の背状に掘り残すことで養生している。同じような杭列がある。その外側に平行するのが、3号、4号の溝である。道に併設された土留めの施設で、改築をはさんだそれぞれの道に伴うと考えられる。改築は、天明の噴火を契機とした屋敷全体の縄張りで行われた可能性が高い。As-A混入土で路面を20cmほどかさ上げしている。この中に屋敷を整地して廃棄されたと思われる陶磁器、磁石、煙管、鉄製品などが焼土や炭とともに含まれていた。路面の幅は、新旧いずれも2m前後である。

路面下にある32号土坑は、ローム層中の暗色帯を目的とした探掘坑である。跡跡が複数の列となって、明瞭に残っていた。探掘は、一時的なもので、改築に伴う壁土や床土などを目的としたものであろう。屋敷内の12号整穴状遺構は、道の上面に貼床して作られている。4号道が天明以前にさかのぼることを示す資料である。

9号道は、屋敷の西の入口である。榛名山道と呼ばれる白川から富阿への道から分岐するもので、20区方面にある畠にもつながるものであろう。公図上の筆境にあたるが、調査前には廃道となっていた。ローム層中まで葉研状に掘り込み、尾根の中央部で上幅1m、これも新旧2時期が認められる。掘り方の点で、中世寺院の尾根側を区画した6号・8号溝に類似点があり、同一のものである可能性がある。方向的にも延長線上にあり、19区の墓地を考えると、そこへの通路という解釈もできようか。また、公図では22号古墳の上に白山神社とあり、その境内の南端とも考えられる。



第318图 4号道结构图



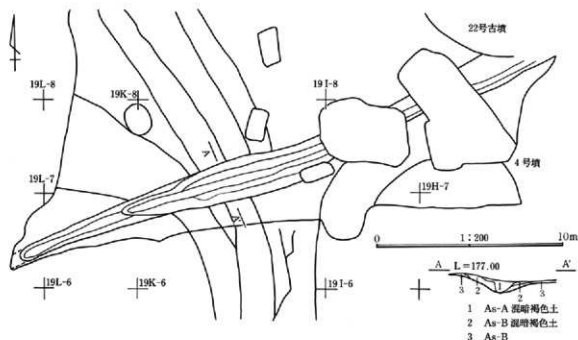
第319図 3・5・7号溝出土遺物図

3 2号屋敷 (第321図 PL49)

17区、町道の西で検出された30号～35号掘立柱建物跡に、8号井戸、11号集石をまとめて2号屋敷として報告をする。尾根を背に南面し、33号を母屋にした建物の配置が復元される。1号屋敷と同じく天明以降の時期で、埋土や棟方向にちがいがみられる。2時期程度の差が感じられる。旧郷村大字和田山、明治年間の公園では、字地藏堂甲163、乙164番地にあたり長野氏の旧屋敷跡が記載されている。

屋敷の西を区画していたのが、11号集石である。前身は土墨状の施設で、中世寺院の区画の一部かその名残りであった可能性がある。筆境だけでなく、地形の段差に痕跡をとどめていた。

165号～175号土坑は、イモ穴と呼ばれる長方形の土坑群である。主軸方位や規模、掘り方で共通点がある。覆土では、黒褐色土と暗褐色土とで分かれる。掘立柱建物跡に対応する、時期差と考えられる。掘立柱建物跡よりは新しい。また、屋敷全体が、21号古墳に重複することから、その削平された時期や状態を知ることができる。



第320図 9号道遺構図

30号～35号掘立柱建物 (第322～324図 P L49)

30号は、17R～T-4・5グリットにある。梁間1間、2.30m、桁間3間、5.25mの東西棟である。主軸方向は、北桁でN-78°-Wである。東半分が21号古墳に重複し、東隣りに34号掘立柱建物跡がある。167～169号土坑よりも古い。埋土は、黒色土である。

31号は、32号、33号と重複し17PQ-5グリットにある。梁間1間、2.70m、桁間2間、4m、東西棟、主軸方向N-85°-Wである。埋土は、As-A 混土である。

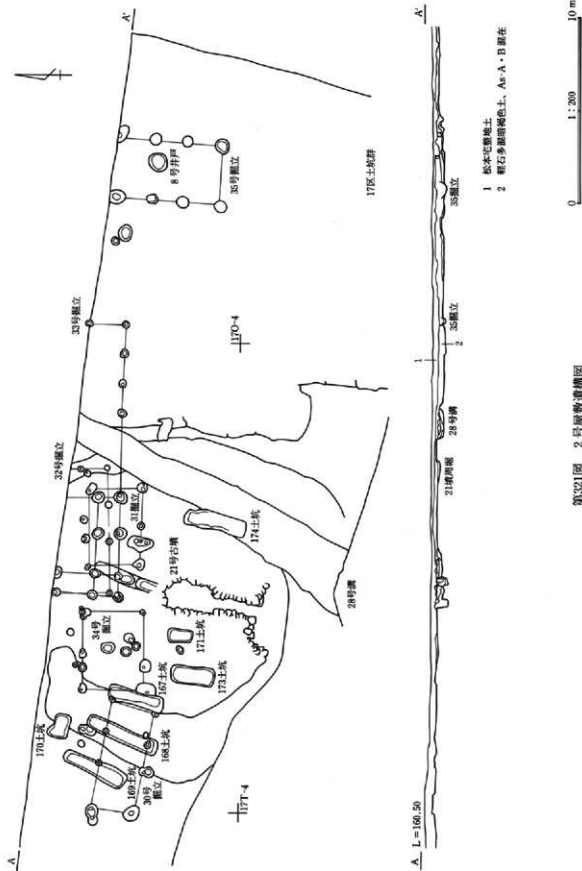
32号は、梁間2間、2.50m、桁間3間、6.50m、北側に広がる可能性がある。東西棟と考えるが33号の床東となることも考えられる。

33号は、17N～Q-5グリットにある。建物の大半は、北側の調査区域外となり、梁間1間半以上、桁間7間半、14、20m、柱間6尺、主軸方向N-85°-Wである。その規模からは、四間取りの母屋と考えられる。オモチザシキの南に3尺のエンがつき、西の並びは1間のトコノマと推定される。柱穴は、30cmをこす方形でAs-A多混濁褐色土を埋土とする。検出した17本のうち3本の底面に礎石がすえられている。

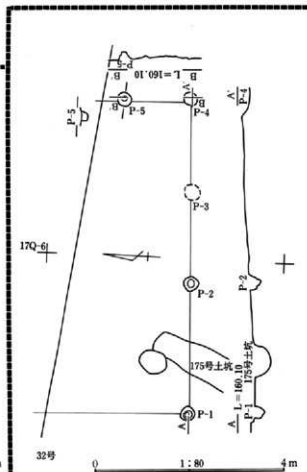
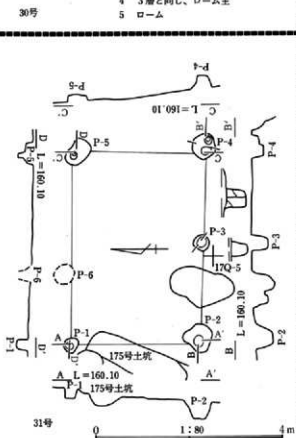
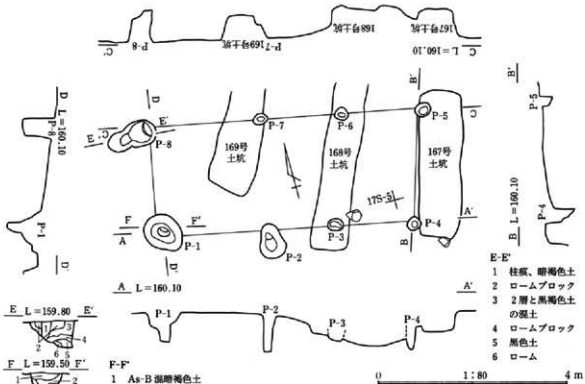
世田谷区立郷土資料館石井栄一氏からは、28号溝を境にして別棟ではないかとの指摘をうけた。その理由として、柱穴の大きさや深さが違うこと、そして柱間が溝をはさんで6尺と5尺で違うことの2点があげられた。しかし、柱筋がそろっていることを第一に、西半分4間相当を床貼り、残る東を土間の1棟として考えておきたい。

34号は、17QR-4～6グリット、梁間1間、3.20m、桁間1間、4.20m、主軸方向N-91°-Wである。

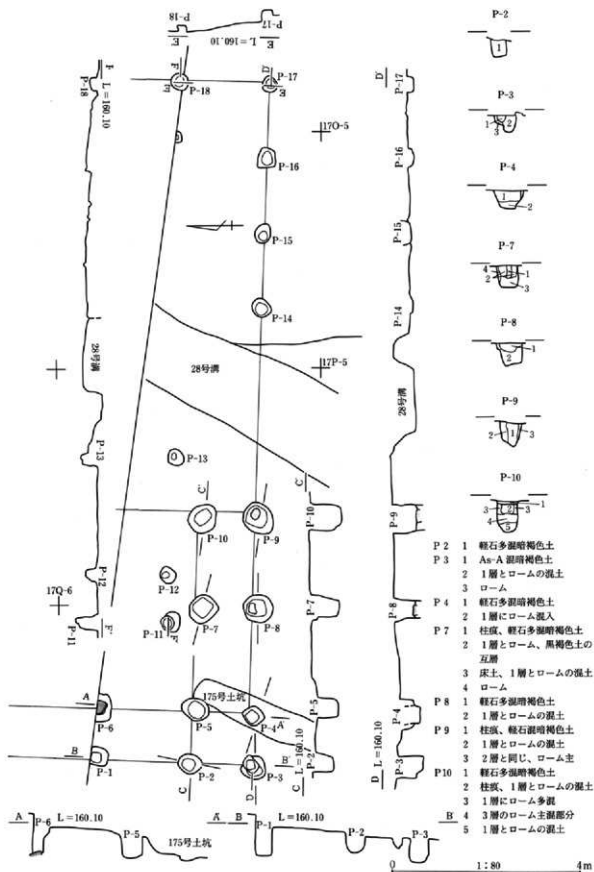
35号は、17MN-4・5グリット、梁間1間、3.25m、桁間3間以上、5.50mの南北棟、主軸方向N-5°-Wである。プラン内に8号井戸があり、母屋に付属する水屋と考えられる。



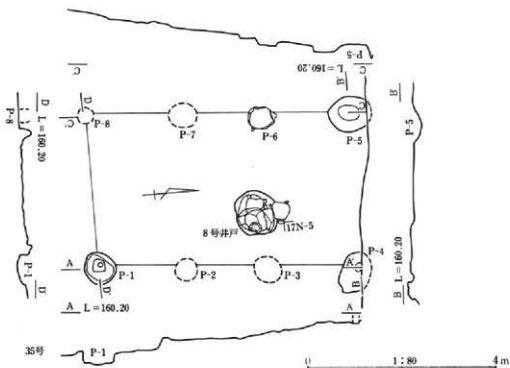
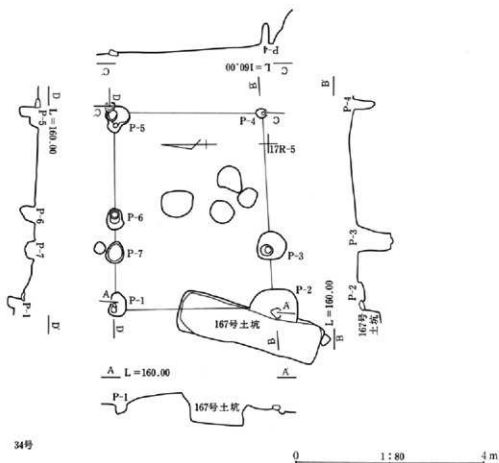
第321図 2号屋敷遺構図



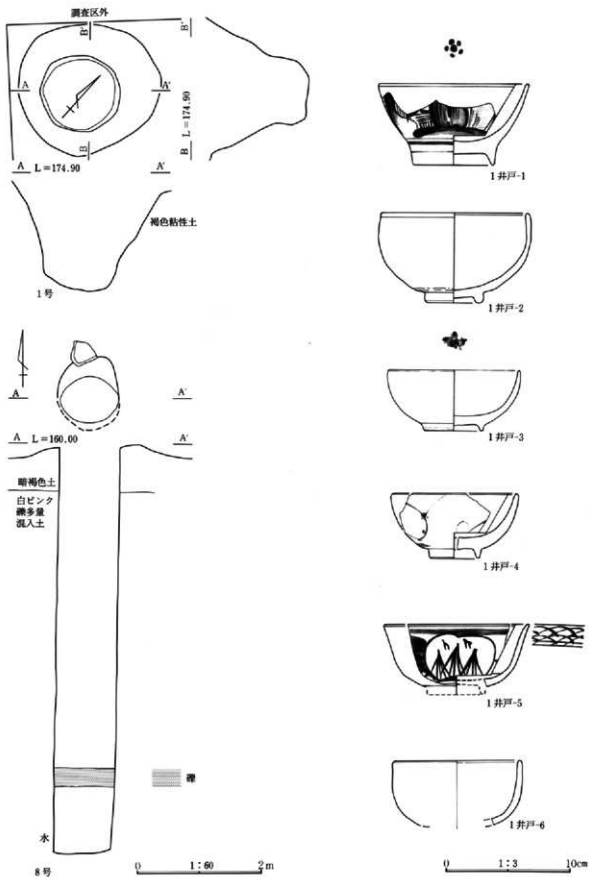
第322図 30・31・32号掘立柱建物遺構図



第323図 33号掘立柱建物遺構図



第324图 34·35号独立柱建筑物遗构图



第325図 1・8号井戸遺構図・遺物図

1号井戸 (第325図 P L 49・55・146)

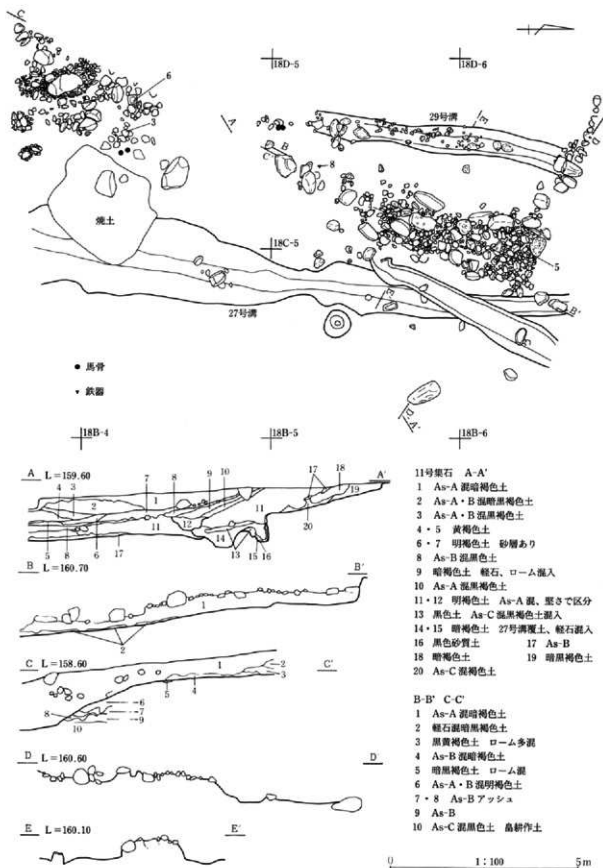
19B-12グリットにあり、1号屋敷に伴う井戸である。上面径2mの円形、断面ルート状で深さ2mである。尾根の胃口を掘削し伏流水を目的としたもので、ローム漸移層、暗色帯下位の上下2箇所湧水がある。下の方が湧水の箇所と量が多い。至近距離にある23号古墳のものと思われる軽石を使って埋められている。屋敷とともに廃棄されたものであろう。埋土には、軒丸瓦、軟質陶器、円筒埴輪の各破片が混入し、底面からは埋める際の息抜きのであろうか、真竹が出土している。屋敷の北西隅には、上面を確認しただけの井戸が3基ある。いずれも7号溝のような排水溝に伴う。屋敷の鬼門をさけるという意味では、場所、数の点で母屋の飲料用に適している。

8号井戸 (第325図 P L 49・56)

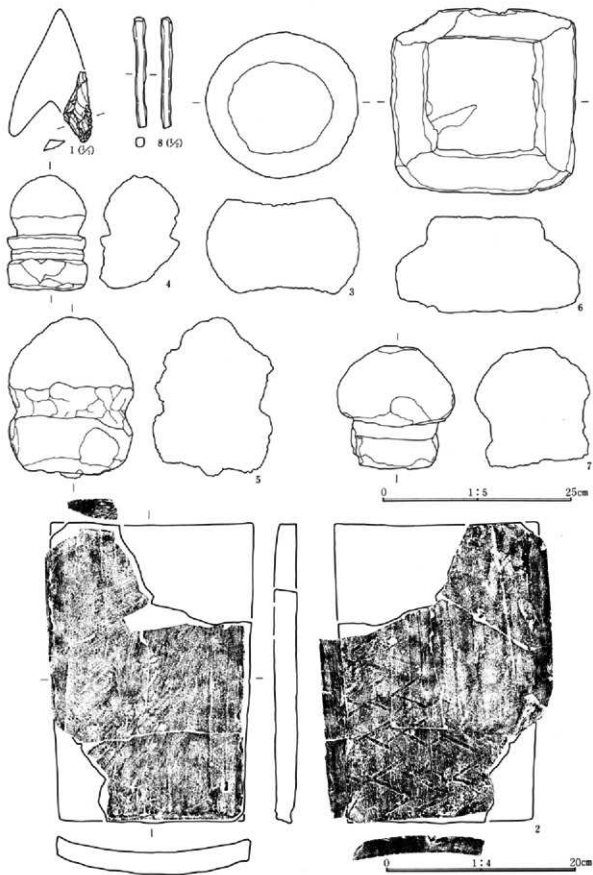
17MN-5グリット、35号掘立柱建物跡のプラン内で検出された。直径1m、深さ6.50mの円筒形の深井戸として分類される。上面から1mほどまでは、石で蓋をするように人為的に埋められていた。屋敷の移転に伴い廃棄されたものであろう。深さの点では、中世の寺や館に伴う井戸と近似している。中世の粘土探掘坑である17区土坑群を切っていること、掘立柱建物プラン内に重複をさせて取まることの2点から、江戸時代、2号屋敷に伴うものと判断した。掘り方が、中世のものに比べて細い。上部の集石以下は、機械掘削をして断面の形状、埋土の状態を観察したにとどまる。

11号集石 (第326・327図 P L 61・144・148)

18BC-2~6グリット、2号屋敷と18区As-A島の境界で検出された土塁と考えられる遺構である。主軸方向はN-30°-E、筆境とも一致し、現況でも段差が残っていた。この線上に、さらに南北に続くものと推定される。屋敷の建物とは方向がずれており、むしろ中世の遺構とした28号溝と平行するようである。中世に作られた区画の中に島が、そして隣接して屋敷が構えられたというのが順序であろうか。島の猪土手が、屋敷の境界を兼ねたものというのが実態であろう。幅は2m前後、残高は50cm、両側を石垣で囲い、中に石を寄せ集めたものである。石のほとんどは、古墳から抜き取られたもので室町時代後半の特徴をもった五輪塔の空風輪、火輪まで含まれている。周辺にあった遺構が、この集石の構築で一掃されたかのようにある。構築面は、中世寺院に関係する17区S Tピット群が埋没してできた斜面にある。中世には、この位置に27号、29号溝を側溝とする道を思わせる複数の硬化面があり、構築にあたっては意識された場所でもある。人骨や馬骨は、石垣あたりで出土しており、境界を利用して埋葬したものであろう。



第326図 11号集石遺構図



第327图 11号集石出土遗物图

4 土 坑 (第328~333図 P.L27~44・101~116)

縄文時代以下、時代別に分けた中で、江戸時代そして時代不明のものを一括した。合計102基。分布では、遺構の多寡と関係し19区から東にほとんどがある。江戸時代に分類されるものには、2号屋敷にある長方形、黒色土で埋没したものとAs-A混褐色土で埋没したものとがある。時代不明としたものは、不整形なものが多く、小型のものは木の根の可能性もある。14号から28号は、1号屋敷の掘立建物の柱穴である。

覆土のAはAs-Aを、BはAs-Bを、CはAs-Cを意味する。

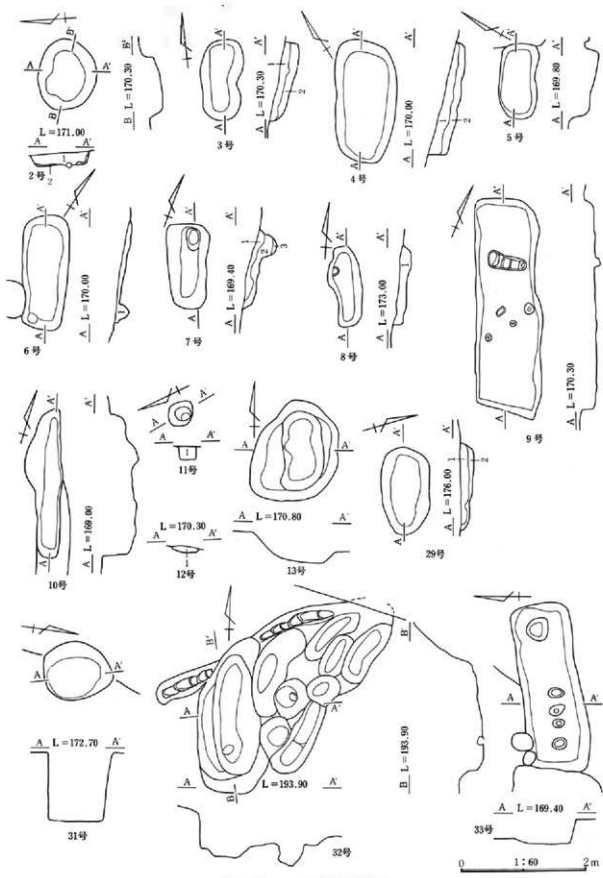
和田山天神前遺跡江戸時代および時代不明土坑一覧表

(単位: cm)

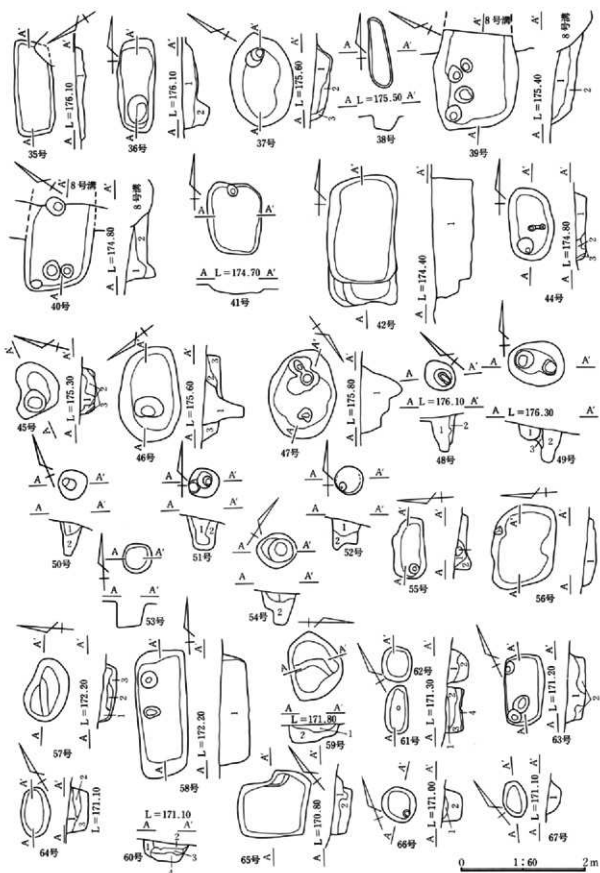
番号	位置	形状	縦・横・深	覆土	時期	備考
2	18R-4	楕円形	110・90・20	B混入	不明	1号建物北西
3	18R-4	楕円形	125・60・26	B混入	不明	1号建物北西
4	18R4・5	長方形	190・95・29	B混入	不明	1号建物北西
5	18R-4	長方形	120・55・27	B混入	不明	1号建物北西
6	18R-4	長方形	180・70・20	B混入	不明	1号建物北西
7	18R4・5	長方形	135・60・34	B混入	不明	1号建物北西
8	18Q-3・4	長方形	126・40・18	B混入	不明	1号建物北西
9	18Q-3・4	長方形	335・97・29	B混入	不明	1号建物北西
10	18Q-4・5	長方形	255・45・49	B混入	不明	1号建物北西
11	18R-4	円形	45・38・20	B混入	不明	1号建物北西
12			・10	B混入	不明	断面のみで確認
13	18Q-3・4	楕円形	160・135・32	B混入	不明	
29	19E-8	長方形	140・75・20	A混入	江戸	
30	19A-9	円形			江戸	4号溝より古い
31	19AB-10	円形	105・95・109		江戸	4号溝より古い 椀皿
32	19AB-11	長方形	240・105・66		江戸	4号溝より古い 粘土探掘坑
33	18G-16	長方形	265・90・35		江戸	貯蔵穴
34	18I-2	長方形	・80・32	A混入	江戸	1号古墳の断面で確認
35	18E-5	長方形	150・62・15	A混入	江戸	
36	18E-5	長方形	145・58・42	暗褐色土	不明	
37	19CD-5・6	楕円形	145・105・25	B混入	不明	
38	19C-5・6	長方形	110・32・22		不明	
39	19C-5	方形	140・130・33	B混入	中世か	8溝より古い
40	19B-4	方形	155・105・45	B混入	中世か	8溝より古い
41	19BC-3	方形	110・85・14	黒色土	不明	8溝に隣接
42	19B-2・3	方形	115・70・62		江戸	貯蔵穴内に階段入口
43	19BC-3				不明	
44	19C-3	長方形	200・105・19	黒色土	不明	
45	19C-4	楕円形	82・48・23	黒色土	不明	

番号	位 置	形 状	縦・横・深	覆 土	時 期	備 考
46	19D-4	楕円形	150・100・64	黒色土	不明	ビットあり
47	18DE-4・5	楕円形	140・110・65	黒色土	不明	
48	18E-5	楕円形	50・44・55	黒褐色土	不明	
49	18E-5	楕円形	90・70・51	黒褐色土	不明	
50	18F-4	円形	45・45・54	黒褐色土	不明	縄文土器
51	18F-5	円形	47・45・50	黒褐色土	不明	
52	18F-5	円形	52・48・49	黒褐色土	不明	
53	19C-5	円形	45・46・42		不明	
54	19B-4	円形	61・54・51	B混入	不明	
55	19S-2	方形	95・50・25		不明	
56	19S-2	方形	115・98・18	A・B混入	不明	
57	19S-2	方形	100・60・22	B混入	不明	
58	19S-2	長方形	198・78・47		江戸	
59	19R-1	不整形	105・87・28	B混入	不明	
60	18Q-2	方形	55・47・30		不明	
61	18Q-1・2	円形	77・37・29	B混入	不明	
62	18Q-2	円形	55・47・30	C混入	不明	
63	18Q-2	長方形	110・60・28	B混入	不明	
64	18Q-1・2	長円形	76・48・33	B混入	不明	
65	18Q-1・2	方形	105・95・25	C混入	不明	
66	18Q-1・2	円形	56・52・29	B混入	不明	
67	18Q-1	円形	55・38・19	B混入	不明	
68	18Q-1・2	円形	37・32・28	B混入	不明	
69	18Q-2	円形	33・31・29	B混入	不明	
70	18P-2	円形	53・46・44	B混入	不明	
71	18P-1	円形	53・51・20	B混入	不明	
72	18P-1	円形	68・58・26	C混入	不明	
73	18P-1	円形	31・27・20	B混入	不明	
74	8P-20	円形	42・40・30	A・B混入	不明	
75	8O-20	円形	50・40・27	A・B混入	不明	
76	8LM-19・20	円形	160・155・74	黒褐色土	中世か	1号建物前
77	8L20・18L1	長方形	165・62・10	A混入	江戸	1号建物前
78	8K20・18K1	長方形	75・75・20	A混入	江戸	1号建物前
79	18K-1	長方形	103・75・22	A混入	江戸	1号建物前
80	18K-11	長方形	90・120・23	A混入	江戸	1号建物前
81	18KI-2・3	長方形	145・155・33		中世か	1号建物前
82	18T-2	円形	58・50・17	C混入	不明	
83	18S-1・2	円形	38・32・33	暗褐色土	不明	

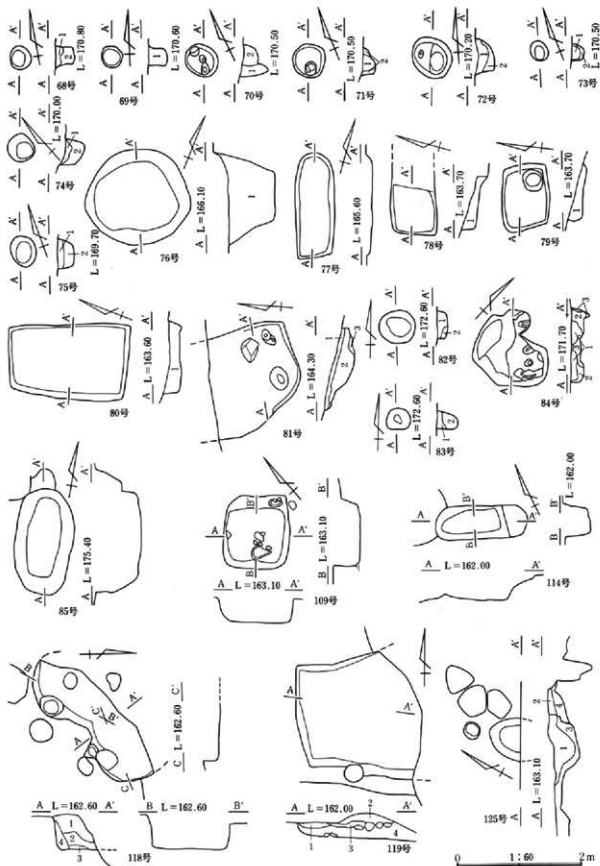
番号	位置	形状	縦・横・深	覆土	時期	備考
84	18RS-2	不整形	122・85・29	黒褐色土	不明	
85	19D-6	長方形	115・70・72	暗褐色土	縄文か	
106				B混入	不明	断面のみで確認
109	16N-1	方形	115・105・41		中世か	
114	6CD-19	長方形	145・53・40		不明	縄文土器 埴輪
116					不明	
117	6I-19	不整形	128・85・54		不明	縄文土器
118	6I-19	不整形	122・77・54	B混入	不明	
119	6C-19・20	方形か	198・190・40	暗褐色土	不明	縄文土器 埴輪
125	16K-1	楕円形か	68・48・67		縄文か	縄文土器
138	6M-20	楕円形	115・80・29	黒褐色土	縄文か	縄文土器
142	6	長方形	・ ・ 35		斜面堆積か	縄文土器 凹石
146	16O-3・4	長方形	150・83・41	黄褐色土	縄文か	黒曜石
160	17C-3	長方形	112・80・38	A・B混入	中世か	菅原神社下層
161	17C-3	長方形	145・65・15	A・B混入	中世か	菅原神社下層
163	17C-4	方形	155・90・31	暗褐色土		19号古墳周堀の掘り方か
166	17				江戸	2号屋敷内
167	17R-4・5	長方形	305・88・50	暗褐色土	江戸	2号屋敷内
168	17S-4・5	長方形	387・75・39	A混入	江戸	2号屋敷内
169	17S-5	長方形	345・65・48	暗褐色土	江戸	2号屋敷内
170	17RS-5	長方形	120・80・26	黒褐色土	江戸	2号屋敷内
171	17R-4	長方形	122・53・29	黒褐色土	江戸	2号屋敷内
172	17S-5	円形	96・45・49	黒褐色土	江戸	2号屋敷内 168号と重複
173	17R-4	長方形	222・90・32	黒褐色土	江戸	2号屋敷内
174	17P-4	長方形	270・90・50	黒褐色土	江戸	2号屋敷内 28号溝に重複
175	17Q-4・5	長方形	215・60・68	黒褐色土	江戸	



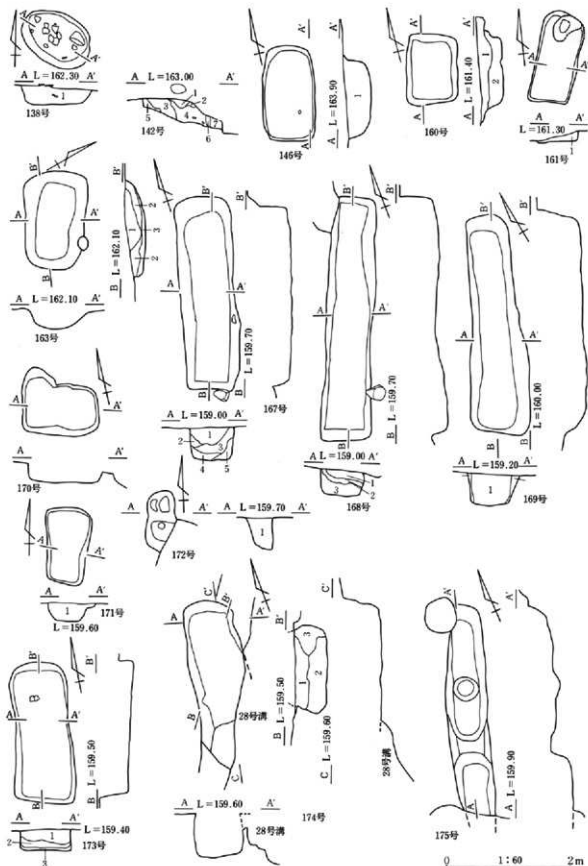
第328图 2~33号土坑道横图



第329图 35~67号土坑遺構図

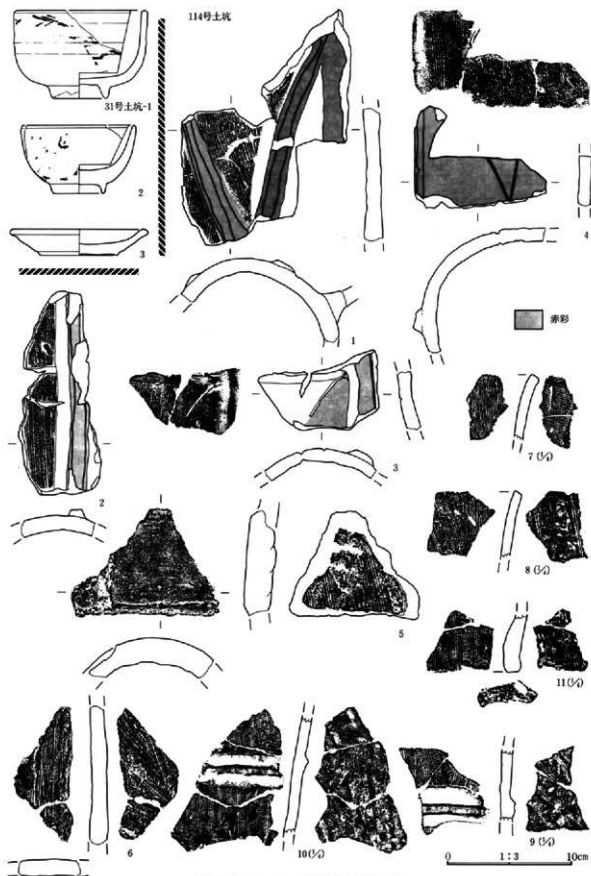


第330图 68~125号土坑遺構図



第331図 138~175号土坑遺構図

2号土坑	1 As-B 混黒褐色土	62号土坑	1 As-C 混黒褐色土
	2 ローム		2 ローム漸移層
3・4号土坑	1 As-B 混黒褐色土	63号土坑	1 As-B 混黒褐色土
	2 As-C 混黒褐色土		2 ローム漸移層
6・7・8号土坑	1 As-B 混黒褐色土	64号土坑	1 As-B 混黒褐色土
	2 As-C 混黒褐色土		2 As-C 混黒褐色土
	3 As-C 混暗褐色土		3 ローム漸移層
11号土坑	1 As-B 混黒褐色土	65号土坑	1 As-C 混黒褐色土
12号土坑	1 As-B・ローム混黒褐色土		2 ローム漸移層
29号土坑	1 As-A 混暗褐色土	66号土坑	1 As-B 混黒褐色土
	2 1層にローム混入		2 As-C 混黒褐色土
35号土坑	1 軽石多混暗褐色土	67号土坑	1 As-B 混黒褐色土
36号土坑	1 暗褐色土	68~75号土坑	1 As-B 混暗褐色土
	2 茶褐色土		2 ローム混暗褐色土
37・39号土坑	1 As-B 混暗褐色土		3 暗褐色土
	2 ローム混暗褐色土	75号土坑	1 As-B 混黒褐色土
	3 暗褐色土		2 As-C 混黒褐色土
40号土坑	1 As-B 混暗褐色土	76号土坑	1 黒褐色土
	2 黄褐色土	78・79号土坑	1 As-A 混暗褐色土
42号土坑	1 ローム多混暗褐色土	80号土坑	1 As-A 混暗褐色土
44~47号土坑	1 黒色土	81号土坑	1 As-A 混暗褐色土
	2 1層と3層の混土		2 軽石混黒褐色土
	3 黄褐色土	82~84号土坑	1 軽石混黒褐色土
48号土坑	1 黒褐色土		2 1層とロームの混土
	2 茶褐色土		3 ローム
49号土坑	1・2 黒褐色土	118号土坑	1 As-B 混暗褐色土 2 暗褐色土
	3 茶褐色土		3 明褐色土
50号土坑	1 黒褐色土	119号土坑	1~3 赤土 4 暗褐色土
	2 1層とロームの混土	125号土坑	1・3 黒褐色土
51号土坑	1 黒褐色土		2 暗褐色土 4 ローム
	2 茶褐色土	138号土坑	1 黒褐色土 炭混
52号土坑	1 黒褐色土	142号土坑	1~4 暗褐色土 炭混
	2 黄褐色土		5・7 褐色土
54・55号土坑	1 As-B 混暗褐色土		6 暗褐色土 ローム混
	2 1層とロームの混土	146号土坑	1 黄褐色土
56号土坑	1 軽石多混暗褐色土	160号土坑	1・2 As-A・B 混暗褐色土
57号土坑	1 As-B 混暗褐色土	161号土坑	1 As-A・B 混暗褐色土
	2 3層のうちB多混層	163号土坑	1~3 ローム混暗褐色土
	3 1層とロームの混土	167~169号土坑	1~3 暗褐色土、ローム、黒褐色土の混土
58号土坑	1 As-B 混暗褐色土		4・5 暗黒褐色土、ローム、黒色土混入
59号土坑	1 As-B 混暗褐色土	171号土坑	1 As-A 混暗褐色土
	2 1層とロームの混土	172号土坑	1 As-A 混黒褐色土
60号土坑	1 軽石多混暗褐色土	173号土坑	1 As-A 混暗褐色土
	2 As-B 混暗褐色土		2 黒褐色土
	3 As-B 混黒褐色土		3 As-C 混黒褐色土
	4 暗褐色土	174号土坑	1 暗褐色土と黒褐色土の混土
61号土坑	1 As-B 混黒褐色土		2 1層とロームの塊状混土
	2 As-C 混黒褐色土		3 軽石多混暗褐色土



第332図 31・114号土坑出土遺物図(1)

5 溝

25号溝 (第338図 P L58)

16N0-2〜4グリットで南北に検出され、斎齋壇とよばれている一角の西の筆境にあたる。上幅80cm、深さ50cm、As-Aと思われる軽石混入暗褐色土で自然埋没している。確認長12m、地形勾配に沿ってさらに南北につながり、東には16区 As-A 畠が続いている。26号溝とは直交の関係にあり、区画の基幹となる遺構のひとつである。

26号溝 (第335図 P L58)

17E〜H-5・6グリット、菅原神社境内の下層、鳥居石垣の北側で検出された。東西にのび、確認長15m、両端は調査区域外となっている。25号溝と同様な掘り方を持ち、上幅90cm、深さ50cm、As-A 混入暗褐色土で埋没している。公園にはなく、菅原神社が8号道を出入り口としていた以前の区画である。境内の中では、神社に関係した最古の遺構である。

9号溝 (第68図)

18H-14グリット、1号古墳石室の左壁沿いに南北4mほどが検出された。左にまがり現在段差となる筆境の下に続いている。

10号溝 (第110図 P L57)

19C〜E-3・4グリット、4号古墳の前庭から6号古墳の北側をめぐり、さらに南に続いている。確認長16m、上幅40cm、深さ30cm、底面には幅10cmの半円形鋤跡が連続したままで、水の流れた形跡はない。畠を区画する石垣の根切り溝と考えられる。筆境でもある。As-A 混黒褐色土で埋没している。

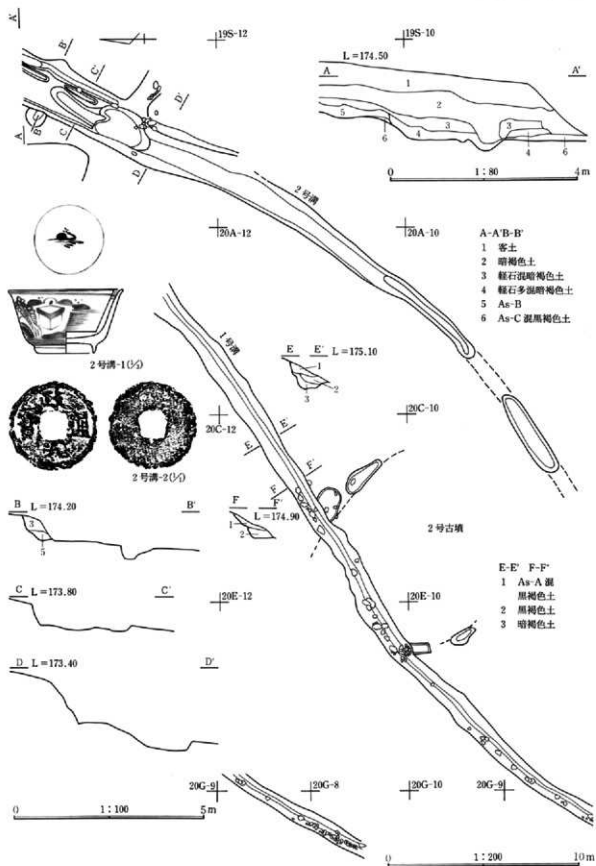
6 集 石 (第335・336図 P L60・61・148)

菅原神社境内の下層には、西の寺院と東の館の中間にあって中世面の削平段と16号〜18号墓がある。現況では、この上に盛土をして南面する拝殿ならびに本殿、鳥居、さらに尾根下までの石段が南北に配置されている。昭和42年の台風で倒壊するまでは、鳥居前の西に東面して馬頭観音堂があった。ここで報告する遺構は、盛土の上面で検出されたものである。

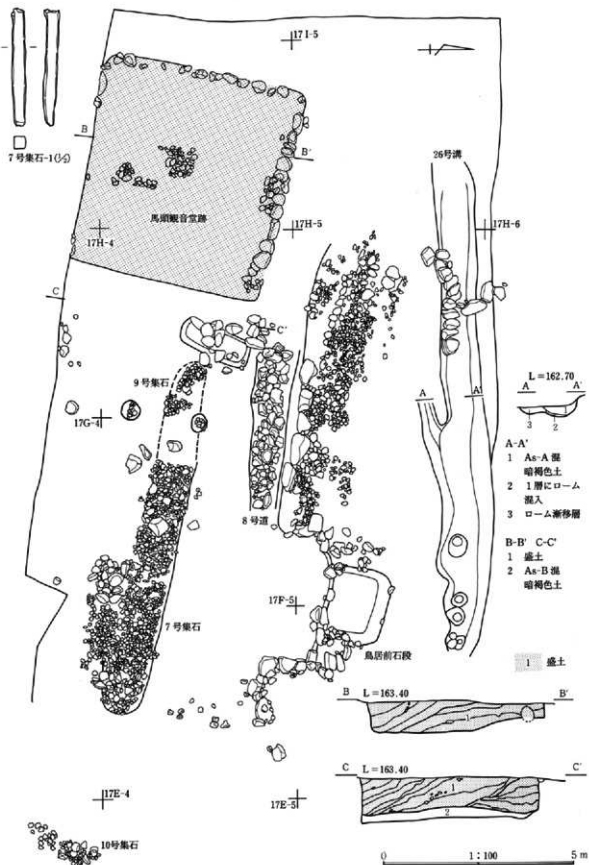
7号集石は、鳥居前を東西の帯状に小石を敷き詰めたものである。長さ8.4m、幅1m弱の溝状の掘り方の中に厚さ40cmにわたって石が詰められた、という状態である。鳥居の正面には、南にT字にのびることが確認されている。馬頭観音堂の北辺線上にもあたる。同じく8号道や26号溝と関連して、現在の神社に至るまでの様子を知ることができる。その好例が鳥居の石段である。3つの時期に分けられ、地山を削り出したものから「コ」の字形に石垣をめぐらして現在に至っている。

8号は、浅い長方形の掘り方の中に拳大から卵大までの石を詰めた土坑3基からなる。北西方向に主軸を取り、3基が並列し、中央のものが最大で長さ1.50m、幅60cmで石の厚さも10cm以上ある。両側の2基は、薄く敷き並べたという状態である。規格性をもつという点で建物などの地業の可能性もある。

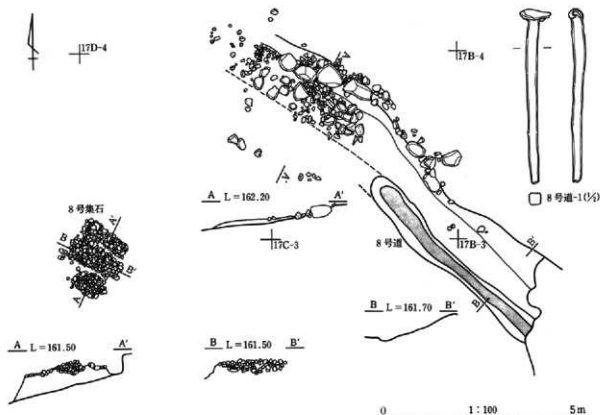
9号は、北西方向で縦列する2基がある。主軸方向や規模ともに8号に近似する。



第334图 1・2号溝遺構図



第335図 17区菅原神社前集石遺構図



第336図 8号道・8号集石遺構図

10号は、北東に主軸方向をとり7号と直交する。長さ2m、帯状に石を敷き並べている。境内の外周を画する施設の基礎にあたるものであろうか。

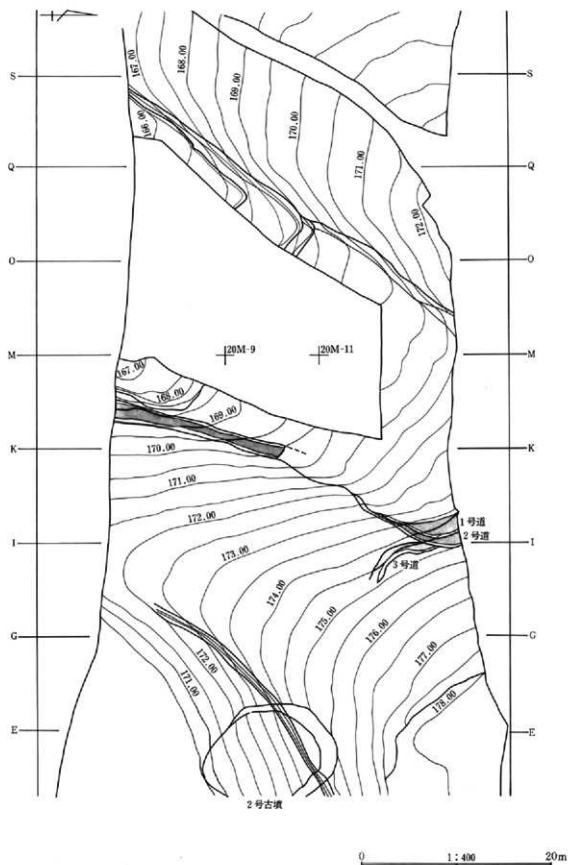
7 道

1～3号道 (第337図 P L 63)

20H I-11～13グリット、西第1尾根の西肩口にある。町道の下層で検出され、江戸時代天明前後から踏襲されてきた道であることがわかる。同じ尾根の東にある1号・2号溝とは同時期である。2号と3号が天明以前で、As-Aが山側にかき寄せられていた。路面の幅約1m、地山を削りこんで路面としている。1号は、ほぼ同規模で噴火後の復旧でわずかにずらして作られたものである。谷地の隙をめぐり、谷地一杯にある畠を区画している。畠は、棚田状の4区画が検出されている。各区画で30cmほどの段差があり、最大で東西26m、南北8mである。時期は、中世にさかのぼる可能性もある。

8号道 (第336図 P L 63・151)

17A-G-3～5グリット、菅原神社前を館の南端、16号古墳から18号古墳との間で検出された。確認長40m、神社や2号屋敷への道と考えられる。館の南端から16号古墳の箇所では、石室から引き抜いた石で山側に土留めの石垣をつくり、路肩を養生している。路面は、地山を暗色帯付近まで削り出している。幅1m前後、全体に硬化した状態が見られる。As-Aの堆積後、南にずらして復旧されている。南端の際で出土した



第337図 1～3号道遺構図

陶磁器類は、これに伴うものである。18号古墳のあたりでは、溝状に掘り込んだ中に石を詰め込んだものが検出された。16号古墳の位置からみた方向や規模から、同一の道と判断した。

8 畠

16区畠 (第338図)

16MN-2・3グリット、尾根上にあるAs-A混土で埋没した畠である。現地表下60cmにある。25号溝を西の境とし、東に7mほどで区画される南北に細長い区画が推定される。畠は東西方向の鋤跡があり、畠間50cm前後である。耕作土はAs-A混入暗褐色土である。断面は、25号溝にかかるもので当時の地表面を知ることができる。1層は、As-Aを多く含む暗褐色土、2層はAs-Aをわずかに含む暗褐色土である。

18区畠 (第338図)

18F-K-1~4グリット、谷地にあるAs-A混土で埋没した畠である。一部ではかき寄せた鈍原に近い状態もみられ、降下後しばらくの間休耕か、廃棄されたものと思われる。現況の公園とも一致する、東西30m、南北20mの範囲に広がり、北限は18区7ライン付近を東西に抜ける道跡である。東西と南北2方向の畠がある。新旧の判別はわずかしく、わずかな時差と思われる。鋤跡は幅15cm、東西方向のものでは西と東の双方から働き返している。畠の幅は東西が70~80cm、ほぼ一定している。南北が40~80cmである。

1号溝 (第334図 P L57)

20A-G-7~12グリット、西第1尾根の東斜面の肩口を弧状にめぐり、一部に人頭大の石垣が残ることから、石垣の根切り溝と考えられる。山側が70の急勾配、谷地側に犬走り様に開口していた可能性もある。埋土は3層あり、上2層はAs-A混入暗褐色土、色調差で区分した。2層上面にAs-Aのブロックがある。底面を覆うのが、As-A混入黒褐色土とロームの混土である。この土層のちがいがから、新旧2時期、あるいは石垣の地業と埋没土に分けて考えることもできる。いずれにしても、天明前後、江戸時代の畠を区画したものである。

2号溝 (第334図 P L57、143、148)

19S T-10~14、20A-C-8~10グリットにまたがる。谷地の東側をめぐり、現在の筆境にあたる。As-B混土下で検出され、全長33m、さらに南北に続いている。側溝をもった道跡である可能性が大きい。南半分は、西の溝を残して削平されている。道とすれば、路幅が1.5mほどの上り勾配である。検出された北端で平安時代の1号土坑に重複している。

第8章 参考文献

江戸時代の極楽院の動向を示す資料に群馬県史料編9 近世1 西毛地域1に修験の項として

468 天和2年10月 群馬郡和田山村修験極楽院由緒未印高書上

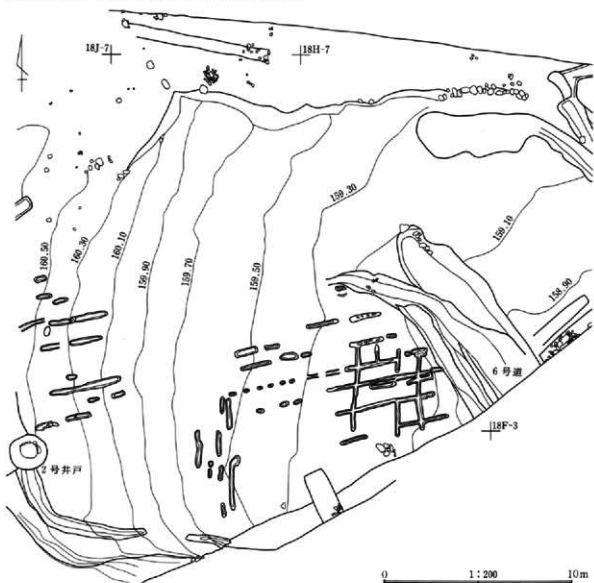
469 貞享4年7月 群馬郡和田山村修験極楽院実業免許状

471 貞享4年7月 群馬郡和田山村修験極楽院由法系

が収められている。

群馬県文化事業振興会 「上野国郡村誌」5 群馬郡(2) 1980

箕郷町誌編さん委員会 「箕郷町誌」1975



第338図 16区A畠・18区A畠遺構図

第9章 遺構外の遺物

本遺跡では、土器類、石器類を合わせて4万点ほどの出土遺物がある。

このうち、総数2417点の遺物を掲載した。そのほとんどは、遺構に直接帰属し、その性格を語る上で欠くことができないものか、埋没時の状況や周辺環境を知るための間接的なものである。遺物の年代観と遺構の時期にずれがある例は、このためである。出土時の状況を、できるだけありのまま掲載するという意図でもある。本遺跡では、古墳時代と中世の遺構が地形をまるごと覆うようにして検出された。遺構は、個々に独立したものは少なく大半は相互に関連したり、当時の生活面を構成する一部となっている。切土や盛土が盛んに行われているため、特に縄文時代の遺構が消失している。それは、遺物の組成にも大きく反映されている。16区の古墳は、出土資料のほとんどが周堀中の縄文土器といった例もある。

ここに遺構外として掲載するのは、遺構の検出されなかった時代や調査区域外の様相を知るためでもある。

縄文時代では、早期撫糸文土器が16区でまとまって出土している。中世に削平された中か調査区域外の北西方向に遺構の存在をうかがわせる。同じく、前期後半の十三菩提式や後期についても暗示される。以上のように16区では、早期から後期までほぼ断続的に集落の形成されたことが推測される。西の台地にある白川傘松遺跡とあわせて、この地域での遺跡動態がえがけそうである。

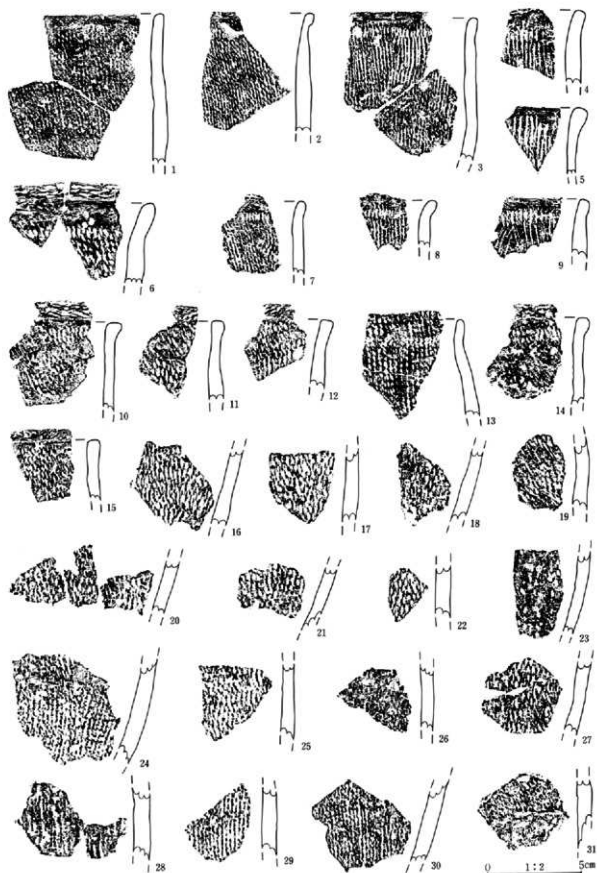
弥生時代では、19区の3号古墳周堀底面で埴式土器が出土している。周囲でもわずかばかりの遺物がみられ、北陸新幹線地域の中にあつては稀少の例のひとつに加えられる。遺構外とした中でも、最も少ない時代資料である。

古墳時代では、遺構では前期から中期が半ば空白となっている。14号古墳の墳丘下では、当初12号住居と命名した黒色土中で石田川式土器が出土している。1号方形周溝墓と同様な遺構と、南の低地に集落の存在を推測させる資料である。18区谷地での後期集落との関連、先駆形態として注目される。

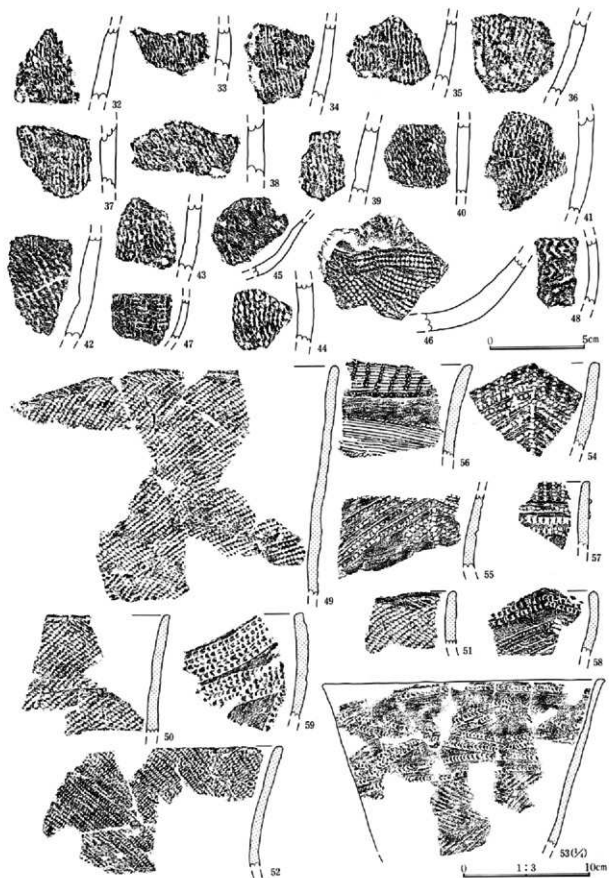
古墳の項では、詳しく触れなかったが前庭部から8世紀から9世紀にかけての土器が出土している。これまでも県内各地の古墳で知られていた資料ではあるが、墓域としての利用がここでも継続したのであろうか。古墳築造が停止された後の景観を考えさせる。

常滑焼の埴類や白磁、青磁は、寺やその後極楽院へと変遷していく過程を補強する資料である。遺構に特定されるものが少なく、散在した分布傾向がある。その影には、土地利用の変遷の激しさが示されているのであろう。遺構外としたが、整地土への混入や埋納といった解釈も可能であり、出土状態の記録の必要性を痛感する。白磁がもつ12世紀代という年代観は、遺構としては空白の時期である。その帰属の解釈で、今後とも検証を必要とする資料である。

近世では、2箇所屋根の年代観に沿う17世紀後半以降のものである。日常の雑器にまじり、煙管や砥石などが多いように見受けられる。屋根の周辺で多いのは当然として、20区で極端に少ないのは、住居と畠という土地利用のあり方を直接に反映したものである。現在につながる集落の原型が、江戸時代後期頃にはじまることが遺物の分布の上からもわかる。



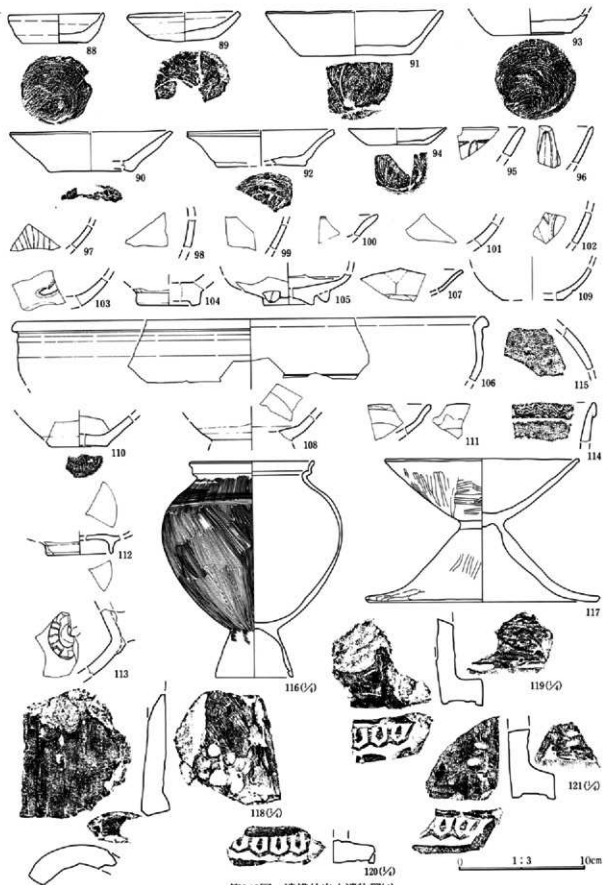
第339図 遺構外出土遺物(1)



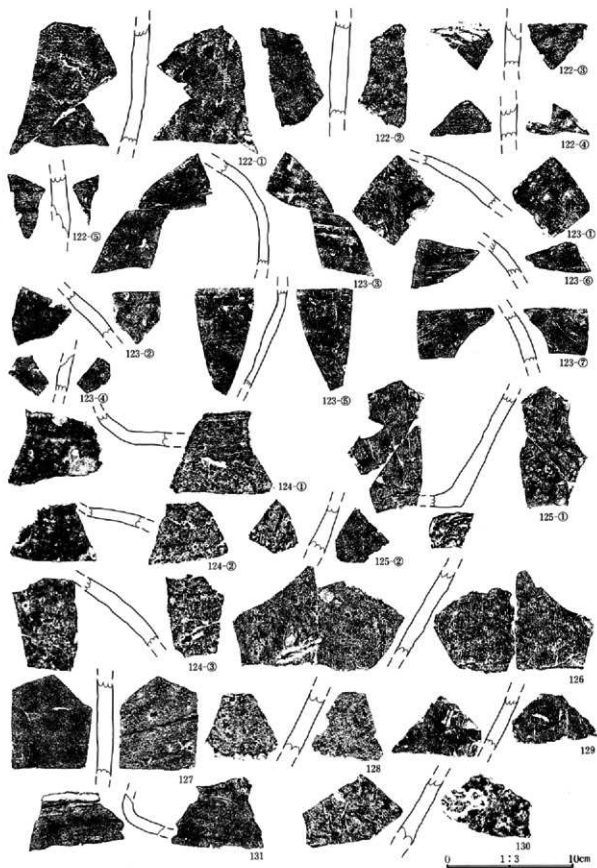
第340図 遺構外出土遺物図(2)



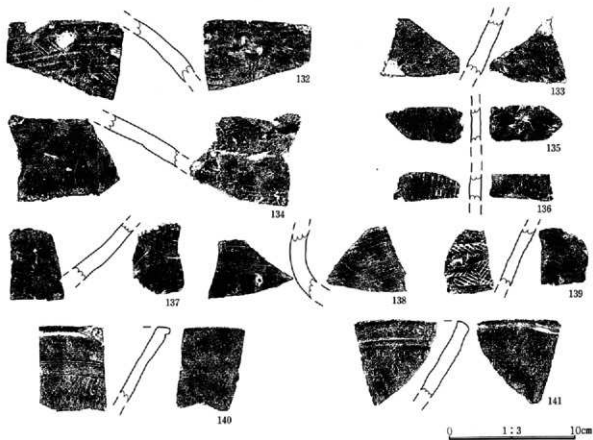
第341図 遺構外出土遺物図(3)



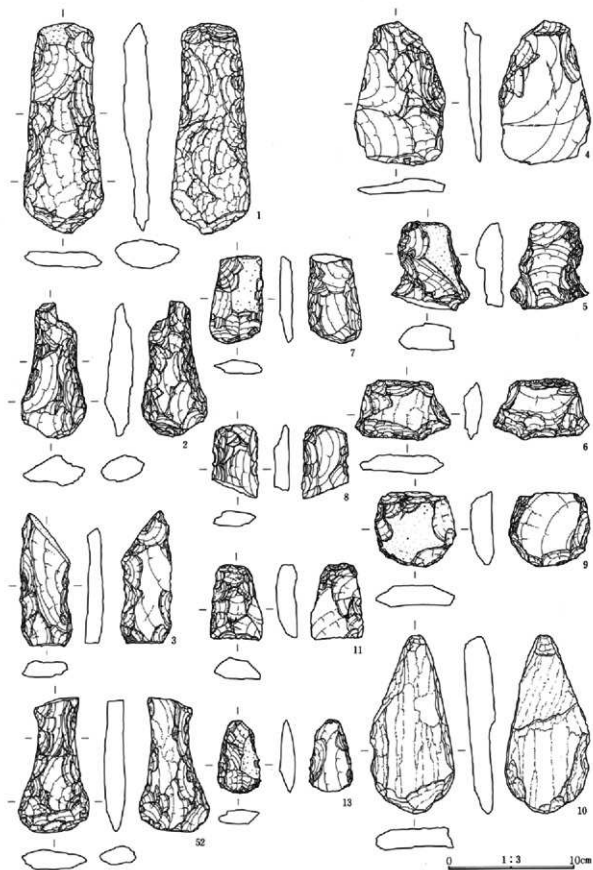
第342図 遺構外出土遺物図(4)



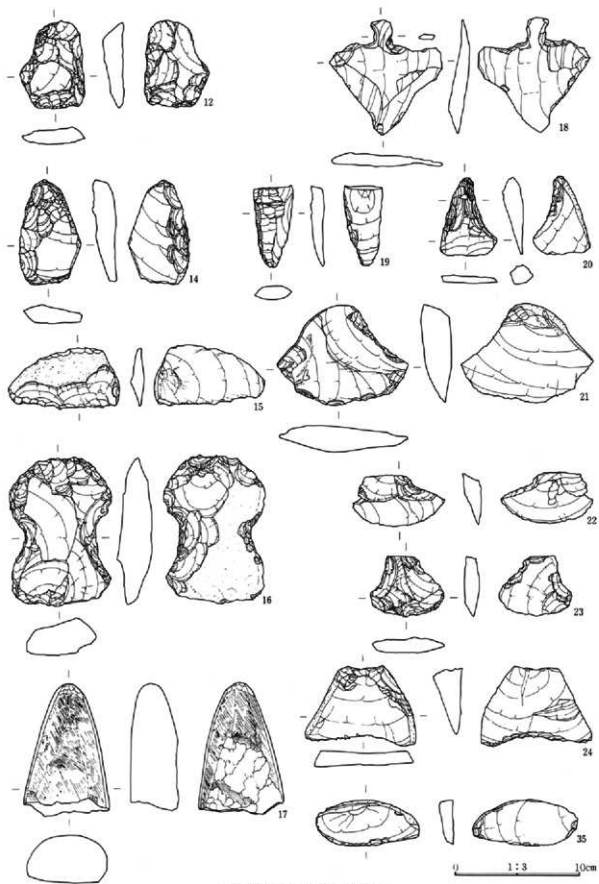
第343図 遺構外出土遺物図(5)



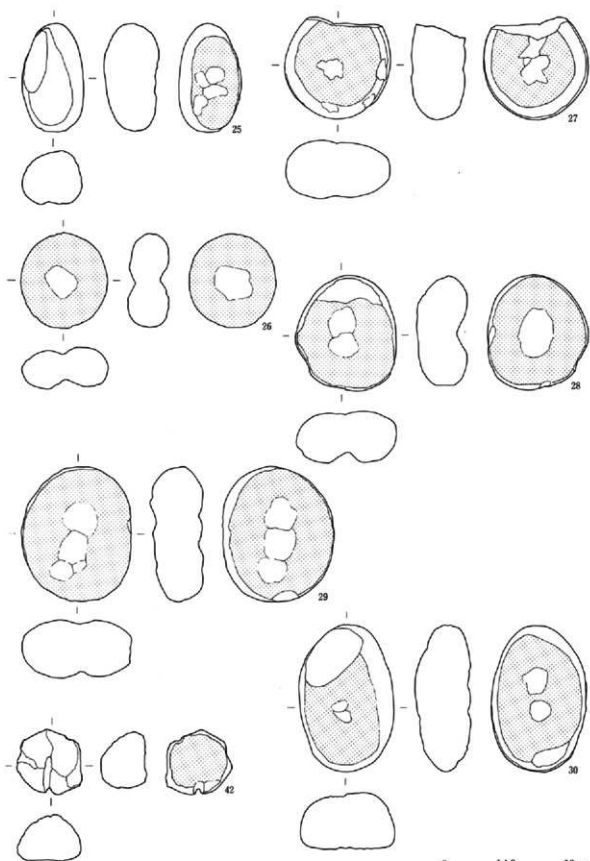
第344図 遺構外出土遺物(6)



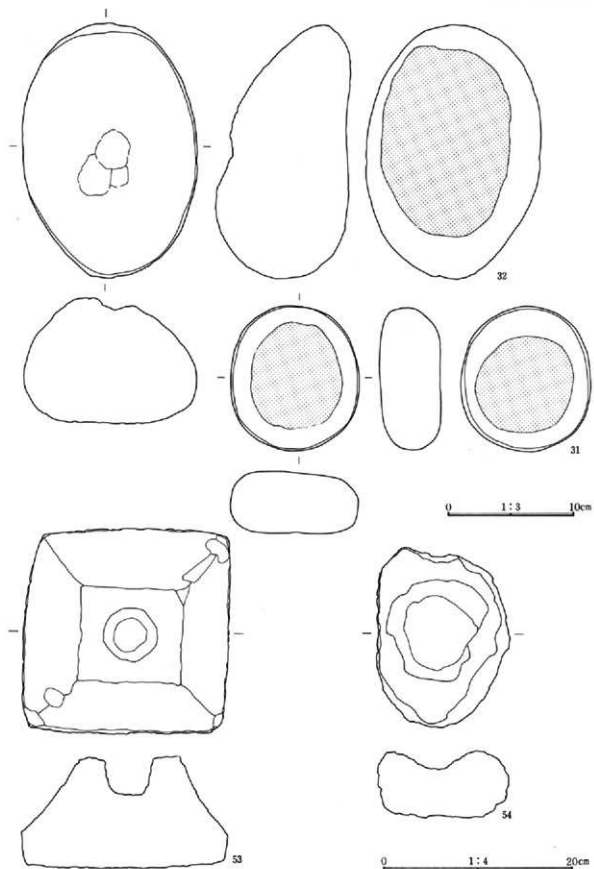
第345図 遺構外出土遺物図(7)



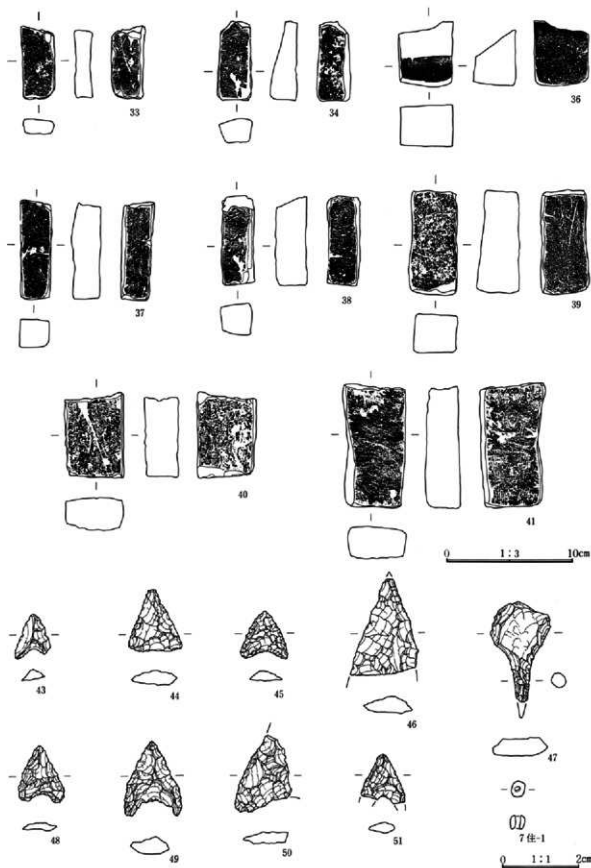
第346図 遺構外出土遺物図(8)



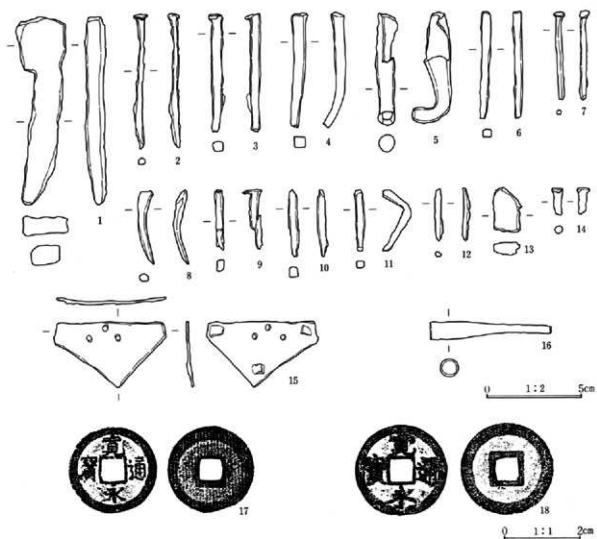
第347図 遺構外出土遺物図(9)



第348図 遺構外出土遺物図00

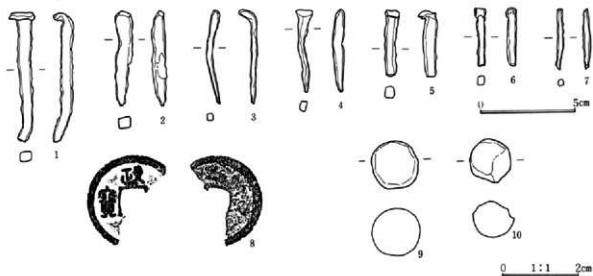


第349図 遺構外出土遺物図00



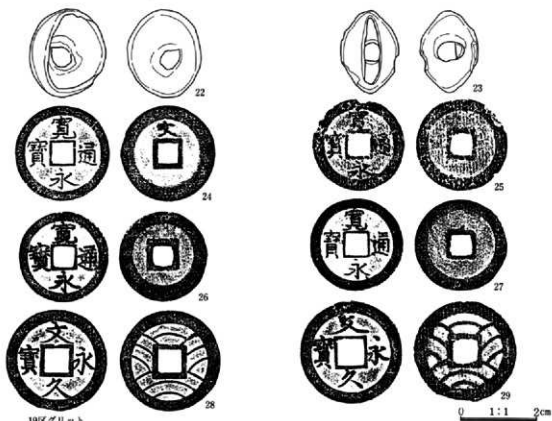
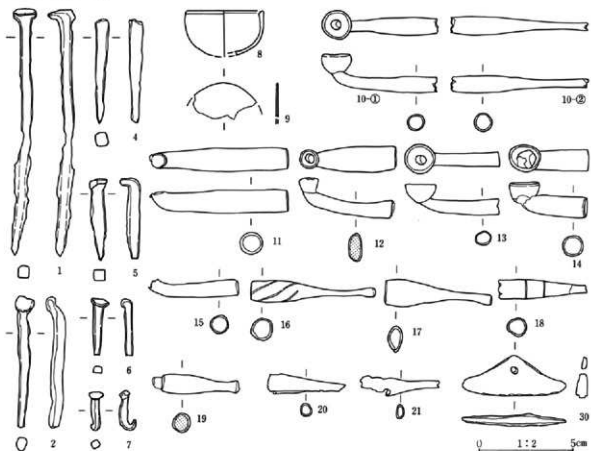
17区グリット

18区グリット



第350図 遺構外出土遺物図03

第9章 遺構外の遺物



19区グリット

第351図 遺構外出土遺物(四)

第10章 町道改修工事に伴う発掘調査

1 はじめに

ここで報告するのは、町道1—130号線の改修工事に伴い発掘調査されたものである。調査は、箕郷町教育委員会の要請を受けた群馬県教育委員会が実施したものである。2基の古墳が検出された。その後、北陸新幹線の建設に伴い実施された発掘調査で検出された3号、25号の各古墳に該当する。

2 調査について

日 時	昭和56年1月～2月
場 所	群馬県箕郷町大字和田山字地藏堂451-13、451-14ほか
実施機関	群馬県教育委員会文化財保護課
	調査担当 文化財保護主事 桜場一寿
	文化財保護主事 洞口正史

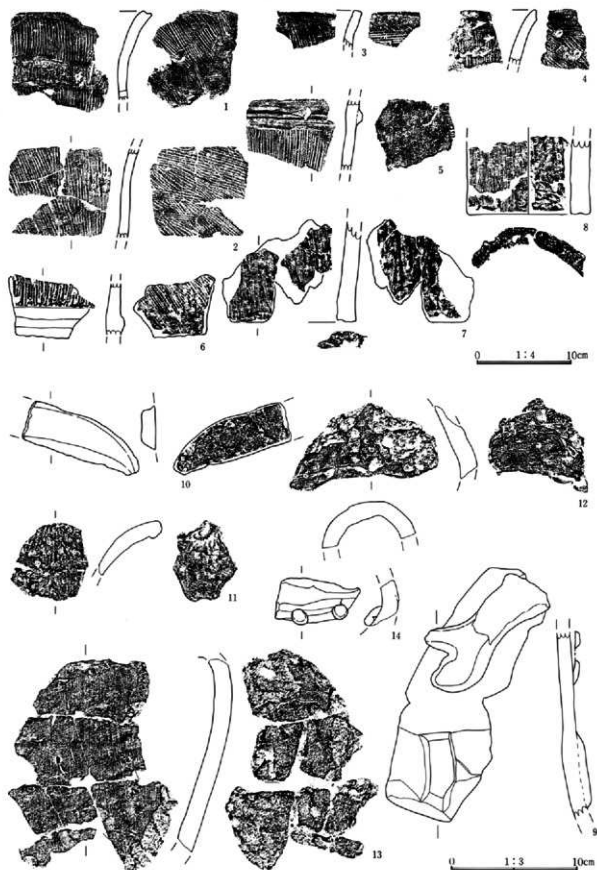
3 検出された遺構と遺物 (第352～354図 P L165)

調査は、旧道の拡幅部分を対象に行われた。対象地を含む一帯は、群馬県遺跡台帳に記載されている和田山古墳群として周知の遺跡である。現地立ち会いの結果、拡幅部分にも2基以上の古墳があると判断された。そのため関係機関と協議し、工事の進捗に伴い遺物や遺構が出土した場合に本調査を実施することとした。

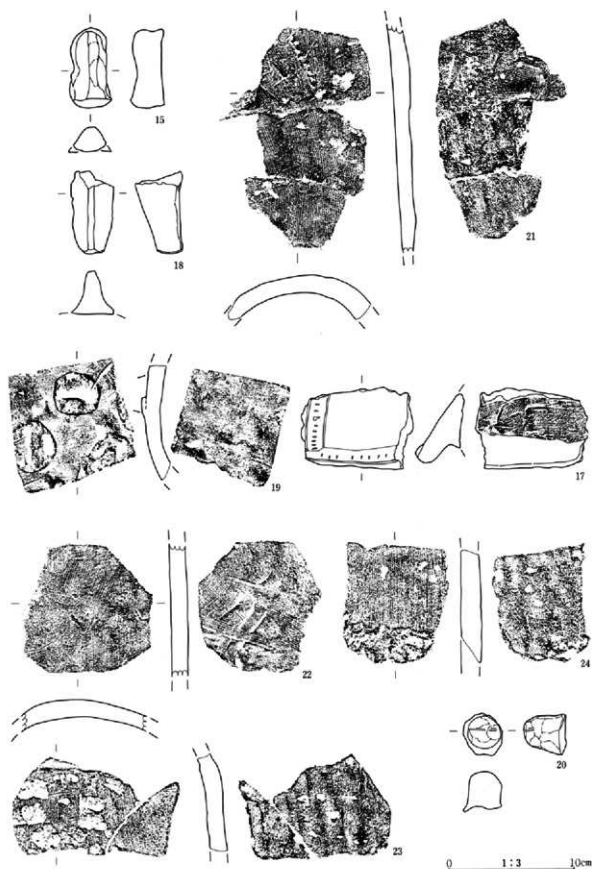
古墳の周堀が2箇所検出された。いずれも、わずかに墳丘を削る。北からは、人物や馬、円筒の埴輪が周堀覆土に混入して出土した。南の古墳からは、遺物の出土がない。

1～8は円筒埴輪である。総数は5～6個体である。赤褐色、胎土は粘性強く形象埴輪と共通した特徴をもつ。刷毛は表裏とも明瞭で密に施されている。1cmあたり4本の太いものと4本以下の細いものがある。凸帯はM型で稜線がはっきりとしている。

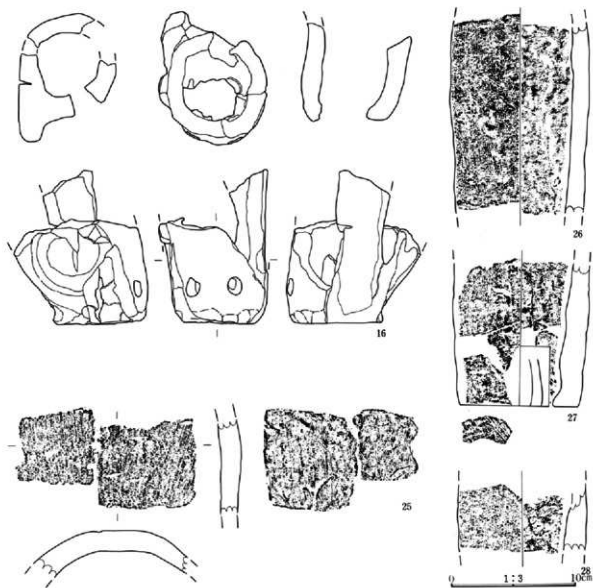
9～14は、同一個体の人物埴輪である。大刀をおびた男子立像が復元される。このほかに首飾りをつけた人物の破片がある。15は、家型埴輪の堅魚木である。棟木から斜落している。長さ6cm、4号古墳のものに比べると短く、棟頂部に強いナデつけで接合されている。16～28は馬型埴輪である。胎土から26～28は別個体に分けられる。16は面繫の部分で、鼻面から口元までが表現されている。口には、轡をかませ円環の鏡板でつなぎ、耳元まで引手の革紐がのびる表現である。喉元の粘土板に半円状に折り曲げた粘土板をつけて成形している。17は障泥、胴部にハの字に接合されるもので縁取りの様子が細い粘土紐で表現されている。19は尻繫、三環鈴の鏡板をつけている。未報告の中に須恵器の壺や短頸壺各1点、土師器の壺、杯の破片がある。古墳の時期は、これらの遺物の特徴から6世紀後半と考えられる。



第352図 25号古墳町道改修分遺物図(1)



第353図 25号古墳町道改修分遺物図(2)



第354図 25号古墳町道改修分遺物図(3)

第11章 調査の成果

1 和田山古墳群について

上毛古墳総覧には、円墳74基が登録されている。

南麓では、烏川沿いにある榛名町奥原古墳群とともに、その数の多さでは知られていた。しかし、発掘調査されたものはなく、開墾で存在が明らかとなった桜塚古墳、東京国立博物館所蔵資料などが公にされていたにすぎない。第355図は、総覧記載の地番を公図に記入したものである。現況からすると、特定することはむずかしいが分布上の傾向を知ることができる。

分布からみた特徴として、下記の3点があげられる。

- 1 最高所の中央尾根を境界として、権名白川に面した東側に集中する。
- 2 その中でも、現況の河川に接する2本の尾根と中央尾根に集中している。
- 3 中央尾根の最高所には、方格規矩線を副葬した桜塚古墳、6世紀初頭の太子塚古墳がある。

この分布傾向は、右島和夫氏が吉井町神保下篠古墳群の分析で、造墓と関連させた河川に面した側が多いという指摘と合致する。2号古墳のような総覧漏れを含めても、この傾向に変化はないと思われる。

その数は、本調査での検出状況から判断すると、総覧を上回ることは確実である。地元での聞き取りでは、昭和19年陸軍が群馬町菅谷飛行場の退避壕建設の際に調べた90基前後という数がある。

本報告は、中央尾根、東尾根ともに上記の集中域の一角にあたる。



第355図 和田山古墳群分布図

19区の古墳

中央尾根にある3～9号、22～26号の11基がある。この一群は、立地の違いから3群に分けられる。

- | | | |
|---|------------------|--------------|
| 1 | 尾根の頂上部平坦面に立地するもの | 3・4・6・24・25号 |
| 2 | 尾根の肩口に立地するもの | 5・22・23号 |
| 3 | 尾根の東斜面に立地するもの | 7・8号 |

総覧の分布からも同様な傾向がうかがえ、この古墳群での墓域の構成やその中の単位をしる指標になると思われる。中央尾根は、調査区の中では最高所にあたり、東尾根への分岐点である。その高さは、造墓上の困難さを伴う反面で被葬者の権威を象徴することでもあり、桜塚古墳や太子塚古墳の存在がそれを暗示している。新たに、この尾根上で4世紀代の方形周溝墓が検出されたことは、墓域としてのはじまりを知ることができる。また、墓道の発見は、墓域の構成や内部の動線を知る上で重要である。

次いで、3群を石室平面形でみると下記のことが指摘できる。

- 1 袖無タイプの狭長な形態から両袖が明瞭になり、前庭が発達する過程が読みとれる。
- 2 主要な石材が立地の群別に選択されている。角閃石安山岩の利用が特徴的である。
- 3 あくまでも南開口を意識している。その例外は時期区分の指標となる。

狭長な形態から両袖が明瞭になる過程は、4号から24・25号、そして3号の流れが該当する。袖無タイプに近い4号は、乱石横平置で玄室・羨道をつくり、玄門・羨門の箇所だけを小口積みにしている。24・25号では、石の積み方が左右対称をなすように規則的になる。玄門・羨門は明瞭になり、3号に至っては石がさらに大型化、見事なまでの矩形である。25号は、複室構造が特徴である。石材では、主体部が細粒乃至粗粒輝石安山岩、いずれも1m前後の大ぶりの石を使用している。葦石と床面にだけ角閃石安山岩が、主体部と区別するように使用されている。

7・8号は、前庭が整った一群である。7号は、特にハの字に開く前庭が特徴である。主体部は、やや扇張りの乱石積で粗粒輝石安山岩がほとんどである。その中で肩口の一群を継承するかのようになり、玄門と羨門の箇所だけに多段積みの角閃石安山岩の削石が使用されている。前段階が立柱状の玄門を持つ8号である。急な東斜面にありながらも、周堀をめぐらして南開口を指向するのも特徴として加えられる。

この中間にくるのが、5・22・23号、肩口の一群である。

唯一の東開口、主体部、床面、葦石といった主要な石材が角閃石安山岩で構成される点に特徴がある。壁石には、粗いハツリがみられ、次の5面の削石への過渡的な様相である。5号はL字形で、残る2基もやや変則的な平面形となるようである。

古墳の時期としては、立地で分類した1が6世紀後半から7世紀初頭、埴輪の副葬と石室平面形の特徴を指標とする。3が前庭の特徴から7世紀中頃から後半、2はその過渡期である。

6世紀後半代の古墳は、盟主墳に連なる一群で群集墳前半のピークに当たるものであろう。総覧でも、この尾根上には埴輪有り記載された古墳が多い。造墓の契機は、二ツ岳噴火による土石流で榛名白川左岸の墓域が消失したことが大きな要因ではないか。

一方斜面の一群は、山寄せ古墳に当たるもので東尾根からの動きである。玄門や羨門の特徴、前庭の発達で段階を見ることができる。特筆されるのが、過渡期とした肩口の一群である。地形の勾配を墳丘に利用する意図が見えたり、削石の加工の程度や前庭が未発達らしいことを指標とした。角閃石安山岩への固執は強い規制を感じさせる。

16区から18区の間

東尾根にある1・9～21号の14基がある。尾根の先端が現況の榛名白川に接しているためか、密度の濃い分布状況である。立地から下記のことが指摘できる。

- 1 低いながら頂部、斜面の違いがある。南面する2～3のひな段状の列が推定できる。
- 2 造墓は尾根の川よりの先端から始まり、中央尾根に向かって数を増す。
- 3 7世紀前半に画期を持ち、墓域はそれまでの畠や住居に重複して拡大している。

ひな段状の列は、中央尾根の傾向と共通するものである。4号墓道が18号と19号の間を直登し西へ折れるのも、この列を意識したものであるし構成のあり方を示唆している。2基だけではあるが、ここでも墳輪の有無が指標になり時期区分ができそうである。検出した資料では、上段に墳輪が副葬され下段ではないという傾向がある。11号は、周堀にFAを含み、時期や立地で先駆的な存在である。後続する10号も、墳輪を副葬し一群の中では規模が大ききことから、先端への意識の強さがうかがえる。榛名白川対岸の墓域と連動したとも考えられ、中央尾根の頂部に対する造墓の基点のひとつを、この先端におくこともできる。

しかし、その後への継続性は乏しく、むしろ画期があるとみた方がよい。山寄セタイプの造墓が本格化する7世紀前半からの急増ぶりである。高低差の著しい1号と9号でも中央尾根でみるような時期差はなく、12号より西の一群がほぼ継続して作られている。10m前後の規模や石室平面形の共通した特徴は、それを示している。列の中でも、12・13・14・17号の一群、16・18・19号の一群、1・9・20・21号の一群というような、4基前後の小単位がある。その中で唯一、小石椁タイプの15号がある。周堀もなく終末的なあり方のようであるが、1基相当分の墓域を占めている。

墓域が、急速に拡大したことを示す資料がある。18、19号の下面では9、11号の2軒の住居が検出され、21号の下面では15号住居が検出されている。前者では、埋没状況から若干の時差があると判断される。後者では、壁際に土の堆積がはじまるか、そのままかといった状況で明らかに人為的に埋没している。これは、単なる居住域から墓域への転換ではなく、むしろ墓域の確保が急であったことを意味しよう。住居も、この地域に一般的にみられるもので、墓作りのための仮設という感がないことから推測される。

この居住域を転換させて、墓域の確保・拡大の背景には、2つのことが考えられる。

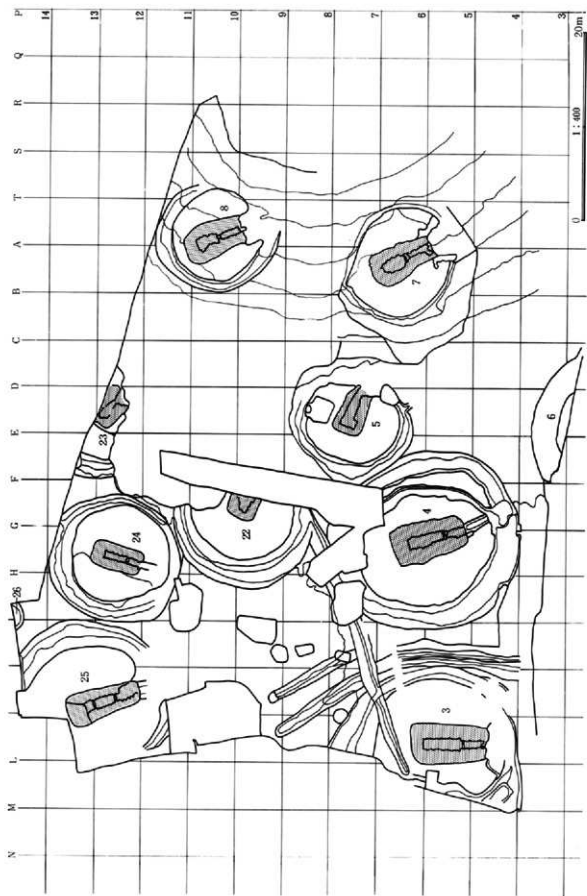
1点は、この古墳群では本来の墓域が中央尾根であったこと。谷地の畠や住居からみた墓域とするのが、最も自然かと思われる。これに対して東尾根は、先端のみが意識された従的な場であったと考えられる。もう1点は、二ツ岳の噴火による地域の再編成である。埋没する住居が6世紀後半であることが、それを支持しよう。畠の廃絶、集落をあげての移動、そんな状況が読み取れる。

以上、検出された内容を中央尾根と東尾根に分けて特徴をのべた。まとめとして、造墓は尾根を単位にしたと考えられる。その中でも、高さや幅の点で勝る中央尾根が全体の中心をなしている。椀塚古墳や太子塚古墳、墓域としての利用がはじまる方形周溝墓の存在をみても、主たる位置を占めたと考えたい。

画期がみられるのは、7世紀前半代の東尾根の動きである。直前期までの住居を埋め、畠を廃絶に追い込むという集落全体を巻き込んだものである。この時期は、全国的に群集墳が盛行する。榛名山南麓でも例外ではなく、榛名町奥原古墳群をはじめとして、この傾向の中にある。それは、耕地を最大限に確保するための土地利用の変化、あるいは山麓まで開発が踏みこむようになる、という時代性もあろう。和田山の古墳群も、このひとつであることに間違いはない。しかし、白川扇状地に面するという立地からすれば、二ツ岳噴火で埋没した榛名白川左岸に代わる新たな墓域、その後の地域の復興という2つの段階を経てきた古墳群と位置づけられよう。

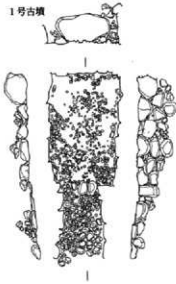


第357図 古墳分布図(2)

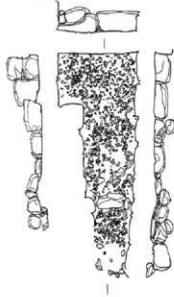


第358図 古墳分布図(3)

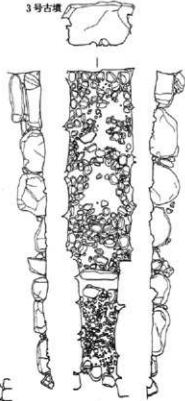
1号古墳



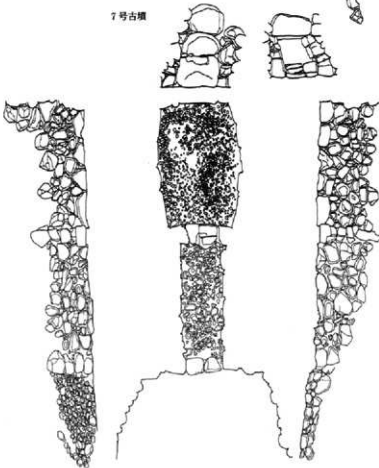
5号古墳



3号古墳

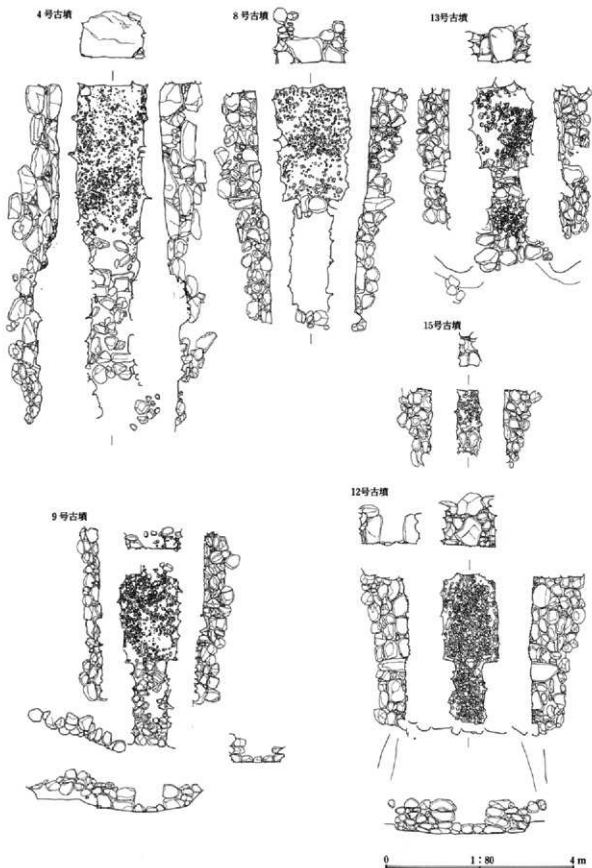


7号古墳

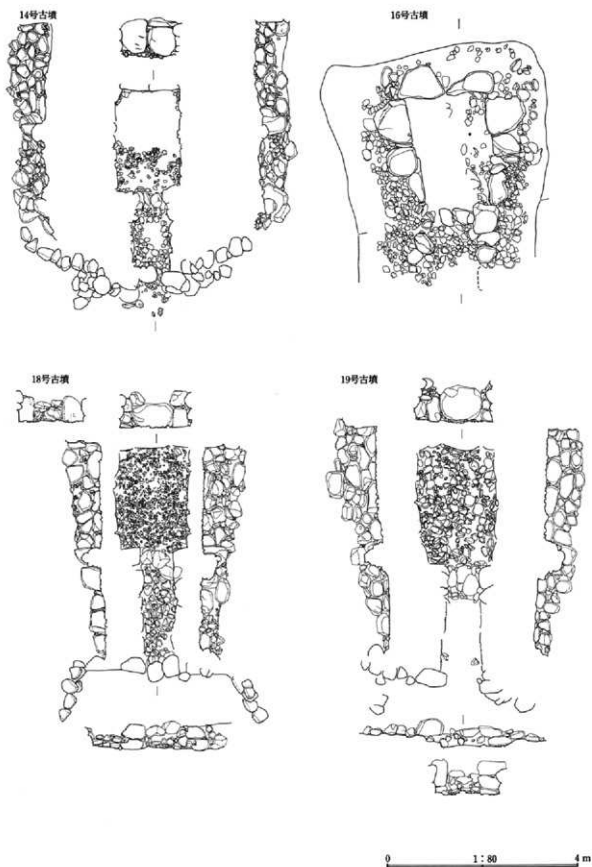


0 1:80 4 m

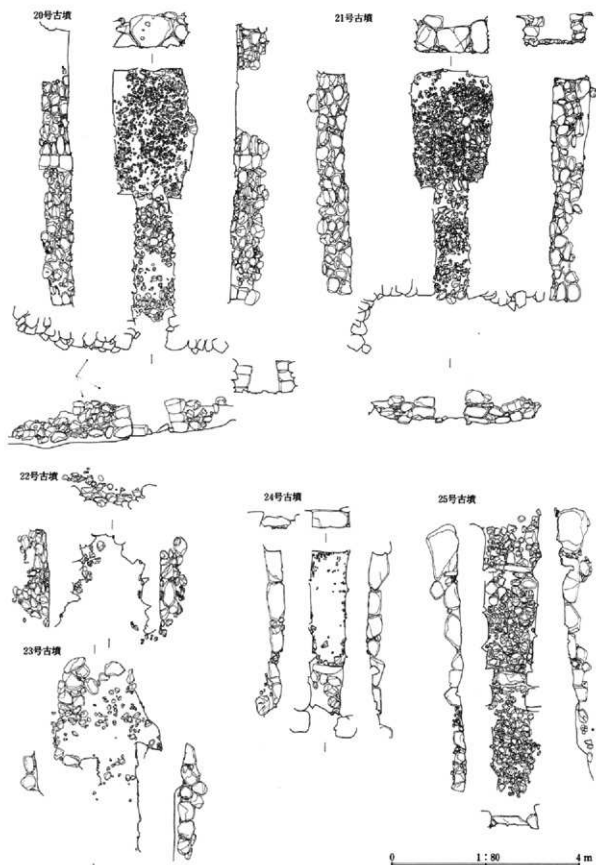
第359図 石室平面集成図(1)



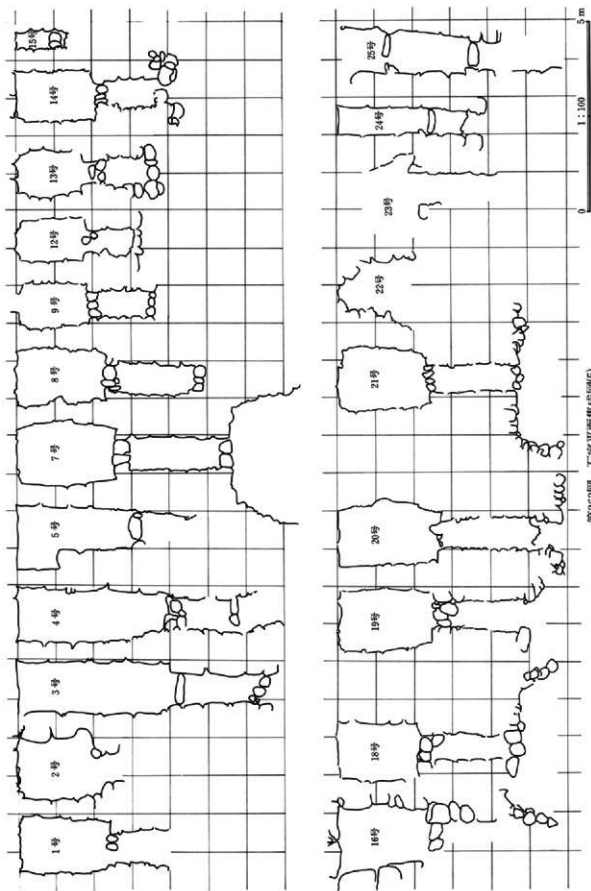
第360図 石室平面集成図(2)



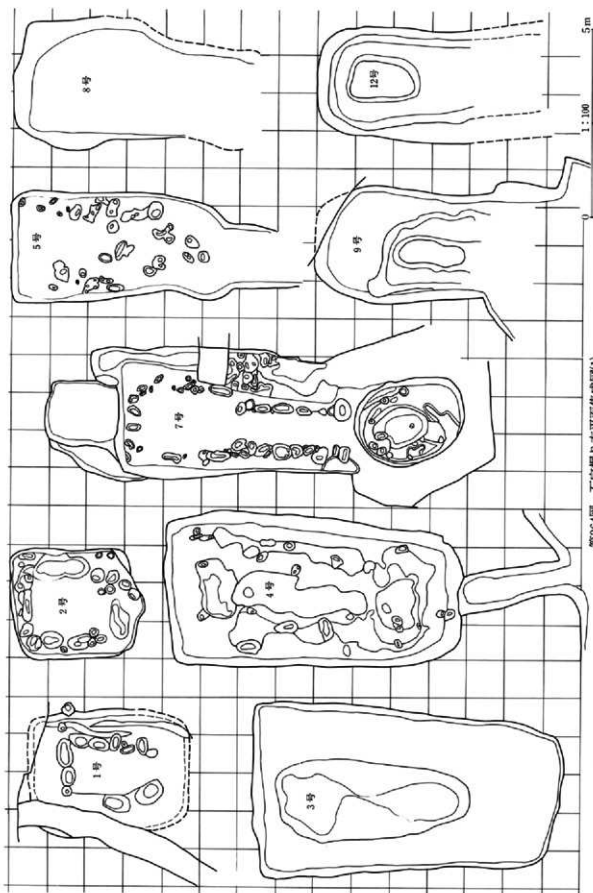
第361図 石室平面集成図(3)



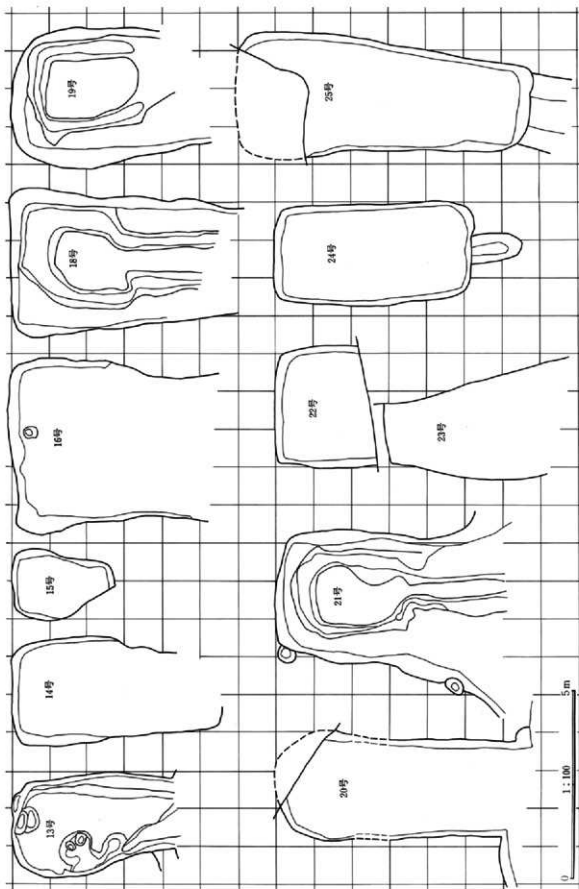
第362図 石室平面集成図(4)



第363図 石室平面集成図(5)



第364図 石室掘り方平面集成図(1)



第365図 石室掘り方平面集成図(2)

和田山天神前遺跡古墳一覧表

番号	形状	直径	石室	開口方向	遺物	備考
1	円	9.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-4'-W	大刀・鎌・釘・須恵器蓋・瓶・杯	
2	円	8.6	自然石乱石積両袖式横穴	S-17'-W	刀子・釘	
3	円	13.5	自然石乱石積両袖式横穴		須恵器壺	墓道重複
4	円	15.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-14'-W	大刀・鎌・釘・ガラス小玉・埴輪	墓道重複
5	円	9.0	角閃石安山石L字形横穴	E-26'-N	大刀・鎌・釘・ガラス小玉	
6	円	12.0	未確認			周堀の一部
7	円	11.0	河原石乱石積両袖式横穴	S-30'-W	釘・人骨・須恵器壺・杯	
8	円	9.0	河原石乱石積両袖式横穴	S-23'-W	釘・人骨・壺・須恵器杯・蓋	
9	円	10.0	河原石乱石積両袖式横穴	S-25'-W		
10	円	13.0	未確認		埴輪	
11	円	15.0	整穴系か		埴輪	造出か
12	円	7.0	河原石乱石積両袖式横穴	S-7'-E	杯	
13	円	7.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-13'-W	杯	
14	円	10.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-18'-E	杯	
15	円	—	河原石乱石積両袖式横穴	S-20'-E		
16	円	10.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-25'-E	耳環	
17	円	7.0	未確認			周堀の一部
18	円	10.5	自然石乱石積両袖式横穴	S-27'-W	釘・鎌	墓道重複
19	円	12.4	自然石乱石積両袖式横穴	S-11'-W	飾金具・刀子・釘・短頸壺	墓道重複
20	円	10.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-28'-W	鎌・杯	
21	円	12.0	河原石乱石積両袖式横穴	S-10'-E	釘・杯・短頸壺	
22	円	11.5	角閃石安山岩乱石積横穴	E-2'-S		
23	円	10.0	角閃石安山岩乱石積横穴	E-40'-S		
24	円	11.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-13'-E	埴輪・釘	
25	円	13.0	自然石乱石積両袖式横穴	S-20'-W	埴輪・釘・鎌・埴瓶・須恵器壺	
26	円か	—	未確認			周堀の一部

2 中世の遺構

和田山には、和田氏とされる館跡、長野氏に関係する極楽院の伝承地がある。16世紀代、地域の拠点になる箕輪城にも近く、また周辺には石造物も数多く残されている。本調査で発見された中世の遺構と合わせながら、特徴をのべる。

検出された遺構には、14世紀前後、18区の寺院跡、16区の極楽院伝承地からはその前身となる遺構がある。特に、16区にある94号土坑からは、信貴形水甕が埋納された状態で出土し注目される。

(1) 寺院

寺域の推定

検出された遺構は、礎石瓦葺建物跡2棟、道跡3本、井戸2基、溝1条が寺に直接かかわる遺構である。これらは、谷地の整地面上にあるものと、1号建物のように斜面の中段にあるものとに分けられる。さらに、東側には再建用の瓦を焼いた窯跡、東への広がりをみせる17区STピット群、粘土採掘坑の17区土坑群が斜面にかけてつづいている。

寺域を推定する要素は、自然の地形、伝承や字など地名、検出された遺構の3点がある。この中で、尾根を区画に利用したと考えるのが最も自然である。斜面を含む尾根の取り込み方は、山麓にある古代寺院唐松鹿寺や現在箕輪町のある寺院と比較しても妥当な解釈である。「コ」の字形にめぐる尾根で囲われた範囲、約200m四方が浮かんでくる。中世寺院に共通する占地形態であること、関連する遺構と遺物の分布を傍証とする。大正大学齋藤忠名誉教授による尾根を背にした浄土系の配置が、この範囲をさしている。検証できなかったが、尾根の南に広がる水田に園池を推定することも可能である。

箕輪町役場保管明治年間の公園では、この範囲の大半が長野氏末裔により所有されている。旧天神社の御朱印地であった可能性があり、明治元年の極楽院廃寺に伴い、天神社を管理する長野氏に引き継がれたものと推測される。補強する資料として、北西隅に通称薬師様、南西隅に長野鎮良以下一族の墓地があるのも、寺域を示す傍証のように思える。地名では、1号建物がある尾根の上段が字地藏堂であることが注目される。1号建物の性格をあらわすのか、それとも別の建物が存在するのか。川原嘉久治氏によれば、周辺では地藏堂の地名と瓦散布地の一致がみられるという。寺の性格を考える上でも、要検討である。直接の手掛かりとなるのが、溝、道、そして瓦の分布である。礎石建物は当然として、瓦は斜面をのぼりつめた8号溝や1号井戸の覆土からも出土している。1号屋敷が中世の船平段を利用したことも推定される。調査区域外になるが、1号建物の南に瓦の散布地がある。また、尾根の西、谷地をへだてた20区の尾根には火葬した墓坑がある。18区の土坑墓との対比が、寺域のあり方やその後の変遷を考える上でも興味深い。

寺と前身遺構との関係

寺は、2号建物でみると3期の変遷がある。瓦の年代観からは、13世紀後半から14世紀前半に創建され、6号道や墓坑からは16世紀前後まで存続した可能性がある。1号建物が推定2間・3間、鏡を転用した懸仏から持仏堂のような性格をもち、存続期間も比較的短いと考えられるのに対して、2号建物は方5間、繰り返し建て替えられた中心建物と推定される。一方の前身遺構は6期の変遷があり、上限は15世紀前半以降、下限は17世紀代にかけ、その後伝承のとおり極楽院へと推移したものと考えられる。堀をめぐらした館の性格を帯びる5期からの背景には、箕輪築城や長野氏の存在があるのではないかと推定される。抬頭する新たな為政者として

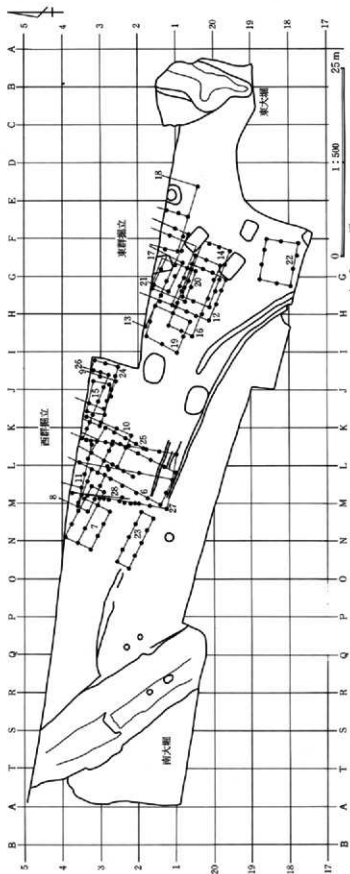
て前代までの寺域をかりて、力を誇示する意図である。箕輪落城後、ただちに長野業盛の遺子亀寿が落ちのびることができたのも、この場所が極楽院であり、長野氏との関係を暗示している。

この西から東への動きは、寺が衰退したためか、それとも中心を移す必要があったのか定かではない。その鍵を握るのが信貴彩水瓶である。年代的には西の寺にあるのがふさわしく、東での出土は伝世を介して可能な持物である。埋納の影には、前代までの寺域の一角での地鎮、寺の象徴を継承する意図が隠されているのではないか。それが齋禱壇（さいとうだん）と呼ばれる一角にあることは、大正大学小此木輝之氏から指摘を受けたように修験護摩壇との関係があげられる。小此木氏は、探燈護摩壇における「正式な土壇」の坑に入れる「五種の宝」の入れ物として、この水瓶をみている。五種の宝とは、金・銀・珊瑚・真珠・水晶などで、これを個個水を入れる瓶に取め土中に沈めるものとされている。94号土坑の出土状態は、これに見合うかのようなようである。焼土遺構に併存させ、水瓶が出土した理由もこの指摘による。

両者の関係並びに周辺の動きとして、次のことがあげられる。

	検出された遺構	周辺遺跡
11世紀		榛名町白岩長谷寺
12世紀	18区畠	天仁元年浅間山噴火 高崎市浜川来迎寺 建久元年上野国留守所下文
13世紀前半		正嘉2年永野刑部丞次郎太郎6代将軍宗尊親王供奉 建治元年京都六条八幡造宮注文写長野刑部丞8貫文掲出
	後半 和田山に寺創建以後3期の変遷	
14世紀		来迎寺基石群 応永3年室町幕府上野守護上杉憲定に長野郷など安堵
15世紀前半		応永23年上杉憲基長野郷内箕輪本郷を鎌倉明月院に寄進
	後半 極楽院前身遺構 以後6期の変遷 水瓶伝世され後に埋納	榛名塔盛行
16世紀		明応～文亀年間長野業箕輪築城 尚業・信業・業政・業盛4代西上野の旗頭として活躍 永禄9年箕輪落城 長野鎮具極楽院に入る 武田信玄極楽院に修験西上野年行事職安堵
17世紀		徳川家光極楽院に朱印地安堵 以後聖護院末寺として明治5年まで存続

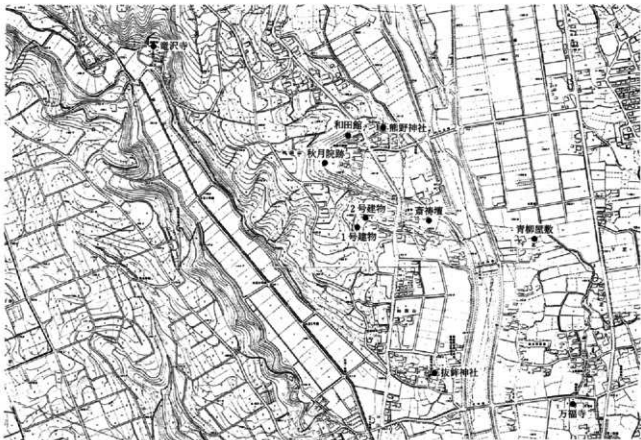
寺は、榛名山南麓での仏教信仰の流れをくみ、地域の有力者を基盤にして創建されたことは確かである。その有力な候補として、文献資料からは御家人長（永）野氏、執権北条一族金沢氏が浮かんでくる。長野氏は、古代以来この地域を基盤としてきた有力な豪族であり、金沢氏は明月院への寄進文からこの地域との関係が知られている。水瓶のように中央勢力との関係を感じさせるものがあるものの、前身遺構、その後極楽院と長野氏との関係をあげれば、寺の創建からその後の変遷には長野氏の力に負うところが大きかったのではない。あるいは、逆に寺の興亡が、長野氏の栄枯盛衰やこの地域の動きを反映していると考えられる。



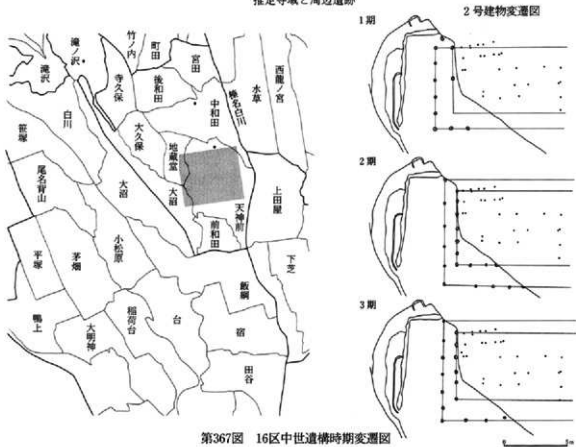
16区は、鎌倉白川につき出た尾根の先端寄りである。権家邸の伝承地でもあり、西群集立は斎藤堀と通称される箇所である。

中世遺構は、東と南を大堀で区画された中に収まり、6期におたる東堀がある。大きくは急の時期をさきで、権家邸前身遺構と細に分けられ、船が江戸時代に存続する権家邸へと推移する。上記の図は6期の敷をさし、右下に配線結果を加えた全体の推定図を添付した。

第366図 16区中世遺構全体図



推定寺域と周辺遺跡



第367図 16区中世遺構時期変遷図

3 室町・戦国期における上野国箕輪の変遷

(1) はじめに

戦国期の西上野には、政治的・軍事的拠点として箕輪城を中心とする箕輪という地域があった。戦後の町村合併によって、現在の箕輪町の町名が誕生する以前には、この伝統的名称を冠した箕輪町があり、今でも時折通称として聞くことができる。しかし、この箕輪という地名は既に江戸期には村落名として消滅しており、結果としてその範囲も漠然としたものとなっている。このため、本稿では第1にその範囲を凡そ確定するとともに、その支配を見ることでそれが不分明なものとなってゆく過程も捉えられるものとする。併せて室町期の状況も見ることによって、箕輪という地域の性格とその変遷にも言及したい。なお、本稿は箕輪及び箕輪城の戦国期における意義や、箕輪城下町の形態・性格などを考えるための基礎的作業と位置付けられる。

(2) 箕輪とはどこか

室町期における長野縣内村落の名称は、例えば応永10年(1403)の「長野縣内西柴村」(群1281)⁽¹⁾、応永29年(1422)の「長野縣浜河村」(高198)、応永31年の「長野縣内東荒浪村」(群1409)の事例が示すとおり、「長野縣内〇〇村」というのが原則的な村落の名称であった。しかし、箕輪は長野縣の中でも特異な存在と考えられ、具体的には以下の事例が見られる。

(史料1) 上杉憲基寄進状⁽²⁾

□□ 明月院

上野国長野縣内箕輪本郷賀嶋左衛門太郎跡事

□□ 当院領所寄附也者、早〇〇例、可被致沙汰之 状如件

□ 永23年6月3日

前安房守憲基(花押)

(史料2) 武田家定書写⁽³⁾

定

百七拾貫文 富岡一村

五拾七貫六百文 柴村之内

式拾三貫文 柴村之内

拾三貫文 箕輪之内 西宿

式拾四貫文 行力村之内

三拾貫文 大八木村之内

合三百拾七貫六百文

難無忠節候、近年抱來之由二候間、如右之下置候、自今以後依戦功可有御重恩之旨、被仰出也、依如件

永禄十丁卯年五月朔日

金丸平八郎

奉之

大愿伊賀守殿

史料1は、関東管領上杉憲基(山内上杉氏)が、その菩提寺である鎌倉の明月院に寺領寄進したものであ

る。なお、明月院への寺領寄進では、既に応永10年憲基の父憲定が長野郷内西柴村半分を寄進していた(群1281)。この史料の「箕輪本郷」は、箕輪の初見史料である。

史料2は、配下の犬熊尊秀に対して武田氏が「箕輪之内」ほかの領地を宛行ったものであり、「近年抱来」といった押領の状況や、「雖無忠節候」といった文言が興味深く、何らかの事情があるものと推測する⁽⁴⁾。この永禄10年の武田氏の所領宛行は、武田氏が本格的に西上野支配に着手し始めた時期であり、箕輪城攻略の戦後処理的色彩が強く感じられる。この点で「箕輪」という表記も旧態を継承した印象を受けるが、他に「○村」と表記されていることを見れば、「箕輪」が意識的に使い分けされた名称であることが判明する。

ところで、「箕輪本郷」という地名でまず想起されるのが、現在の標名町大字「本郷」(以後「」は大字を、【】は字を示す)である。「角川日本地名大辞典10 群馬県」によれば、「字三角の地は古代の西群馬評(郡)の郡衙の地と推定され、長野郷の中心地であることにより本郷の名が起ったとも考えられ」という。しかし、箕輪を冠している点で同一地名とは考えにくく、「本郷」については、応永4年(1397)に「長野本郷」(高165)という事例があり傍証となるだろう。なお、本郷とは郷の中心を指すものであるから、当然「箕輪本郷」も箕輪の中心的集落である可能性は高い。具体的には【本郷】(西明屋)を充てるのが妥当と考える⁽⁴⁾。

ここで、「箕輪」(後述する箕輪領と同義語である箕輪との混同を避けるため、く)を付して地名としての狭義の箕輪として区別する)の範囲を考えるため、前掲の「西柴村」・「浜河村」・「東荒浪村」のほか、長野郷と表記されないうが本地域の村名として史料に見られる地名を抽出したところ、年代不明の「長野庄之内 行力村・中里村」(群2154)、永禄10年の「富岡一村・柴村・行力村・大八木村」(史料2)、天正4年(1576)の「金井淵・北新波・本郷・楽間郷・白川郷・下行力・柴之郷・大八木・程田」(群2854)、天正8年(1580)



第368図 箕輪推定地と周辺大字位置図(1:60,000)

の「白河・松原」(群2980)の各村々が判明した。具体的な位置は第1図のとおりである。したがって、消去法によって現在の地名から割り出したところ、旧箕輪町内では大字名で「西明屋・東明屋・生原・矢原」が抽出できたが、【松原】は「矢原」内であることから消去できる要素を含んでいる。ところで、「西明屋・東明屋」は箕輪城下町が帰属する地域であり、他の2地域とは性格が異なる。したがって、「生原・矢原」は一部(箕輪)に含まれていたかもしれないが基本的には除外して、「西明屋・東明屋」が《箕輪》を指すものとする。なお、《箕輪》の範囲はやや広いものと言えるが、前記史料1の「箕輪本郷」や永禄11年の「下箕輪」(群2312)といったように、更に細分する名称が使用されていたことが知られる。

(3) 長野郷から箕輪領へ

室町期に長野郷内であった《箕輪》は、戦国期のある時期から「箕輪領」或は単に「箕輪」と呼ばれるようになってくる。

(史料3) 武田信玄書状写⁽⁷⁾
(花押影)

別而被抽忠節候間、於箕輪領五百貫之所出置候、名所之事は、重而以書立候、右申越候者可覆判形候、恐々謹言

(永禄5年)
 壬戌九月廿二日
 浦野新八郎殿

史料3は、大戸(吾妻町)の浦野氏(大戸氏)に対して所領宛行を約したものであり、「箕輪領」の初出史料である。ちなみに、浦野氏の武田氏「従属の時期は西上野諸将のなかではかなり早い部類に属して」⁽⁸⁾いた。この箕輪領の内容は、その後の史料により「箕輪之内半田跡」(群2178)と判明する⁽⁹⁾。しかし、ここでは領の文字が抜けて「箕輪之内」とされており、同様な事例は永禄10年の「箕輪之長純寺」(群2363)、天正4年の「箕輪正法院」(高420)に見られ、箕輪領と同義語として使用されるようになったと位置づけられる。ちなみに、長純寺は「富岡」に所在しており、前述の《箕輪》の範囲からは逸脱している。したがって、箕輪領と同義語の箕輪つまり広義の箕輪の使用開始によって、従来の《箕輪》の範囲が曖昧なものとなっていったものと推測する。

では、いつからこの「箕輪領」が使用されることになったのかといえば、箕輪領つまり長野氏の支配領域と認識された段階がその端緒と見て間違いない。前述のとおり長野郷の用例は、応永31年(1424)の「長野郷内東荒浪村」を最後として見られなくなり、その後長野氏の箕輪領支配と箕輪城築城がなされたのである。この長野郷から箕輪領への名称の変換は、単純な地名の改変ではない。形骸化していたとはいえ、古代から継承されてきた長野郷という郷名が、名実ともに消滅したことを意味し、長野氏の所領として認識されたのである。領有の問題は後述する。

(4) 箕輪の領有

長野氏以前

中世における箕輪あるいは長野郷の領有を考えるにあたって、まず考慮すべき在地勢力として、長野氏の存在があることは言うまでもない。この長野氏については、国衙領である長野郷との関連から在庁官人という位置付けが有力視され、具体的な事例として「惣檢校石上・散位石上」(群72)が示されてきた。しかし、

近年『新編高崎市史』の成果により、鎌倉幕府御家人永野刑部丞が一族であることが明らかにされ、その地位が一様でないことがわかってきた。このような状況下で、久保田順一氏は史料1の「箕輪本郷 賀輪左衛門太郎跡」に言及した際、「長野氏は鎌倉期に一時没落し、その所領が北条氏のものとなり、その一部が被官である賀嶋氏に与えられていた」とするに至っている。しかし、長野氏が長野郷を基盤としていたことは疑う余地がないとしても、同じ手法で直ちに箕輪と結び付けてしまうのは箕輪に対する認識を歪めてしまう恐れがあり、むしろひとつの可能性として捉えておく程度が妥当ではないだろうか。

長野氏が箕輪城を本拠とする以前の拠点は、長野郷内浜川村（現高崎市浜川町）周辺であると言われる。つまり、単純に言えばそこが戦国期以前の基盤であった。そこには乙葉館や隆業館（浜川館）など長野氏歴代当主の館という伝承を持つ館跡があり、その菩提寺として西隣にその歴代墓所を残す来迎寺が存在する（第1図）。また、昭和40年代以降周辺の館・屋敷跡である矢島館・寺の内館⁽¹²⁾・高田屋敷⁽¹⁴⁾が発掘調査されるに及んで、その具体的な内容が明らかとなるとともに、その周辺にも建物が分布する景観が復原され、長野氏の本拠とした当時の繁栄振りが証明されつつある。こうした長野氏の状況を押さえた上で、以下長野郷あるいは箕輪について検討してみよう。

前述のとおり鎌倉時代末頃に「箕輪本郷」を領有していた史料1の賀嶋氏は、執権北条氏一族金沢氏の被官と見るのが有力である。その後、たぶん足利政権によって欠所として没収され、長野郷は上野国守護である関東管領山内上杉氏の所領となる。ただし、その正確な獲得年は不明で、初見としては応永3年（1396）の所領安堵がある⁽¹³⁾。その後寺領寄進として「箕輪本郷」（史料1）、「西柴村」（群1281）、「東荒浪村」（群1409）が寄進されていること、また年次不明史料ながら「行力村・中里村」（群2154）を領有していることを考慮すれば、山内上杉氏の長野郷領有は一時的なものであったと言える。したがって、長野氏の本拠である浜川村周辺も領有されており、この点では久保田氏の言う長野氏の一時的な没落は肯取され、長野氏は山内上杉氏の勢力下に影を潜めていたものと見られる。ところで、山内上杉氏の上野国守護領国体制における重大な権限獲得として、応永8年（1401年）の欠所地処分権と同10年の国衙職獲得が挙げられており、山内上杉氏が長野郷を獲得した正確な年次は不明としても、その要因は長野郷が欠所を含み、また国衙領という所領形態にあったことは確実である。

文献史料以外に目を向けると、箕輪では足利政権と直接結びつく安国寺伝承地の存在がある⁽¹⁷⁾。そして近隣には平安時代中期の木造十一面観音像を本尊とする白岩山長谷寺が知られ、榛名山麓には唐松鹿寺や水沢鹿寺等といった古代山岳寺院も存在すること⁽¹⁸⁾、また本遺跡検出の中世寺院跡も注目されるのである。したがって、箕輪が古代山岳寺院に系譜を持つ中世寺院の中核的な地域とするならば、前述した賀嶋氏や山内上杉氏といった鎌倉に在在して政治の中核に係わる勢力との直接的な結びつきは、そうした背景をもって成立した可能性もあり、同時に強い影響を受けたものと判断される。

前述のとおり箕輪は、長野郷内でも「〇〇村」と表記されない特異な地域であり、箕輪という記載の初見である史料1段階から既にそれが見られることを考えれば、そうした特異な性格は長野郷成立当初まで遡れる可能性も高い。ただし、その性格を解明することはかなり困難であり、ひとつの要素として中世寺院との係わりを提示しておきたい。

長野氏以降

戦国期に箕輪城を本拠として勢力を伸ばした長野氏は、一体いつ頃から箕輪に進出したのか、その実態は不明である。仮に前述の賀嶋氏以前既に進出していたとしても、その後箕輪城築城までの空白期間は非常に

長く、その影響力は無視できるほど弱体化したものと考える。さて、箕輪城の築城は永正9年(1512)とも大永6年(1526)とも言われるが、その契機として第一に戦乱の本格化が挙げられ、具体的には峠岸純夫氏が論じた関東府体制の分裂と崩壊によって発生した15世紀後半の内乱期⁽¹⁹⁾がある。長野氏はこの内乱期を経て、上州一揆旗本から地域的領主へと成長し、箕輪城築城はそうした勢力拡大を象徴する事柄となる。築城は箕輪を地域の中心地へと変貌させるが、箕輪城は第1表に示したとおり、長野氏滅亡後は上野国全体の動向と同じく、周辺戦国大名の支配下を転々として、最終的には慶長3年(1598)井伊氏の高崎移城によって廃城となる。この間における箕輪城の位置付けは、各戦国大名の支配領域と大きく係わり様ではないため、とても本稿で明らかにできるものでも、意図するものでもない。ただし、この時期に発展したものとして看過できないのが箕輪城下町の形成であり、箕輪城が政治・軍事上の拠点的性格を強めていた一方で、着実に進化を遂げていたに違いない。なお、詳しい実態については別稿を期すこととして、ここではその背景をつかんでおきたいと思う。

箕輪城及び城下町が、はっきりとその性格を示すのは、実は慶長3年の廃城の時点である。つまり、移城の理由は中山道の開通によって和田(高崎)が要地となったため家康から指示されたものとされる(「高崎志」)。しかし、元来和田は鎌倉街道と東山道の結節点として交通の要所であり、中山道自体それを踏襲したものに過ぎないと言える。したがって換言すれば、戦国期の終焉とともに軍事的要所としての箕輪城の意義は薄れ、交通と密着した政治・経済・軍事都市として新たに高崎城が築城されたこととなる。しかも、この移城については殆どの商人が同行するという現象を伴っており、城主の命令も然ることながら、その後の箕輪(西明屋村・東明屋村)が市立てさえ行われぬ状況へと転化していったことを見れば、箕輪城下町は本質的に御用商人によって構成され成立していたこととなり、地域として商業圏を維持できる程の交通網その他の牽引力を持ち合わせていなかったものと結論づけられるのである。そしてこうした状況は、箕輪城下町の成立当初から抱えていた根本的な要件と捉えられる。経過を整理すると、前述のとおり箕輪城築城まで長野郷内で特異な地域であった箕輪は、その築城によって城下町へと開花し繁栄期を迎える。しかし、戦国期の終焉とともに城と城下町の立地価値は消滅して移転が行われ、かつての地域的な特性すら見失ったものと位置付けられる。

第1表 箕輪城略年表

永正9年	1512	長野憲業、箕輪城築城か。
大永6年	1526	長野憲業、箕輪城築城か。
永禄9年9月	1566	武田信玄、箕輪城攻略。
天正10年3月	1582	織田配下荒川一益、一時入城。
同年 6月	1582	織田氏滅亡により、後北条氏支配下となる。
天正18年8月	1590	井伊直政、城主となり十二万石を領する。
慶長3年	1598	井伊直政、高崎移城に伴い箕輪城廃城。

(5) おわりに

本稿は、戦国期における長野氏領有時代のみが注目されるあまり、その性格が看過されてきた箕輪という地域に焦点を絞ることに努めた。ここでは、従来曖昧とされていた《箕輪》の範囲を、再確認的に「西明屋・東明屋」とすることができ、併せてそれが箕輪城下町へと展開してゆく道筋も見えてきたと考える。なお、《箕輪》の範囲が曖昧なものとなるのは、長野郷から箕輪領へ、つまり長野氏支配の確立と直接的に結びつくことを示したが、そこには全県的或いは全国的な問題として、古代に形成された郷という行政区画が、戦

国期の地域的領土制の進展により再編成されるという問題を含んでおり、いずれ言及すべき論点と考える。なお、箕輪の領有を見ると、不明な点の多い戦国期の長野氏領有時代以前にも、別の特異な性格を持った段階が想起されることとなり、本遺跡検出の中世寺院跡の存在も含めて新たな評価が望まれることとなった。ところで、本稿はそうした点を踏まえた上で、箕輪城下町の形態・性格及びその変遷を辿ることを主眼としてきたが、筆者の非力により言及できなかった。

最後に私事ながら、本稿執筆中に他界した亡父 昭二に本稿を捧げるとともに、幼少の頃より教えられた数々の箕輪町に関する助言を胸に、その恩顧に報いるため、近い将来箕輪城下町に関して論及することを期したい。

注

- (1) 出典略号は、群〇〇『群馬県史 資料編中世』所収文書番号、高〇〇『新編高崎市史 資料編4』所収文書番号とした。
- (2) 応永23年6月3日付け 明月院宛上杉憲基寄書状(群1351)。
- (3) 永禄10年5月朔日付け 大熊伊賀守宛武田家定書写(高橋浩昭「内閣文庫所蔵『記録御用古公文書』所収『大熊文書』について』『高崎市史史料研究』第3号 1993、所収)。
- (4) 大熊氏の動向は、近年高橋氏の史料紹介によって、実態が漸く解明され始めた(高橋浩昭掲論文)。その際、越後から上野国に土着した大熊氏が武田方として箕輪城攻めに参陣したことを示すとともに、通説となっていた長野氏の被官という立場を否定している。しかし、『関東幕注文』(群2122)の箕輪衆に「小熊」氏が存在することなど、被官という見方にもなお検討の余地がある。
- (5) 柴辻俊六「武田信玄の開東経略と西上野支配」『戦国大名武田氏領の支配構造』名著出版 1991年。
- (6) 『本町』のすぐ南に隣接する八幡神社境内には文明6年(1474)の紀年銘を持つ輪廻塔がある。
- (7) 永禄5年9月22日付け 浦野新八郎宛武田信玄書状写(群2174)。
- (8) 黒田基樹「大戸氏の研究」『戦国大名と外様国衆』文献出版 1997 195頁。
- (9) 『半田』は天文4年の武田家定書(群2854)にも見えることから具体的な地名であり、従来から渋川市半田と吾妻町羽田の二説があるが、史料3から後者が理解し易い。
- (10) 久保田順一「上野武士団の中世史」みやま文庫143 1995、128頁。
- (11) 近藤義雄氏の調査によれば、永徳4年(1384)から享禄2年(1529)までの27基の墓石が残るが(『長野氏と箕輪城』『箕輪城跡』箕輪町教育委員会)、下段が箕輪城築城時期であるのも注目される。
- (12) 関口修・田村孝・金井潤子・古塚真美『矢島遺跡・御布呂 遺跡』1979 高崎市教育委員会。
- (13) 神田聖語・関口修・佐々木志子『寺の内遺跡』1979 高崎市教育委員会。
- (14) 田村孝『遺跡遺跡群』1989 高崎市教育委員会。
- (15) 応永3年7月23日付け 上杉朝宗宛管領所改義得施行状(群1247)。
- (16) 勝守すみ『上野国守護と守護代をめぐる諸問題』『長尾氏の研究』名著出版 1978、245頁。
- (17) 安国寺は現在高崎市内に存在するが、火災により縁起等を喪失している。ただし、所領を箕輪町西明原に持つことなどから箕輪から移転してきたとされる(『高崎志』)。
- (18) 川原喜久治『西上野における古瓦散布地の様相』『研究紀要 10』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992。
- (19) 峰岸純夫『東国における十五世紀後半の内乱の意義』『中世の東国 地域と権力』東京大学出版会 1989。

第12章 分析・鑑定

群馬県、和田山天神前遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 和田山天神前遺跡の地質

1. はじめに

榛名山南東麓に位置する和田山天神前遺跡の発掘調査では、複数の層準から畠状遺構などが検出された。そこで地質調査によって土層の記載を行うとともに、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラを検出して、それらとの位置関係から遺構の年代に関する資料を採集することにした。地質調査の対象とした地点は、18区南壁である。

2. 土層の層序

18区南壁の土層柱状図を、図1に示す。ここでは、下位より黄色軽石を少量含む黒土（層厚30cm以上、軽石の最大径2mm）、黄色軽石を比較的多く含む黒褐色土（層厚26cm、軽石の最大径4mm）、黄色軽石を比較的多く含む黒褐色土（層厚28cm、軽石の最大径3mm）、暗褐色土（層厚18cm）、黒褐色土（層厚20cm）、黄色軽石層（層厚4cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径2mm）、黄色軽石混じりの黒色土（層厚8cm）、黄褐色細粒火山灰層のブロック混じり黒褐色土（層厚10cm）、黄色軽石混じり黒褐色土（層厚26cm）、成層テフラ層、黒褐色砂質土（層厚7cm）、黒色砂質土（層厚11cm）、ロームブロック混じり黒褐色土（層厚6cm）、黒色土（層厚17cm）、黒褐色土（層厚21cm）、ロームブロック混じり黒褐色土（層厚23cm）、作土（層厚35cm）が認められた。

発掘調査では、これらの土層のうち、黄褐色細粒火山灰層のブロック混じり黒褐色土の直下、および成層したテフラ層の直下から畠状遺構が検出されている。また2層あるロームブロック混じりの黒褐色土のうち、下位の土層は14世紀の寺院に關係する盛土と考えられている。

土層断面の観察の結果、4層準に認められたテフラのうち、土壌中に含まれる最下位の黄色軽石は、比較的発砲のよいところから縄文時代に浅間火山から噴出した軽石群に由来するものと思われる。しかし約8,200年前の浅間—藤岡軽石（As-Fo、早田、1991）のほかのテフラについての層序や分布についてはまだ不明な点が多い。その上位の新鮮な黄色軽石は、その層相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井、1979）に同定される。またその上位の黄褐色細粒火山灰層は、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名榛名ニッ岳澁川テフラ層（Hr-FA、新井、1979 坂口、1986 早田、1989 町田・新井、1992）に同定される。

さらに最上位の成層した降下テフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐色粗粒軽石を混じえる褐色細粒軽石層（層厚0.8cm、軽石の最大径7mm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.1cm）、淘汰のよい黄色細粒軽石層（層厚1cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.6cm）、桃色がかった橙色粗粒火山灰

層(層厚2cm)、黄色細粒軽石層(層厚3cm、軽石の最大径4mm)から構成されている。このテフラ層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、新井、1979)に同定される。

3. 考察—遺構の構築年代について

和田山天神前遺跡の発掘調査では、前述のように黄褐色細粒火山灰層のブロック混じり黒褐色土の直下、および成層したテフラ層の直下の2層準から畠状遺構が検出されている。また2層あるロームブロック混じり黒褐色土のうち、下位の土層は14世紀の寺院に関係する盛土と考えられている。黄褐色細粒火山灰層のブロック混じり黒褐色土の直下から検出された畠状遺構については、火山灰層がHr-FAに同定されたことからHr-FAの直下の畠の可能性が大きいと考えられる。ただしHr-FAがブロック状に認められることから、Hr-FA堆積後でAs-B堆積前の畠の耕作の痕跡の可能性も完全に否定できないと考えられる。

一方、上位の畠状遺構はAs-Bに直接覆われていることから、As-Bの堆積により埋没した畠と考えることができる。なお14世紀と年代が推定されている盛土は、As-Bの上位にあることから1108(天仁元)年以降のものと考えられ、発掘調査による推定年代と矛盾しない。

4. 小 結

和田山天神前遺跡18区において地質調査により土層断面の記載を行った。その結果、下位より縄文時代に浅間火山から噴出したと考えられる軽石、浅間C軽石(As-C、4世紀中葉)、榛名榛名二ツ岳沢川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B、1108年)が検出された。これらのテフラとの層位関係から、発掘調査により検出された2層準の畠状遺構は、Hr-FA直下とAs-B直下に層位があるものと考えられる。なお前者については、Hr-FA上位の畠状の痕跡の可能性も考えられる。また発掘調査により14世紀と推定された盛土の年代は、As-Bの上位にある層位と矛盾しない。

文献

- 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、No157、pp.41-52。
 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会、p.276。
 坂口 一(1986) 榛名榛名二ツ岳起源F A・F P層下の土器器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」、pp.103-119。
 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究、27、pp.297-312。
 早田 勉(1991) 浅間火山の生い立ち。佐久考古通信、No53、pp.2-7。

II. 和田山天神前遺跡の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体(プラント・オパール)分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

和田山天神遺跡の発掘調査では、Hr-FA直下とAs-B直下から畠状遺構が検出された。そこで、これらの遺構について分析を行い、イネ科栽培植物の検出および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は、18区南壁で6点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。また、As-B直下の畠状遺構では畝部や畝間部から5点、As-B直下の畠状遺構では畝部や畝間部などから6点が採取された。試料は17点である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1979)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105°C・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μm 、約0.02g)
 - ※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHZ・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20 μm 以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を主な対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析資料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群については定量を行い、その結果を表1および図1～3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族（ヒエ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、くさび型、Aタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、基部起源、未分類等
〔樹木〕

はめ給バズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものは、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとキビ族が検出された。

イネは18区南壁の Hr-FA 混在層（試料4）と As-B の上位層（試料1）および As-B 直下の晶状遺構（試料2～4）から検出された。密度はいずれも1,000個/g未満と低い値であるが、晶状遺構については直上を As-B 層で覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入したことは考えにくい。したがって、同遺構の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

キビ族は、18区南壁の As-B 直下層（試料3）および As-B 直下の晶状遺構（試料4、5）から検出された。キビ族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない（杉山他、1988）。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、同遺構でヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、Aタイプや未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分析群は主にイネ科植物に限定されているため、根菜類などの農作物は分析の対象外となっている。

(2) 植物珪酸体分析からみた植生・環境

上記以外の分類群では、Hr-FA 直下および As-B 直下とも棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族（ススキ属など）やウシクサ族型、ネザサ節型なども比較的多く検出された。ウシクサ族にはススキ属やチガヤ属、サトウキビ属などが含まれるが、植物珪酸体の形状からここで検出されたものは、そのほとんどがススキ属に由来するものと考えられる。また、ウシクサ族型としたものの中にもススキ属が含まれている可能性があり、棒状珪酸体もその大半がススキ属の結合組織細胞に由来するものと考えられる。

なお、Hr-FA 直下および As-B 直下では、イネ科以外にもブナ科のブナ属やコナラ属に由来すると考えられる植物珪酸体が少量検出された。樹木についてはイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量がかなり低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原するには、他の分類群よりも過大に評価する必要があら

主な分類群の推定生産量(図の右側)によると、Hr-FA直下およびAs-B直下ともウシクサ族(ススキ属など)が卓越しており、ネザサ節型がこれに次いで多くなっていることが分かる。

以上の結果から、Hr-FA直下層およびAs-B直下層の堆積当時は、周辺はススキ属を主体としてネザサ節なども見られるイネ科植生であったものと推定される。これらの植物は日当たりの悪い林床では生育が困難であることから、調査区周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと考えられる。なお、遺跡周辺ではブナ属やコナラ属などの落葉広葉樹もある程度生育していたものと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、As-B直下の畠状遺構ではイネやキビ族(ヒエ属など)が栽培されていた可能性が認められたが、Hr-FA直下の畠状遺構からはイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。当時の調査区周辺では、ススキ属を主体としてネザサ節なども見られる草原植生が継続されていたと考えられ、遺跡周辺では、ブナ属やコナラ属などの落葉広葉樹もある程度生育していたものと推定される。

参考文献

- 杉山慎二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究、第2号:p.27-37。
 杉山慎二(1987) タケ茎科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号:p.70-83。
 藤原広志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学、9:p.15-29。
 藤原広志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(Osativa L.)生産総量の推定—。考古学と自然科学、12:p.29-41。
 杉山慎二・松田隆二・藤原広志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕遺跡のための基礎資料として—。考古学と自然科学、20:p.81-92。
 近藤麻三・ピアソン女子(1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)—双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について—。帯広畜産大学研究報、12:p.217-229。



表1 植物珪酸体分析結果

検出濃度 (単位: >100ppm/g)

分類群	18区南壁						As-B直下層					Hr-F直下層					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
イネ科																	
キビ属 (ヒモ属など)	7				7		8	7	8								
ワタ科					29												
ワタ科属 (ススキ属など)	104	49	118	46	171	71	189	196	174	278	86	116	173	142	60	125	154
キビ科属	7	8	11	11	11	11	7	8	11	11	11	7	8	11	11	11	11
ワタ科属	141	71	438	359	573	357	516	661	820	790	479	426	342	517	373	479	637
くさび形																	
クサビ																	
クサビ	37		37	37	37	7	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37
タマゴ																	
キザヤコ	52		215	73	106	109	80	225	209	55	141	93	110	120	73	116	146
アマザラ																	
水引	37		67	67	67	160	66	155	164	125	86	93	71	67	197	74	118
その他のイネ科																	
野原もみ	82	8	96	73	36	80	51	15	33	23	70	6	22	33	22	41	
棒状珪酸体	512	119	1253	1004	1304	1179	1177	1402	1477	1454	1169	1255	1040	1320	1033	677	1559
多角形																	
水引	809	134	890	806	867	815	843	844	949	891	830	844	911	832	720	656	1606
穀米起源																	
はちまき																	
多角形																	
植物珪酸体総数	1760	379	3228	3548	3197	2860	2914	3545	4138	3722	2807	2943	2638	3074	2472	2431	3985
おもな分類群の検定生産量	(単位: kg/m ² ・cm)																
イネ	0.22				0.22		0.23	0.22	0.23								
キビ属 (ヒモ属など)					0.62				0.66	0.66							
ワタ科					1.85				0.49								
ワタ科属 (ススキ属など)	1.29	0.49	2.21	0.82	1.50	0.90	1.35	2.30	2.40	3.20	1.47	1.44	1.52	1.77	0.74	1.55	1.90
アマザラ	0.25		1.03	0.35	0.51	0.52	0.38	1.08	1.00	0.76	0.68	0.45	0.53	0.58	0.35	0.57	0.70
クサビ					0.36	0.06	0.72	0.05	0.12	0.11							

* 測定値を1.0と仮定して算出。



図1 18区南壁の植物珪酸体分析結果

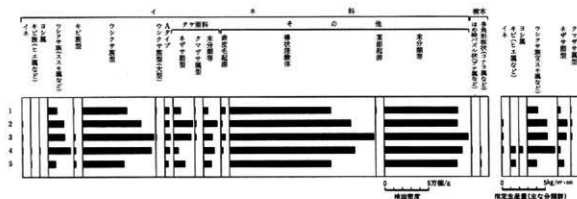


図2 As-B直下層の植物珪酸体分析結果

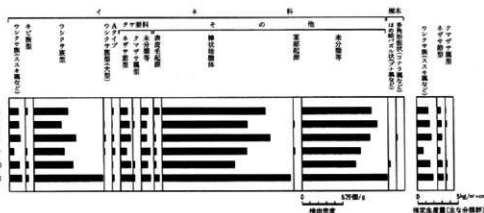


図3 Hr-FA直下層の植物珪酸体分析結果

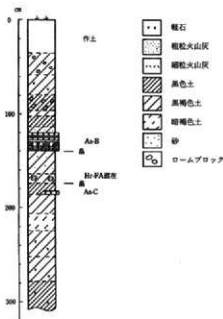
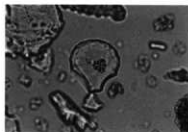


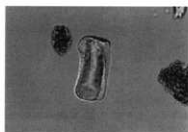
図4 18区南壁の土層柱状図

植物珪酸体の顕微鏡写真 (倍率はすべて400倍)

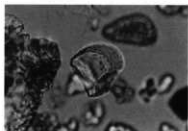
No	分類群	地点	試料名
1	イネ	18区南壁	4
2	イネ	As-B直下層	4
3	キビ族 (ヒエ属など)	As-B直下層	5
4	ウシクサ族 (スキ属など)	18区南壁	2
5	ウシクサ族型 (大型)	18区南壁	6
6	くさび型	18区南壁	3
7	イネ科Aタイプ	As-B直下層	5
8	ネザサ節型	18区南壁	3
9	ネザサ節型	As-B直下層	2
10	クマザサ属型	18区南壁	6
11	表皮毛起源	As-B直下層	1
12	多角形板状 (コナラ属など)	As-B直下層	4



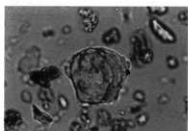
1 イネ



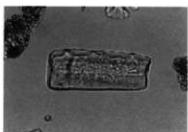
7 イネ科Aタイプ



2 イネ



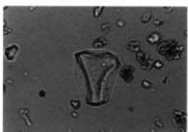
8 ネザサ節型



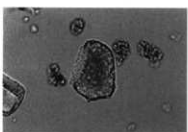
3 キビ属



9 ネザサ節型



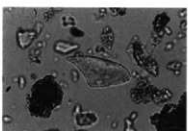
4 ウシクサ属



10 クマザサ属型



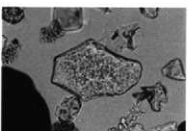
5 ウシクサ族型



11 表皮毛起源



6 くさび型



12 多角形板状

和田山天神前遺跡出土瓦の材料分析

藤根 久・古橋美智子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

和田山古墳群は、榛名山南麓の群馬県箕郷町大字和田山地区内に所在する旧石器時代以降の遺跡からなる複合遺跡である。和田山地区には、多くの古墳が所在する地域として知られているが、調査では室町時代とされる瓦窯跡が検出された。

ここでは、窯跡（165土坑）あるいは建物跡から出土した瓦について、その材料の検討を行った。

2. 分析試料

検討した試料は、瓦窯跡および建物跡などから出土した瓦6点と瓦窯の窯体である（第1表）。なお、焼物の材料について調べるため、土器と同様に材料の粘土および混和材等を示す胎土と言う用語を使用した。

第1表 材料を検討した瓦および窯体試料

番号	出土地点	種類	備考
1	H S-120-13-18区、2号建物P-261	瓦	黒灰色
2	H S-120-13-18区、2号建物P-322	瓦	黒灰色
3	H S-120、165土坑	瓦	淡褐色
4	H S-120、165土坑	瓦	黒灰色
5	H S-120-13-18区、1号建物	瓦	小
6	H S-120-13-18区、1号建物	瓦	大
7	H S-120、165土坑	窯体	

試料は、次の手順によって偏光顕微鏡観察用の薄片各1枚づつ作成した。

- (1) 試料は、岩石カッターなどで2×3cm程度の大きさに整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、平面を作成した後エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理した。
- (2) これらは、精密岩石薄片作製機やガラス板などを用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。
- (3) 固化後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板を用いて厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100 μ m 格子目盛を用いて任意の位置における約50 μ m (0.05mm) 以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50 μ m前後）を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子あるいは特徴的な粒子等の特徴も観察・記載した。

3. 粒子分類群の記載

細粒～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるために同定が困難である

場合が多い。特に岩石片の場合、岩石片中に含まれる鉱物の数が極めて少なく、岩石名を決定することが事実上不可能であることが多い。ここでは、岩石名を決定せず、岩石片を構成する鉱物や構造の特徴に基づいて分類した(菱田ほか、1993)。なお、胎土の特徴を抽出するために鉱物や岩石片以外の生物起源の微化石類も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻を持つ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域まで広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境を持つ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復元が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(海水種)・珪藻化石(汽水種)・珪藻化石(淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生息する。

[孢子化石]

孢子化石は、珪酸質と思われる直径10～50 μm 前後の小型の無色透明の球状粒子である。これらは、土壌中にも含まれるが、水成堆積物中で多く見られることから、水成環境を指標する可能性がある。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によって異なるが、主に約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や逆鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶のように光学的特徴を持たないものは石英との区別がしがたいためこれを一括して扱う。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母類が包含されている石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。

斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円上の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。

カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すも

のに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（しまま模様をしたもので微象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質砂質の変成岩などに産する。ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する課程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質あるいは砂質の変成岩及び堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。また、雲母類が放射状に複合したものを放射状複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として $\text{SiO}_2\%$ が中間から少ない火山岩によく見られ、 $\text{SiO}_2\%$ のもっとも少ない火成岩や変成岩にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス]

透明の非結晶の物質で、電球のガラスの破片のような薄くて湾曲した（バブル型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分とが明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。なお、発泡形態を示す斑晶質を発泡斑晶質とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒のものから細粒のものまで様々である。ここでは、便宜的に粒子中の最小石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細とし、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつものである。含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

解放ニコルのみ、直交ニコルのいずれにおいても不透明なものや、変質のため鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

4. 各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(第2表、第1図)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

№1：100～150 μm が多い(最大粒径2mm)。複合石英類(微細)＞斑晶質＞完晶質＞発泡斑晶質、石英・長石類、砂岩質、複合石英類、単斜輝石、斜方輝石、ガラス、斜長石(累帯)、ジルコン、珪藻化石(淡水種湖沼沼沢湿地指標種群 *Melosira ambi g ua*, *Eunotia* 属、不明種、砂粒付着不明種)、植物珪酸体化石、植物遺体

№2：50～100 μm が多い(最大粒径1.3mm)。複合石英類(微細)＞斑晶質＞完晶質＞砂岩質、石英・長石類、発泡斑晶質、複合鉱物類(含輝石類)、複合石英類、単斜輝石、斜方輝石、斜長石(双晶)、斜長石(累帯)、ガラス、珪藻化石(淡水種 *Amphora ovalis var. libyca*, *Synedra ulna*、陸域指標種群 *Pinnularia borealis*、不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石

№3：50～100 μm が多い(最大粒径1.7mm)。複合石英類(微細)＞斑晶質＞完晶質＞複合鉱物類(含輝石類)、砂岩質、発泡斑晶質、石英・長石類、斜方輝石、カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属、陸域指標種群 *Pinnularia borealis*、砂粒付着陸域指標種群 *Pinnularia borealis*, *Pinnularia obscura*)、胞子化石、植物珪酸体化石

№4：50～150 μm が多い(最大粒径2.4mm)。複合石英類(微細)＞完晶質＞斑晶質＞砂岩質、複合鉱物類(含輝石類)、角閃石類、石英・長石類、斜長石(双晶)、斜長石(累帯)、ガラス、発泡斑晶質、珪藻化石(淡水種 *Amphora ovalis var. libyca*, *Synedra ulna*, *Diploneis ovalis*, *Caloneis lauta*、陸域指標種群 *Pinnularia borealis*、不明種)、植物珪酸体化石、植物遺体

№5：50～100 μm が多い(最大粒径3.7mm)。複合石英類(微細)＞斑晶質＞完晶質、複合石英類、発泡斑晶質、

石英・長石類、単斜輝石、斜長石（双晶）、ガラス、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Caloneis* 属、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*）、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

- No 6 : 50~100 μm が多い(最大粒径1.7mm)。完晶質>斑晶質>石英複合類(微細)、発泡斑晶質、複合鉱物類(含雲母類)、複合石英類、石英・長石類、カリ長石(微斜長石)、斜長石(双晶)、ガラス、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*)、胞子化石、植物珪酸体化石
- No 7 : 50 μm 前後と300~500 μm が多い(最大粒径4.9mm)。複合石英類(微細)>斑晶質>完晶質、複合石英類、砂岩質、斜長石(双晶)、斜長石(累帯)、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、石英・長石類、ガラス、珪藻化石(陸域指標種群 *Pinnularia borealis*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

5. 化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石などが検出された。これら微化石の大きさは、珪藻化石が10~数100 μm (実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm 程度)、放散虫化石が数百 μm 、骨針化石が10~100 μm 前後である(植物珪酸体化石が10~50 μm 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9~62.5 μm 、砂が62.5 μm ~2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は瓦胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物に含まれていること、製作用場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、a) 淡水成粘土を用いた瓦、b) 水成粘土を用いた窯体、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。

a) 淡水成粘土を用いた瓦 (No 1~No 6)

これらの瓦胎土中には、淡水種珪藻化石の *Pinnularia* 属や *Ecnotia* 属などが含まれる。これらの珪藻化石は多くは含まれないが、沼沢地などの淡水環境で生育する珪藻種であることから、淡水環境で堆積した粘土を用いていると推定される。

b) 水成粘土を用いた窯体 (No 7)

この窯体胎土中には、骨針化石が含まれる。ただし、この骨針化石は、海水域に多く見られるものの淡水域にも見られることから水域に堆積した粘土であると推定される。

6. 砂粒組成による分類

ここで記載された大型の岩石片は、岩石名を決定するには細粒であるが、その起源を推定する程度の構造や組織を示している。ここでは推定した起源岩石類の組合せにより胎土中の砂粒を分類した。基準として用いた分類群は、複合石英類(微細)や砂岩質が堆積岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、複合石英類(大型・含雲母類・含輝石類・含角閃石類)が深成岩類、ガラスや発泡斑晶質がテフラとしてそれぞれ推定した(第3表)。

これらの胎土中の砂粒組成は、以下に示すように同様の砂粒組成を示すことから、ここではA群とした。

[A群: No 1～No 7]

これらの胎土中には、主に堆積岩類や火山岩類（テフラも含む）から構成され、少ないものの深成岩類が含まれる。

第2表 瓦および窯体試料の材料と特徴

番号	出土地点	種類	粘土 分類一種類	分類一特徴	砂 (>は極端に多い場合を示す)	粒 (>は極端に多い場合を示す)
1	2号建物、P-261	瓦	○ 淡水成	A 堆積岩類、火山岩類>	深成岩類、テフラ	
2	2号建物、P-322	瓦	○ 淡水成	A 堆積岩類、火山岩類>	深成岩類、テフラ	
3	165号土坑	瓦	○ 淡水成	A 堆積岩類、火山岩類>	深成岩類、テフラ	
4	165号土坑	瓦	○ 淡水成	A 堆積岩類、火山岩類>	深成岩類、テフラ	
5	1号建物	瓦	○ 淡水成	A 堆積岩類、火山岩類>	深成岩類、テフラ	
6	1号建物	瓦	○ 淡水成	A 堆積岩類、火山岩類>	深成岩類、テフラ	
7	165号土坑	窯体	□ 水成	A 堆積岩類、火山岩類>	深成岩類、テフラ	

7. 考察

一般的に瓦胎土は、高温焼成されているため、珪酸化石はもとより石英粒以外の砂粒は溶けている場合が多い。ここで検討した試料は、肉眼観察によりある程度焼成温度が低いことが予想されたため、6試料の瓦と窯体について、粘土材料などについての検討を行った。

その結果、瓦あるいは窯体の粘土材料は、窯体が水成粘土であるほかは、瓦はいずれも淡水成粘土を用い、堆積岩類や火山岩類を主体とした砂粒組成を示すことが分かった。このことから、出土遺構は異なるものの概ね同様の材料を用いたことが推定される。

須恵器窯などと同様、瓦窯の築窯は、利用可能な粘土材料や燃料材などの木材資源などが必ず必要であり、築窯に適した地形環境や水場が近い場所といった環境も必要である。165号土坑は、窯体の一部や瓦が出土する遺構であることから、この場所で瓦が焼かれたことは間違いない。遺跡周辺では、榛名白川が比較的大きい谷を形成していることから、こうした低地域では小規模ではあるものの低地性堆積物が堆積する可能性は高いと考えられる。ここで示した淡水成粘土は、概ね沼沢地成を示すことから、これら周辺の低地性の粘土を利用したものと推定される。

なお、瓦表面には、肉眼的に黒色系の輝石類を多く含む砂粒質が付着するが、これら砂粒は一般的に離れ砂と呼ばれ、瓦同士の間を密着を防止するために意図的に施した砂粒と考えられている。この地域は、榛名山麓であるため火山岩類中の輝石類を特徴的に含む河川砂を用いていたことが予想される。

最近では、弥生あるいは古墳時代の土器の材料については、自然科学的分析により用いた粘土材料についてその種類が分かってきた(車崎ほか、1996; 藤根・小坂、1997)。土器はもとより瓦などの焼き物について、これまで如何なる種類の粘土あるいは混和材が用いられていたかは全く不明であった。こうした材料についての研究は、焼き物の基本的な事柄であることから、今後こうした方面の調査・研究が必要と感じている。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古墳復元への応用。東北地理、42、2、73-88。
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編 (1981) 『増補改訂 地学事典』。平凡社、1612p。
 栗田 星・車崎正彦・松本 完・藤根 久 (1993) 岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—。日本文化

財科学会第10回大会研究発表要旨集、34-35。

藤根 久・小坂和夫 (1997) 生駒西麓(東大阪市)産の縄文土器の胎土材料一断層内物質の可能性一。第四紀研究、36、55-62。

小杉正人 (1988) 埴瀬の埴壇指標層群の設定と古埴壇復原への応用。第四紀研究、27、1-20。

車崎正彦・松本 完・藤根 久・栗田 豊・古橋美智子 (1996) 備土器胎土の材料一粘土の起源を中心に一。

分析へのコメント

1. 分析の意図

瓦窯は、1号・2号の建物に供給する瓦を焼いたことはまちがいない、大きくは胎土から見た供給関係を知ることにあった。

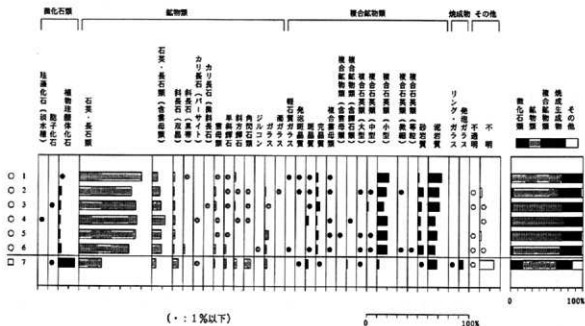
ここでは、さらに、隣接して粘土採掘域があることから、粘土の採掘、成型、焼成が現地で瓦が一貫生産されたのではないかと考えた。

2. 結果

粘土採掘域は、ローム層中の日光色帯を目的としたことが掘削の様子から判明している。分析では、ケイソウを含む水成粘土が瓦の材料であるということで、採掘され否定され別の用途を考える。最も、材料としての特質から現状では建物の壁土を想定しているが、遺構の実態としては乏しいのが実態である。

ケイソウを含む水成粘土の該当地域としては、至近距離では、榛名白川沿いの低地が知られる。地元の話では、16区南には、浅い沼があったとのことで、可能性としては高い。

また、2号建物が2度の再建をしていることから、1号建物との間で、瓦からみた時期差がつかめなかつたかと考えたが、結果としては、区分不可であった。

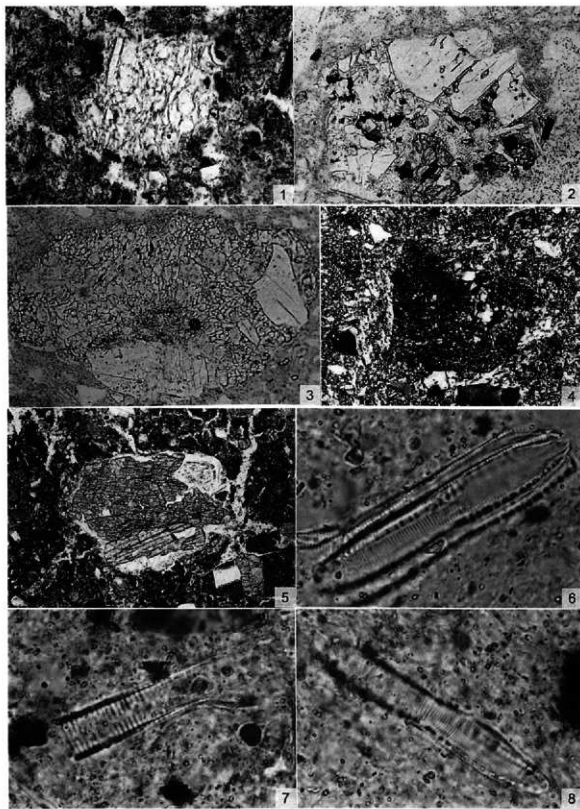


第1図 瓦および窯体胎土中の粒子組成図 (全分類群を基数とした百分率で表示)

【粘土の区分 (分析番号左)] ○: 淡水成粘土 (淡水珪藻化石の出現) □: 水成粘土 (骨針化石などの出現)

第3表 瓦および窯体胎土中の粒子組成表

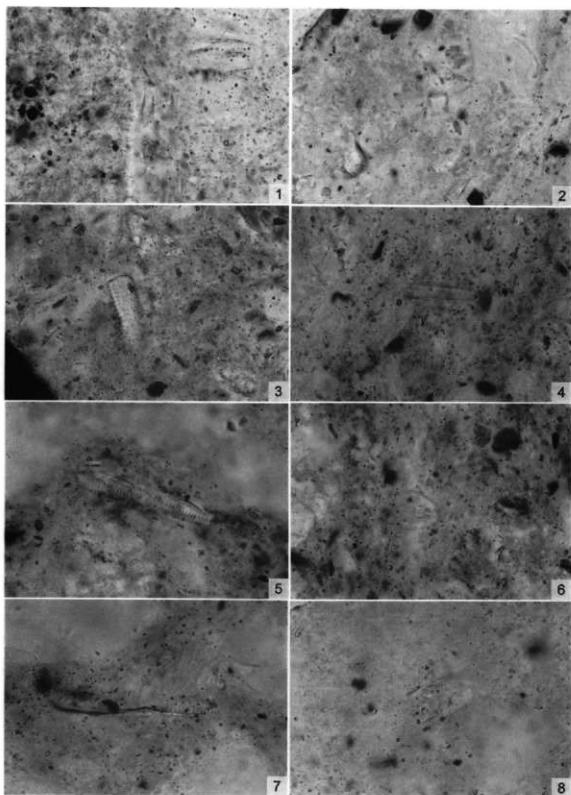
分類群	1	2	3	4	5	6	7
微化石類							
珪藻化石 (淡水種)	—	—	—	1	—	—	—
腔子化石	—	—	1	—	—	—	1
植物珪藻化石	2	8	6	5	5	7	31
鉱物類							
石英・長石類	170	134	158	153	148	114	43
石英・長石類 (含雲母類)	15	20	25	34	24	22	8
斜長石 (斑晶)	5	3	5	6	6	3	11
斜長石 (累帯)	2	—	—	—	—	4	—
カリ長石 (パーサイト)	—	—	—	1	—	—	1
カリ長石 (微斜長石)	—	—	1	—	—	—	—
雲母類	1	5	6	1	2	5	2
単斜輝石	1	1	2	—	1	5	5
斜方輝石	4	1	3	2	—	—	6
角閃石類	—	2	1	2	—	—	13
ジルコン	—	—	—	—	—	1	—
ガラス	—	3	2	—	10	4	5
濁ガラス	—	1	—	—	—	—	—
複合鉱物類							
軽石質ガラス	1	—	—	—	—	1	—
発泡塵品質	1	1	—	—	—	—	1
斑品質	1	1	2	8	—	1	5
完品質	6	6	11	3	7	4	1
複合雲母類	1	2	—	1	1	2	—
複合鉱物類 (含雲母類)	—	—	—	—	1	—	—
複合鉱物類 (含輝石類)	—	—	—	1	—	—	2
複合石英類 (大型)	—	2	—	—	1	2	1
複合石英類 (中型)	—	2	4	—	1	1	—
複合石英類 (小型)	33	24	19	28	28	24	4
複合石英類 (微細)	—	1	—	—	—	2	—
複合石英類 (等粒)	—	—	—	—	—	1	—
砂岩質	3	14	10	7	8	13	1
泥岩質	37	28	32	19	24	16	17
焼成生成物							
リング・ガラス	—	—	—	—	—	—	1
発泡ガラス	—	—	—	—	—	—	8
その他							
不透明	—	2	2	—	1	2	1
不明	—	5	1	2	4	2	27
総ポイント数	283	266	291	274	272	236	195



図版1 瓦および窯体胎土中の粒子顕微鏡写真

(スケール：1：100 μ m、2～4：200 μ m、5：40 μ m、6～8：20 μ m)

- 1, 軽石型ガラス No 7 2, 完晶質 No 6 3, 奥泡坭晶質 No 1 4, 複合石英類 (微細) No 6 5, 複合鉱物類 (含輝石類) No 7
6, 珪藻化石 (*Hantzschia amphioxys*) No 5 7, 珪藻化石 (*Synedra ulva*) No 7 8, 珪藻化石 (*Hantzschia amphioxys*) No 6



図版2 瓦および窯体胎土中の粒子顕微鏡写真 (スケール: 40 μ m)

- | | |
|--|--|
| 1. 砂粒付着珪藻化石 (<i>Hantzschia amphioxys</i>) No 1 | 2. 珪藻化石 (<i>Melosira ambigua</i>) No 1 |
| 3. 珪藻化石 (<i>Pinnularia borealis</i>) No 2 | 4. 珪藻化石 (<i>Calocleis lutea</i>) No 4 |
| 5. 珪藻化石 (<i>Pinnularia</i> 属) No 4 | 6. 珪藻化石 (<i>Diploneis ovalis</i>) No 4 |
| 7. 珪藻化石 (<i>Pinnularia</i> 属) No 4 | 8. 珪藻化石 (<i>Pinnularia</i> 属) No 4 |

和田山天神前遺跡の瓦窯の燃料

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡の165号土坑から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。当遺構は平安時代の瓦窯であり、炭化材は窯の焚口から採取されたものである。室町時代の瓦窯ではどのような樹種が燃料材として利用されたのか、発掘現場の試料からはあまり知られていない。燃料材の樹種を明らかにすることにより、当時の遺跡周辺に成立していた植生の一端を知ることができ、またそれによって生業活動と自然環境との関わりを考える資料が得られると思われる。当遺跡は群馬県箕郷町大字和田山字天神ほかに所在し、榛名山南麓の丘陵末端部（標高約180m）に立地し、現在の周辺植生はクスギやコナラを主体とする典型的な雑木林である。

2. 試料と炭化材樹種同定の方法

試料は、瓦窯の焚口の165号土坑から採取された炭化材で、比較的大きな複数の破片が2つのビニール袋に入っていた。先ず同定可能な破片をできるだけ多く観察し、どのような分類群が検出されるかその構成を明らかにしようとした。

まず炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安を付ける。アカガシ亜属・コナラ節・クスギ節・クリは横断面の管孔配列が特徴的であり、実体顕微鏡下の観察で同定可能であるが、それ以外の分類群については3方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定した。

横断面の観察による大まかな分類では、垂直樹脂道を持つ針葉樹材とケヤキと予想される環孔材そしてクスギ節が多く、これらの破片は年輪幅の特徴や形状から同一のものが割れたと思われるものもあったので破片数は数えなかった。残りの炭化材は各分類群ごとに分けビニール袋に入れ、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3. 結果とまとめ

検出された分類群は、針葉樹のマツ属複雑管束亜属と、落葉広葉樹のクスギ節・クリ・ケヤキ・サクラ属・カエデ属の6分類群であった。マツ属複雑管束亜属とクスギ節とケヤキの3分類群の材が、量的に多かった。炭化材のほとんどはもとの形状が不明な破片であったが、年輪線のカーブが緩やかで放射方向の径が2～3cmで20年輪以上が数えられる破片や、放射方向に沿って割られたようなマツ属複雑管束亜属の破片も見られ、比較的大きな材の破片が多い傾向が見られた。結果を表1にまとめ、同定の根拠を記載する。

表1 和田山天神前遺跡の瓦窯（室町時代）の燃料材樹種同定結果

地区・遺構	樹 種	形 状 ・ 備 考
焚口165号土坑	マツ属複雑管束亜属	径4.5cm前後の破片多数
焚口165号土坑	クスギ節	径1～2cm前後の破片多数
焚口165号土坑	クリ	径1～2cmの破片2
焚口165号土坑	ケヤキ	直径1.7cmの丸木1と径3cm前後の破片多数
焚口165号土坑	サクラ属	径2.6cmの樹皮付き破片1
焚口165号土坑	カエデ属	径2～3cmの破片2

同定された樹種の材組織記

1) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 図版1 1a-1c. (165号土坑)

垂直・水平樹脂がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部の量は多く、垂直樹脂道はおもに晩材部にある。分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁上には鱗状の肥厚があることから、マツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツであることが判る。アカマツは放射仮道管の内壁が鋭利な鋸歯状をなし、クロマツは比較的ゆるやかなであるが、肥厚の程度に差や変化がありしばしば識別が困難な場合も多い。特に炭化材では細胞内に張り出した肥厚部分は崩れて見られないためアカマツとクロマツの種の識別はできなかった。

アカマツとクロマツは暖帯から温帯下部に生育し、アカマツは人間活動との関係が深く二次林に多く、過去には現在ほど広くは分布していなかった。クロマツは海岸部に分布するといわれるが内陸部にもみられる。燃料材としては火力が高くなるため有用である。

2) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q. subgen. Quercus sect. Cerris* ブナ科 図版1 2a.2-c. (165号土坑)

年輪の始めに大型の管孔が1〜3層配列し徐々に径を減じ、晩材部では孔口が丸く厚壁の小型管孔が単独で放射方向に配列し、広放射組織があり、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがあ、道管との壁孔は櫛状である。

クヌギ節はドングリをつける落葉性の仲間で、クヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の丘陵から山林に生育する高木で特に二次林に多い。関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重厚で割裂性が良く、関東地方の遺跡では住居材や燃料材としてよく使用されている。現在は薪炭材として重要であるが建築材としては一般的ではない。

3) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c. (165号土坑)

年輪の始めに大型の管孔が密接して配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

4) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版2 4a-4c. (165号土坑)

年輪の始めに大型の管孔が1〜2層配列し、その後小型の管孔が塊状に集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1〜5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。エノキ属の材も同様な形質であるが、放射組織に鞘細胞がある点でケヤキと識別される。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。

5) サクラ属 *Prunus* バラ科 図版2 5a-5c. (165号土坑)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後は放射方向・接線方向・斜状に複合して全体的にうねるように分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、約5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の丘陵地から山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な構成属である。

6) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版2 6a-6c. (165号土坑)

やや小型の管孔が単独または2〜3個が放射方向に複合して散在し、年輪界は不明瞭であり、帯状の柔組

織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～5細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の丘陵地から山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成属であり、約26種と多くの変種が知られている。

4. まとめ

中世の瓦窯の燃料材樹種はほとんど知られていない。当遺跡の調査からは、マツ属複雑管束亜属とクスギ節そしてケヤキが多く検出され、これらが主要な燃料材であったことが判った。そのほかにサクラ属とカエデ属が検出された。いずれの樹種も丘陵地から低山地の落葉広葉樹林に普通で、かつ二次林の主要構成種である点が共通している。

天代瓦窯遺跡（群馬県吾妻郡中之条町）の奈良時代から平安時代の瓦窯内の炭化材はクリとコナラであり（山田、1993）調査試料数が少ないので当遺跡の樹種構成と同等には比較できないが、マツは報告されていない。関東地域では花粉分析の資料からは中世以降にマツ林が増えはじめたと見られ、その原因として人間活動による第Ⅱ植生干渉が台地や丘陵地にも広く及んだためと考えられ、開けた陽地や乾燥地に強いマツが増え始めたがマツ林の形成は著しいほどではなく限られた土地のみで成立していったと考えられている（辻、1987）。また山口・千野（1990）は、窯業の燃料材樹種調査からマツ林の形成とマツ材の燃料材への利用を調べた結果、近世以前は二葉松類が使用されていた窯跡の燃料材を見ても、二葉松が選択的に用いられた傾向はなく数種類の広葉樹材も一緒に用いられていた事例が多いことを示した。今後も、一定地域で時期の異なる瓦窯の燃料材樹種を調査し資料を蓄積することにより、燃料材の樹種と周辺植生との相互関係が明らかに、また人間活動と自然環境との関わりも見えてくると思われる。

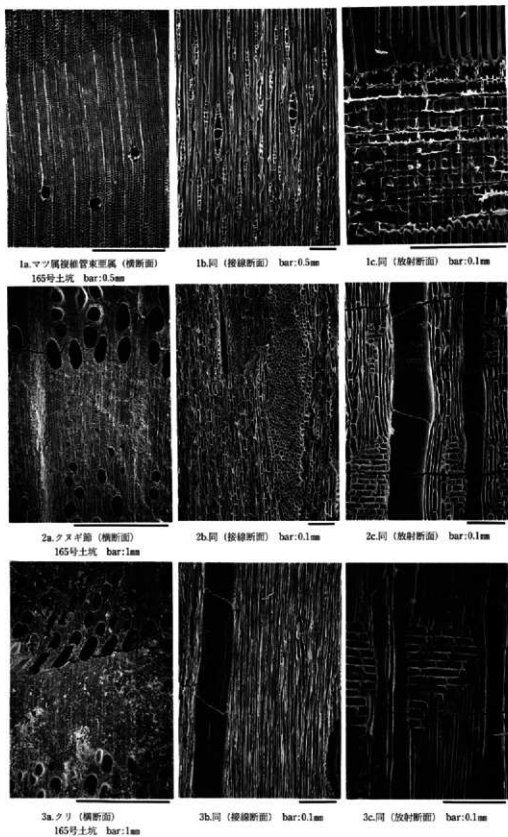
引用文献

- 山田昌久（1993）「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成一用材から見た人間・植物関係史」、植生史研究特別第1号、242pp。
 辻 誠一郎（1987）最終間氷期以降の植生史と変化模式、「百年千年万年後の日本の自然と人類」、157-183、日本第四紀学会 古今書院。
 山口要一・千野裕道（1990）マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について、「研究論集 Ⅷ」、東京都埋蔵文化財センター

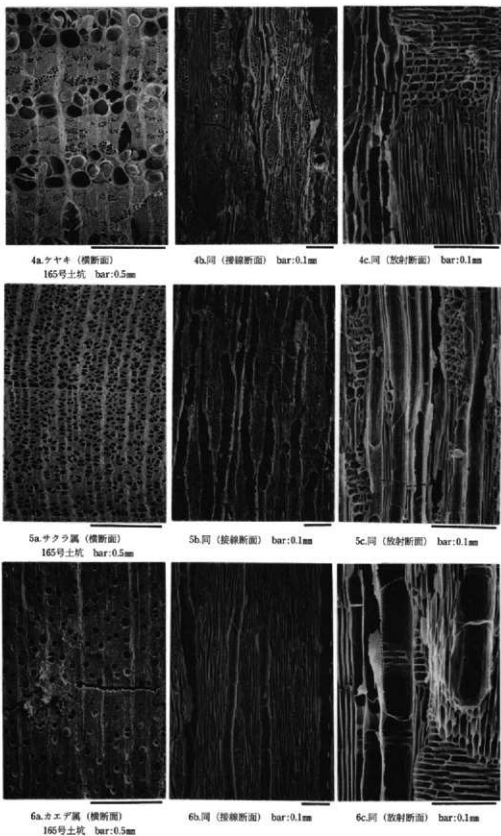


写真上 165号土坑燃焼室と焼成室 炭化材は燃焼室で出土

写真下 165号土坑焼成室



図版1 和田山天神前遺跡165号土坑出土炭化材顕微鏡写真



図版 2 和田山天神前遺跡165号土坑出土炭化材顕微鏡写真

群馬県和田山天神前遺跡から出土した水瓶の 材質に関する自然科学的測定

東京国立文化財研究所 平尾良光・榎本淳子・小林直子

1 はじめに

群馬県埋蔵文化財調査事業団の関邦一氏の依頼により、群馬県箕郷町の和田山天神前遺跡94号土坑から出土した水瓶について、化学組成の測定および産地推定を行った。

2 資料

資料は信貴形水瓶と呼ばれている完形の金属製品であり、写真1で示される。出土地点は中世の館跡の一部と推定されており、古墳を削平して館を造成したと確認されているという。関氏によれば、水瓶の形式やこうした出土状況を総括すると「中世の資料」であろうとのことである。

資料は銅で全体が覆われており、細部の模様が分からない状態である。この資料について別铸造の可能性がある水瓶本体の底面、注口、蓋の獅子左肩部、蓋側面の5箇所を選んだ。

3 分析法

3・1 蛍光X線分析法

化学組成の測定には非破壊で分析できる蛍光X線分析法を用いた〔文献1〕。蛍光X線法による化学組成の測定はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSで行った。機器の使用条件はスカンジウム管球を用い、60kV、50mAで一次X線を発生させて、資料に照射した。資料から発生する二次X線は元素毎に波長が異なるため、フッ化リチウムの結晶でX線を角度毎に分散させ、シンチレーションカウンター・ガスフローカウンターによって分散角度におけるX線強度を測定した。

3・2 質量分析法

3.2.1 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した〔文献3〕。一般的に鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴的な値を示すということが今までの研究でわかっている。そこで、鉛鉱山の違いが鉛同位体に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を反映すると考えられる。弥生時代の青銅器には鉛が主成分として5～20%含まれている。これは鉱山から産出された鉛が加えられたと理解できるので、まさに鉛鉱山の歴史を含んだ鉛といえる。一方鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、1マイクログラム（1gの百分の1）の鉛量があれば十分である。試料となる鉛は青銅の金属部分でも錆部分でも、その同位体比は変わらないと示されているので、資料からは錆の微量を採取するだけで十分である。それ故考古学的資料をほとんど損なうことなく測定できるので、この方法を本資料の原料産地の推定に利用した。資料から錆の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した。

3.2.2 鉛同位体比の測定

資料から採取した微量（約5mg）の錆を鉛同位体比測定用の試料とした。錆資料を石英製のピーカーに入れ、硝酸を加えて加熱、溶解した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解して回収した。0.4 μ gの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計 Sector-J に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200°Cに設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛 NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした〔文献2〕。

4 結果

4.1 蛍光X線分析

4.1.1 蛍光X線分析の結果

測定した4箇所部分およびその拡大写真をそれぞれ、写真2～9で示した。

蛍光X線分析法では、測定部表面から約100 μ mまでの深さの化学元素組成に関する情報を得られる。それ故、表面に錆などがあれば影響を受けやすく、化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。今回の水銀はいずれも錆の層をも含めた測定となったため、定性的な結果を次にまとめた。

測定された蛍光X線スペクトル図を図1a、b～図4a、bで示した。図の横軸は資料から発生したX線の分散された角度である。X線は元素毎に異なった角度に分散されるので、特定の波長は特定の元素を意味する。縦軸はX線の強度、即ち元素の量である。図のaは全体の様子であり、図のbは小さなピークを縦に拡大している。

検出された元素は測定した4箇所とも、銅、鉛、ヒ素が多く、鉄の他、極めて僅かな銀、スズである。アンチモン、水銀、金、亜鉛は見られなかった。銅のX線強度を100とした各元素の強度を表1で示した。

4.1.2 蛍光X線分析の所見

測定結果から判断すると、4箇所とも銅-鉛-ヒ素の合金と推定される。スズ、銀、鉄は銅の精錬時ににおける不純物であろう。測定箇所によっては各元素の量比が異なって見えるがこれは錆の影響とみることが出来る。それ故、各部分はよく似た化学組成であり、相互に関連した材料で作られていると推定される。従って各部位は同位一時期に関連して作られた可能性が高い。

4.2 鉛同位体比分析

4.2.1 鉛同位体比分析の結果

測定した5箇所部分を、写真10、11で示した。測定された鉛同位体比の値を表2で示した。これらの値を今までに得られている資料の値と比較して、原料産地を推定するために鉛同位体比の図で示した。

図5は縦軸が $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ の値である。この図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表し、今回の結果をこのなかにプロットした〔文献4～7〕。東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として分布する領域であり、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域であり、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域である。Dは朝鮮半島南部産の多鈕細文鏡と細形銅鏡が分布するラインを示すことが判っている。また、“a”は弥生時代の後期銅鐸が集中する特別な鉛を意